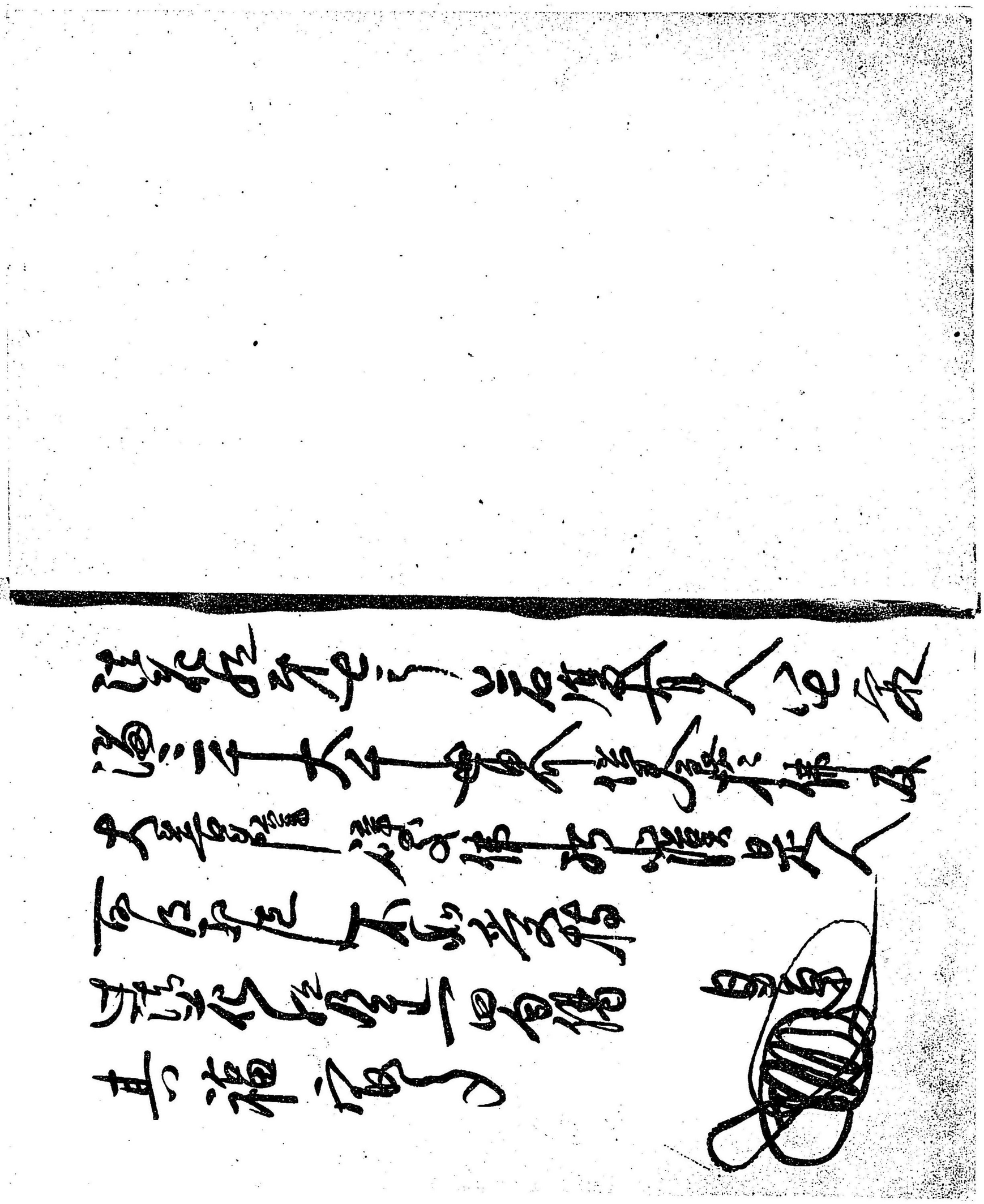
324-190

# 日蓮聖人の教義

一名『妙宗大意』

田中智學 著

明治
43. 3. 16
受入



# 聖詠

為我等法
才妙深奇
玄理無邊
孤高人間
和一の心

# 序　王

著者、謹みて、此書を讀まんとする人に告す。

本化妙宗は、あなたの宗旨であります。

明治庚戌三月

著者　虔識

# 例言

◉本化妙宗ハ、一切ノ人ノ奉ズベキ宗旨ナリ、本書ハ其理由ヲ説明センガ爲ニ出ヅ。

◉日本國民ハ、世界ノ他ノ國民ヨリ最先ニ之ヲ信奉シテ、或ル使命ヲ果スベキ先天ノ因縁ヲ有ス、又既ニ此正義ヲ奉ズルモノハ、義カナラズ率先啓導シテ、範ヲ未信者ニ示サヾルベカラズ、然ルニ底事ゾ、教徒ハ昏々トシテ罔ク、國民ハ茫々トシテ失ス、人ミナ正ニ背キ、世悉ク惡ニ歸ス、時ノ殃ナルカ、ソモ〳〵亦人ノ過ナルカ。

◉人誤テ宗門ヲ以テ信者ノ宗門ト爲ス、而シテソノ實ハ未ダ信ゼザル人々ノ爲メノ宗旨ナリ、隨テ日蓮聖人ハ、宗門ノ祖師ニアラズシテ、天下國家ノ祖師ナリ、此意義ヲ失スルガ故ニ、教徒ハ昏昧ニ墮シ、國民ハ今猶自ラ日本國ヲ解シ得ザルナリ。





◉教徒内ニ謬リ、國民外ニ惑フ、其ノ原因全ク教義ヲ知ラザルニ在リ、而シテ教義ノ會得セラレザリシハ、亦全ク適當ナル通俗解説ノ書ナカリシニ由ル、吾人深ク之ヲ遺憾トシ、爲ニ此書ヲ述作シテ、聊カソノ缺ヲ補ハントス、只予ノ淺學不才ニシテ文藻ニ乏シキ、以テ妙義ヲ光揚スルニ足ラザルヲ慨ム、若シ之ヲ讀ンデ得アラバ、是レ教義ソノモノヽ妙ナルニ由ル、若シ失アラバ是レ著者ノ不文ナルニ由ル、功ハ佛祖ニ存シ、過ハ我身ニ歸ス。

◉此書ハ多ク一般局外者及ビ初心ノ教徒ヲ對告衆トス、故ニ務メテ用語ヲ普通ニシ解説ヲ平明ニス、又已ムヲ得ザル條項ノ外ハ、成シ得ル限リ義門ノ細目ヲ避ケテ、專ラ大筋ヲ提擧スルニ止ム、故ニ正式ノ研究ニ資センニハ、アマリニ荒打ナレド、教義不慣ノモノガ、始メテ指ヲ染ムルニハ、是ニテホヾ事足ルベシ、設シ猶進ンデ正式ニ研究セントナラバ、『妙宗式目講義錄』(改題『本化宗學』)ヲ一讀スベシ、斯クシテ大體ニ通ジタル上、祖典本經ニ溯リ、古今ノ教籍ニ出入セバ、先ヅ地理ヲ知リテ而シテ後ニ實地ニ臨ムガ如ケン。

◉本書ハ素ヨリ大要ヲ一貫スルヲ主トシタレバ、深ク一義ノ玄奥ヲ悉ス能ハズ、讀者若シ予ノ所見ヲ通ジテ、教義ノ精要ヲ味ハントナラバ、宜シク一義專述ノ書ヲ參考スベシ、所謂法國冥合ノ『日本國ノ宗旨』ニ於ケル、人法感應ノ『末法ノ大導師』ニ於ケル國體解決及ビ世界統一主義ノ『勅敎玄義』『世界統一ノ天業』二書ニ於ケル、本化化導ノ『本化攝折論』ニ於ケル、祖業宗謨ノ『宗門之維新』ニ於ケル、解行信念ノ『敎徒ノ三大綱』及ビ『護法正議』等ニ於ケル、本尊勸請ノ『造立私議』ニ於ケル、修行ノ『妙行正軌』ニ於ケル如キ、各々相待チ相補テ聊カ深義ノ啓發ニ資スルコトヲ得ン。

◉本書第五篇以下ハ、刊行ノ間際ニ於テ俄カニ思立チ、聊カニテモ多ク讀者ヲ利セントヲ欲シテ加フル所、要項多々ナレドモ頁數限リアリ、力メテ節略ニ從フ、惟總ニ無キニ愈ルノミ、史傳ノ中、植中直齋ノ給書「天文法難」ト「大佛供養」ヲ加フベカリシガ、畫者ノ病ニ因リテ果サズ、他日重刊ノ時追補セント欲ス、又同篇中所載ノ「略年表」ハ、當時師子王文庫編輯局ニ於テ編纂中ナル「宗門年表」ヨリ主要ナルモノ若干ヲ抄出セシメテ、參考ノ小補ニ資ス、其他記傳史話書目等、イヅレモ文獻足ラズ材料給セザル中ニ於ケル突嗟ノ抄錄ナルヲ以テ、定メテ粗漏アラン、賢者請フ之ヲ訂セヨ。

◉本書ハ力メテ平易ヲ主トシタレドモ、猶全ク避ケ難キ術語及ビ義目ナキニアラズ、依テ爲ニ冠註ヲ設ケテ、一々コレヲ解釋ス、其ノ餘波、往々本文ノ餘蘊ヲ發シ、或ハ警策ヲ與フル等、マヽ意ヲ啓發ニ用フ、乃チ婆心ノ致ス所ノミ。

◉卷頭掲グル所ノ聖影ハ、予ガ監裁ノ下ニ、斯道ノ天才植中無畏鎧ノ研究拜寫ニ係ル所、蓋シ本化大佛師竹内久遠ノ彫刻聖像ト相待テ、實ニ天下ノ雙美タリ、次ニ掲ゲタル聖筆ハ、正中山藏寶、金珠女抄中ヨリ、ソノ所引藥王品ノ金文ヲ抄寫スル所。

◉本書ハ文章其他ニ於テ著者ノ意ニ充タザルモノ多シ、一々之ヲ更訂セントヲ時日之ヲ許サズ、依テ重刊ノ時ヲ俟テ漸次補修セント欲ス、獨リ振假

名ノ假名遣ヒハ始ヨリ純正ヲ期セズ、是レ素ト婦幼會讀ノ便ニ資スルニ過ギザルヲ以テナリ。

◉本書ハ洵ニ時世ノ要求ニ應ジテ出ヅ、然レドモ別シテ予ヲ起シタルモノハ、本書述作ノ請願者岡島伊八氏ナリ、而モ其動機及ビ經過ニ就テハ、一言セザルヲ得ザルモノアリ、依テ冊後附スルニ本書述作ノ緣起一篇ヲ以テス。

明治四十三年三月

著者識ス

此書刊行に際し、紙質製本を粗にして價を卑くせんといふ説と、價少しく高くとも之を美にせんといふ説とあり、予は思ふ所ありて後説を取る、酒や煙草の無益なるものにさへ相當の價を吝まぬ世なり、遠慮に及ばずとなり。又裝釘堅固にして美麗なるは繙讀に快く保存に耐久なり、むしろ德用とこそいふべけれ。表紙の模樣は、蓮華に菊を重ね、菊に櫻を重ぬ、蓮華は法華經を表し、菊は皇室を表し、櫻は日本民族を表す、即ち君民一致法國冥合の意匠に取る、植中無長鎧をして畫かしむる所なり。……（著者再識す）

# 日蓮聖人の教義

## 目次

### 第一篇　總要


○第一章　本書を讀むに就ての用意……（一）
（一）佛教の二大別……（一五）
（二）須く先づ本化妙宗を知るべし……（二五）
（三）本書の概觀……（三一）
○第二章　本化妙宗の名
（一）立名……（三三）
（二）本化と迹化との別……（三三）
（三）佛の本迹……（三四）
（四）佛と法との關係……（四〇）
（五）釋迦佛の顯本……（四四）
（六）本佛と本法と本化……

○第三章　本化妙宗の概要……（四六）
○第四章　佛教の大統
（一）三國流傳……（五六）
（二）正統の法系……（五九）
（三）一時的統一の破潰……（六三）
（四）反統一の根本誤想……（六八）
（五）世界の最大事實……（七三）

## 第二篇　教判

○第五章　本化妙宗の成立法義……（七七）
○第六章　五綱の名義……（八〇）
○第七章　教判を要する理由……（九二）
○第八章　五綱各論の一「教」
（一）教義と宗旨……（九六）
（二）教の種類……（九七）



其一　教法と施設……（九七）
其二　施教の類別……（一二五）
其三　教の所詮……（一三一）
（三）教の簡擇
其一　權と實……（一三六）
其二　本と迹……（一四〇）
其三　五段相對……（一五五）
其四　五重三段……（一五七）
其五　本門要付の大教法……（一六〇）
○第九章　五綱各論の二「機」
（一）教と機……（一四三）
（二）機の種類……（一四七）
其一　機根……（一七九）
其二　機類の直雜……（一四九）
其三　機緣の順逆……（一五一）
（三）機の生熟
其一　四悉の對機……（一五三）
其二　三益の進退……（一五四）

其三　末法下種の大化……（一六〇）
○第十章　五綱各論の三「時」
（一）時と教……（一六三）
（二）時と機……（一六五）
（三）時の類別
其一　正像末の三時……（一六六）
其二　五箇の五百歳……（一六九）
其三　佛滅時代の末法……（一七二）
其四　佛滅以後の末法……（一八〇）
○第十一章　五綱各論の四「國」
（一）國と教……（一八七）
（二）國と機……（一八八）
（三）國と時……（一八八）
（四）國の類別
其一　無道國……（一八九）
其二　外道國……（一九〇）
其三　小乘國……（一九〇）
其四　大乘國……（一九一）



其五　一乘國……（一九二）
（五）開顯妙國……（一九四）
○第十二章　五綱各論の五「序」
（一）教と序……（二〇〇）
（二）機と序……（二〇〇）
（三）時と序……（二〇一）
（四）國と序……（二〇一）
（五）宗教發展の各種場合……（二〇二）
（六）本化妙宗の興起……（二〇八）
○第十三章　五綱の結論
（一）能判と所判……（二一〇）
（二）五綱の大歸……（二一二）
（三）折伏立教……（二一五）
（四）四大格言……（二二一）

## 第三篇　宗旨

○第十四章　宗旨三秘の總論
(三)　三大秘法の名義……(三四六)
(二)　三秘と五綱との關係……(三五一)
(三)　三秘の原據……(三五三)
○第十五章　三秘各論の一「本門の本尊」
(一)　久遠本佛の正體……(三六〇)
(二)　本果妙證……(三六五)
(三)　本門本尊の尅體及形相
其一　本尊の圖式……(三六九)
其二　曼荼羅の意義……(三七一)
其三　本尊の事理人法……(三七四)
其四　本尊の歴配……(三八一)
其五　本尊の依文……(三八四)
(四)　本佛化せる十界……(三九四)
(五)　功德莊嚴の曼荼羅……(三九七)
○第十六章　三秘各論の二「本門の題目」
(一)　久遠本佛の妙智……(三〇四)





(二)　本因妙行……(三一二)
(三)　十界皆成の要法……(三一三)
(四)　本門壽量の肝心……(三一六)
(五)　妙法五字の理義
其一　眞理の名……(三二〇)
其二　妙法五字の略解……(三二四)
其三　萬法開顯の妙法……(三二九)
其四　妙の精義……(三四四)
其五　本門開顯……(三四八)
○第十七章　三秘各論の三「本門の戒壇」
(一)　久遠本佛の妙相……(三五六)
(二)　本國土妙……(三六四)
(三)　身土色心の妙化……(三六九)
(四)　即身成佛の妙業……(三七〇)
(五)　禁斷謗法
其一　十四謗法……(三七七)
其二　三約離謗……(三七九)
(六)　護惜建立

其一　人力護持
(1)　法施護持……（三七八）
(2)　身施護持……（三八五）
(3)　財施護持……（三八六）
其二　國力護持……（三八九）
（七）戒壇の事理
其一　即是道場の理壇……（三九六）
其二　一國同歸の事壇……（四〇一）
○第十八章　三秘の結論
（一）事觀と理觀……（四一一）
（二）事の一念三千……（四一六）

## 第四篇　信　行

○第十九章　本化妙宗の信
（一）信の意義……（四二五）
（二）迷信と正信の區別……（四二六）
（三）根本信の發動……（四三一）



（四）信心正因
其一　超道品の信……（四三四）
其二　根力助緣……（四三一）
（五）信念起行……（四五七）
○第二十章　本化妙宗の行
（一）理敎を醇化せる行……（四五九）
（二）受持正行
其一　三業受持……（四六二）
其二　正行と助行……（四六九）
其三　典式的修行……（四七四）
其四　處世的立行……（四七八）
○第二十一章　願業と妙
（一）續種護法……（四八〇）
（二）國家諫曉……（四八四）
（三）圓浮同歸……（四九一）
○第二十二章　本化妙宗の世界統一主義……（五〇〇）

## 第五篇　史傳


○第二十三章　日蓮聖人略傳……（五一三）
（一）偉聖降誕……（五一六）
（二）立志遊學……（五一八）
（三）建宗開導……（五一九）
（四）鎌倉弘通……（五二一）
（五）民衆迫害……（五二三）
（六）伊東流罪……（五二五）
（七）東條刄難……（五二七）
（八）龍口死刑……（五二八）
（九）佐渡遠流……（五三一）
（十）最後國諫……（五三四）
（十一）身延默敎……（五三五）
（十二）付法現滅……（五三七）
○第二十四章　宗門略沿革……（五三八）





○第二十五章　古來顯著なる宗門事蹟
其一　加島法難……（五五一）
其二　哭銀杏……（五五五）
其三　日持上人海外布敎……（五五七）
其四　日像上人の帝都開敎……（五五九）
其五　永享法難……（五六一）
其六　日親上人鍋被りの法難……（五六三）
其七　天文法難……（五六五）
其八　大佛供養……（五七五）
其九　慶長法難……（五六九）
○第二十六章　宗門の名家
（一）宗風の感化表現……（五七一）
（二）名家略譜……（五七三）
○老僧日昭　○老僧日朗　○老僧日興　○老僧日向　○老僧日頂
○老僧日持　○中老日合　○中老日辯　○中老日高　○中老日寛
○中老日家　○中老日位　○中老日秀　○中老日天　○中老日賢
○中老日法　○中老日門　○中老日忍　○中老日源　○中老日進

○中老日傳　○中老日保　○中老日滿　○鏡忍房日曉　○工藤吉隆
○阿佛房日得　○太田乘明　○大學三郎　○曾谷教信　○池上宗仲
○南部實長　○富木胤紹　○四條頼基　○南條時光　○江川吉久
○五郎正宗　○九老日純　○九老朗慶　○九老日證　○九老日印
○九老日行　○九老日善　○九老日傳　○九老日像　○九老日輪
○上行院日尊　○本國寺日靜　○妙滿寺日什　○妙法寺日叡　○本
成寺日陣　○本興寺日隆　○本法寺日親　○身延山日朝　○妙蓮寺
日忠　○啓運寺日證　○本隆寺日眞　○狩野元信　○要法寺日辰
○教藏院日生　○加藤清正　○四智院日性　○常樂院日經　○一如
院日重　○碁哲本因坊　○本妙寺日眞　○妙覺寺日典　○寂照院日
乾　○本阿彌光悅　○心性院日遠　○養珠夫人　○禪那院日忠　○
獅懸院日書　○深草元政　○安國院日講　○德川光圀　○大中院日
孝　○蓮華院日題　○遠沾院日亨　○了幾院日進　○六牙院日潮
○要敬日粉　○一妙院日導　○智朗日賢　○優陀那日輝　○源頼該
○小川泰堂　○長松清風　○文明院日隆　○高山樗牛

○第二十七章　上下七百年の略年表……（六一四）

## 第六篇　雜　要

○第二十八章　聖地靈跡……（六五三）

○房總靈跡……小湊……旭ノ森……小松原……興津……笠森……茂原……中山……眞間……○相武靈跡……辻説法舊跡……松葉ケ谷……お猿畠……比企ケ谷……亂橋……土の牢……收玄庵……行合川……龍口……依智……池上……○近畿靈跡……横川……定光院……○越佐靈跡……寺泊……塚原……一ノ谷……○伊豆靈跡……俎岩……川奈……伊東……○甲駿靈跡……岩本……經ケ岳……身延……○六門跡……各教團本山

○第二十九章　名著概目……（六七三）

○講明部……聖典類……註疏類……講經類……教學類……宗義類……史傳類……雜著類……○宗論部……自論四十二種收錄……敵論二十二種收錄……

○第三十章　研究案内……（六九一）

（一）　達意的研究……（六九八）

（二）　組織的研究……

其一　臨書研究

法華經研究……高祖遺文錄研究……一般講經類參看……一般宗義書類參看……往復宗論書類參看……宗史研究參看……

其二　統綜的研究……（三〇八）

## 篇外目次


○聖影……（植中直齋拜寫コロタイプ版　一葉）……（卷頭所掲）
○聖筆……（金珠女鈔引文　寫眞版　一葉）……（仝　上）
○聖歌……（著者拜書寫眞版　一葉）……（仝　上）
○序王……（仝　上）
○例言……（仝　上）
○目次……（仝　上）
○挿畫……（植中直齋、眞野曉亭、蜂鶴曉）……（卷中所掲）
加島法雖…日頂上人哭銀杏…日持上人海外布教發船…日像上人帝都開教…永亨法雖…日親上人燒鍋の法雖…日經上人耳鼻切の法雖……外に聖祖略傳挿畫二十二圖、其他寫眞數十圖
○本書述作の緣起……（卷末所掲）

324-170

# 日蓮聖人の教義

一名　妙宗大意

本化妙宗優婆塞　田中智學述

## 第一篇　總要

### 第一章　本書ヲ讀ムニ就テノ用意

#### 一　佛教ノ二大別

佛教の二大別

【種種】人の機類さまざまなる故それに應じて說きたる敎もさまざまあり。

一口に佛教といへば、どれも同じものと考へるてあらうが、それは大なる誤想である。

勿論、法の根元は一つに違ひないのであるが、それを人に適應する樣に說たといふ事に於て、種々と別れた、別れた以上は必ず

【捨劣取勝】劣れるものを捨て、勝れるものに移り行く向上の判意行意。

【小乘】三界の内だけを説いて自分だけ悟る教。【大乘】界外を説き廣く人を濟度する教。【權教】方便を帶びたる教。【實教】眞實を顯したる教。【偏】理の一部分を僅かに説示したる教。【圓】理の全分を圓滿に説盡したる教。【顯】他人と共にする顯露の教。【密】自證のみを説きたる教。【本】佛の本地を顯はしたる教。【迹】佛の本地を隱したる教。【隨自意】佛の意を標準として説きたる教。【隨他意】衆生の心を標準として説きたる教。【了義】佛出世の本懐を説きたる教。【不了義】佛の本懐を隱したる教。

勝劣があるに相違ない、勝劣があるとすれば、亦必ず「捨劣取勝」して、『勝れた上にも勝れたもの』を取ッて、それに依る樣にせねばならぬ、こゝに於て之が「別け法」を必要とすることになッた、扨てその「別け法」にも亦いろ〳〵ある、細くいへば小乘、大乘、權教、實教、偏、圓、顯、密、迹、本、隨自意、隨他意、了義、不了義、その外横縱に細判すれば、猶種々の別け法もあるが、今便宜上大格に約して、これを二大別すると

△權教としての佛教……(佛陀の方便に説かれたる教經)

△實教としての佛教……(佛陀の眞意を説かれたる教法)

といふ二つになる、而して「權教」と「實教」とは、全然その本領及び歸着を異にして居るから、名や相は同じ佛教の樣でも、實質内容が全然別のものであることを辨へて置かねばならぬ、この「別け法」に搆はないで、佛教を扱はうとするのは、恰かも藥學を知らないものが藥を扱う樣なものである、畢竟これまで佛教が、大きく深く立派の割合に、いかにも不得要領で、教法の用をすることが少く、却て世に害を與へることが多かッた樣な奇觀を呈したのも、その根元は全く此のわけ法を失ッて、「キニーネ」も「モルヒネ」も一つものだとした結果である。

【教法の用】人を導き世を善化して向上進歩せしむる作用。

【佛法の過失】佛法を解し損じて誤りの説を立て其結果世を惑はし國を誤るもの。

【佛法傳來の誤】印度より支那、支那より日本と、三國を經て、二千餘年の間に、段々に誤り來れる誤解邪説。

【佛法の正統】佛自ら證自意己證本懐の法と名乘れる至法が即ち佛の本領にて、其を主と立てるが即ち佛法の正統なり。

日蓮聖人は、『世間の罪禍よりも、佛法の過失が世を惡化することが多い』と歎かれて、何事よりも『世を安んじ人を救うの最大急務最大事は、佛法傳來の誤りを正して、佛陀の正意に根據した正しい教を興すの一事に在る』と叫ばれた、今でも同じ事、世間よりも佛法よりも、尤も大事にして尤も重きことは、『佛法の正統を尋ねあてゝ、それに歸入する』の一事である。

【應病與藥】いろ〳〵の病に應ずる爲め、いろ〳〵の藥あるが如く、人の機根もいろ〳〵ある故、これに對する教法もいろ〳〵ありて至當なりといふこと。

【方便】方便は素と支那古代の俗語なりといふ、『てだて』といふ意味、僞りは僞りなれども、惡意ならざる僞り、人を救ふ場合に用ふる僞り。

一つの佛法に、幾つも宗旨があるといふことが、既に疑問であるべき筈だのに、何故か、人は此點に思慮を費やさない、又佛教家の多くは、却て「應病與藥」を楯として『種々に宗旨があるのは當然である』と樣に言ふ、世の人も間違ひそうな事だ。

一佛教に種々の教法があるといふのは方便の爲である、方便は素より方便であッて眞實でない、眞實でない以上は「僞り」たることは無論である、然るに何故佛が「僞り」を說かれたかといふに、それは所謂變則で、或る特殊の場合に適應したものである、故に佛自ら之を用ゐて亦自ら之を捨てられた、佛に後れまいらせた今の世では、危險多き變則に據るよりも、『萬世不變の常經たる眞實義』に據るのが、尤も安全で且つ正しい行方である、佛陀は深く後世この誤解あらんことを憂慮したまひて、特に痛切に嚴明に此



【性欲不同】人々の根性も樂欲もさま〴〵に異りて同じからぬ事。

【四十餘年】釋尊の三十歲に成道して、七十二歲まで四十二年間に說き給ひし『華嚴』、『阿含』、『方等』、『般若』四時の經教。

【法華開經無量義經】三世の諸佛法華經を說く前には、必ず無量義經を說いて、此迄に說ける無量の經教の義理は、是迄のもと一法より出づ、根本の一法が眞實といふこと、此經を法華の開經といふ。

【十方佛土】小乘には時代〳〵に佛は出れど同時に十方に佛ありといはず、大乘は十方に佛あり佛國ありと說く。

【一乘】一乘とは一佛乘なり、『開絲覓』を二乘、菩薩を加へて三乘といふ、法華已前には此三乘の法を說くこれ等は方便にて、此一佛乘の法華經こそ眞實そ、此一佛乘の外に法はないぞといふこと。

【方便品】法華經廿八品中の第二品

【菩薩衆】「菩薩迹」といふ事を繰返されて

衆生ノ性欲不同ナルヲ以テ、種々ニ法ヲ說ク、種々ニ法ヲ說クコトハ方便力ヲ以テス、四十餘年ニハ未ダ眞實ヲ顯ハサズ（法華開經『無量義經』）

と曰ひ、又

十方佛土ノ中ニハ唯一乘ノ法ノミアリ、二モナク亦三モナシ、佛ノ方便シテ說ケルヲ除ク（方便品）

と曰ひ、又

我今喜ンデ畏ナシ、諸ノ菩薩衆ノ中ニ於テ、正直ニ方便ヲ捨テ、但無上道ヲ說ク（仝上）

と斷言せられたのを見ても、法は一つであることを知らねばならぬ、然るを斯く幾宗も〳〵流義流派が立ち別れたといふのは、根

ふ、菩薩は梵語にて『菩提薩埵』の略、大道心衆生の義にて、自らの利益を後にして、他を先づ利益せんと修行する人の。

【無上道】此上のない道で、梵語ハ『阿耨菩提』のこと、佛の覺りの道なり。

【佛種】佛になるべき種。草木に種あり、大海如く長流するに、其大善大善根の種子を、心田に植ゑねばならぬ。佛種これ也。

【生死ヲ離ルル身】煩惱により生死あり、煩惱を離れば生死を離れた。佛は眞に生死を離れた。無貪瞋佛の主なり。往昔世界の教主の時、四十八願を立て五劫思惟菩薩の也。

【阿彌陀佛】無量壽佛と譯す、四方極樂世界の教主、法比丘といふ菩薩來

本に於ける一桁の違算からして、這ふ間違ひ出したので、それは『教の權實を別けることを忘れた』といふ一事である、この一大誤謬を打破らない間は、佛教の談は堅固無益である、故に日蓮聖人は、この根原からして糺し初めたのである。

＊　＊　＊　＊　＊

日蓮ハ日本國安房ノ國ト申ス國ニ生レテ候ガ、民ノ家ヨリ出テ、頭チソリ袈裟ヲ服タリ、此度イカニモシテ佛種ヲウヘ、生死ヲ離ル、身ト成ント思テ候シ程ニ、皆人ノ願ハセ給事ナレバ、阿彌陀佛ヲ奉憑、幼少ヨリ名號ヲ唱候シ程ニ、イサヽカノ事アツテ、此事ヲ疑シ故ニ、一ノ願ヲ發ス、日本國ニ渡レル處ノ佛經、並ニ菩薩ノ論ト人師ノ釋ヲ習見候ハバヤ、又俱舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、眞言宗、法華天台宗、ト申宗共アマタ有ト



惟して極樂國を取る。經文

【菩薩の論】佛の經の義理を、菩薩は問答論議なる決若し、道理を明にする印度の菩薩方の論を論藏といふ。

【人師の釋】佛、菩薩の經論に對し、漢土本朝諸師の疏釋せられたるもの。

【俱舍宗】世親菩薩の『俱舍論』により立つ此論は玄奘三藏の譯にて三十卷あり、三藏の弟子、普光法師、寶法師、『論疏』『論記』等を作り、我國に弘通す、玄昭、玄昉等に傳はり、法相宗に傳はり、法隆寺等にて相傳す、小乘の有部にて一切の物心理の法を七十五に分つ、此法は實有にして、因緣により三世間に種々の衆生の身を建立す、故に菩薩の身心は、世界及び衆生の身、色、受、想、行、識の五蘊が假に和合して成るものなれば、我は空なり、人我を離れて解脫すと說く。

【成實宗】師子鏡尊者の造れる『成實論』により立つる宗也、成實とは如來三藏の中の實義を釋し成ずるなりといふ、三藏之義を釋して十六卷とし、弟子キク上ニ、禪宗、淨土宗、ト申宗モ候也、此等ノ宗宗枝葉マデユマカニ習ハズトモ、所詮肝要ヲ知ル身トナラバヤト思シ故ニ、隨分ニハシリマハリ、十二十六ノ年ヨリ三十二ニ至マデ、二十餘年ガ間、鎌倉ト京ト叡山ト園城ト高野ト天王寺等ノ、國國寺寺アラアラ習回リシ程ニ、一ツノ不思議アリ、我等ガハカナキ心ニ推スルニ、佛法ハ唯一味ナルベシ、イヅレモイヅレモ心ニ入テ習ヒ願ハバ、生死ヲ離ルベシトコソ思テ候ニ、佛法ノ中ニ入テ惡ク習候タレバ、謗法ト申ス大ナル穴ニ墮入テ、十惡五逆ト申テ、日々夜々ニ殺生偷盜邪婬妄語等ヲオカス人ヨリモ、五逆罪ト申テ、父母等ヲ殺ス惡人ヨリモ、比丘比丘尼トナリテ、身ニハ二百五十戒ヲ堅ク持テ、心ニハ八萬法藏ヲ浮ベ候樣ナル智者上人ノ、一生ガ間ニ一惡モツクラズ、人ニハ佛ノ樣ニ思ハレ、我身

等に盛に講ぜしめたり、[illegible]導の疏、[illegible]の玄義等ありて大に行はる、梁の光宅、開善、旻法師等の三大法師、慈祥大師等も弘傳に務む、我國には三論と共に傳はりたれど、後は『倶舎』譯せられて[illegible]

【律宗】唐の終南山の道宣律師の開ける宗にて、『四分律』に依りて[illegible]

【法相宗】法の相を細判する故に法相宗といひ、森[illegible]

モ又サナガラニ惡道ニハヨモ墮チジト思フ程ニ、十惡五逆ノ罪人ヨリモ、ツヨク地獄ニ墮テ、阿鼻大城ヲ栖トシテ永ク地獄ヲイデヌ事ノ候ケルゾ、譬バ人有テ世ニアランガ爲ニ、國主ニツカヘ奉ル程ニ、サセル誤ハ無レドモ、我心ノタラヌ上、身ニアヤシキフルマヒ重ナルヲ、猶我身ニハ失アリトモ知ラズ、又傍輩モ不思議トモ思ハザルニ、后等ノ事ニヨリテ、アヤマツ事ハ無レドモ、自然ニフルマヒアシク、王ナンドニ不思議ニ見エマイラセヌレバ、謀叛ノ者ヨリモ其失重シ、此身ニ失カヽリヌレバ、父母兄弟所從ナンドモ輕カラザル失ニ行ハル、事アリ、謗法ト申ス罪モ亦是ノ如シ、我モ知ラズ人モ失トモ思ハズ、但佛法ヲ習ヘバ貴シトノミ思テ候程ニ、此人モ墮チ又此人ニ隨フ弟子檀那等モ無間地獄ニ墮ル事アリ、所謂勝意比丘苦岸比丘ナン





羅萬法唯識所變と立つ故に唯識宗ともいふ『深密經』『華嚴經』等の六經『瑜伽』『唯識』等の十一論に依ッて立宗す、[illegible]

ド申セシ僧ハ二百五十戒ヲ堅ク持チ、三千ノ威儀一モ闕ケズアリシ人ナレ𪜈、無間大城ニ墮テ出ル期ヲ見ズ、又彼比丘ニ近付テ弟子トナリ檀那トナル人人、存ノ外ニ大地微塵ノ數ヨリモ多ク地獄ニ墮テ師ト倶ニ苦ヲ受シゾカシ、此人後世ノ爲ニ、衆善ヲ修センヨリ外ハ、又餘ノ心モ無リシカドモ、カヽル不祥ニアヒテ候ゾカシ、カヽル事ヲ見候シ故ニ、アラアラ經論ヲ勘ヘ候ヘバ、日本國ノ當世コソ、其ニ似テ候ヘ、代末ニ成テ候ヘバ、世間ノマツリ事ノアラキニツケテモ世中アヤウカルベキ上、此日本國ハ不似花國弘佛法、國モヲサマルベキ歟ト思テ候ヘバ、中中佛法ヲ弘テ世モイタク衰ヘ、人モ多ク惡道ニ墮ベシト見テ候、其故ハ日本國ハ、月支漢士ヨリモ堂塔等ノ多キ中ニ、大體阿彌陀堂也、其上家毎ニ阿彌陀佛ヲ、木像ニ造リ畫像ニカキ、人

【三論宗】龍樹菩薩の『中論』『十二門論』、提婆菩薩の『百論』この三を三論といふ、之に龍樹の『大智度論』を加へて四論とも云ども、『智論』は大般若經の釋にして別申論、三論は大乘の通申論なれば、三論を正依とす、三論四論みな羅什三藏の譯にして、三藏の門下盛に之を傳へ、法朗、嘉祥に至りて大成す、嘉祥に『三論玄義』あり、本朝は高麗の慧灌を始とし、近觀智藏道慈等傳法す、法隆寺、元興寺、西大寺等に傳へ、後東大寺東南院を其本處とす、龍樹提婆を高祖とし、嘉祥に大成す、此宗は聲聞藏、菩薩藏の二藏を以て一切經を判じ、又三種法輪を立て、又等、勝劣、の三義を以て諸教の勝劣等の三門を明す、『般若經』の一切皆空、無所得をその所詮とし、不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來の八不中道を以て、一切の敎法を破邪顯正す、生佛は假名、迷悟は本あることなし、迷ふゆゑにあり、悟れば本來寂滅なり、されば成佛不成佛は假名の論、而も根に利根鈍根あり、利根は一念に八不中道を觀じて本來寂滅の

毎ニ六萬八萬等ノ念佛ヲ申ス、又他方ヲ拋テ西方ヲ願フ、愚者ノ眼ニモ貴シト見ヘ候、一切ノ智人モ又イミジキ事也トホメサセ給フ、又人王五十代桓武天皇ノ御宇ニ、弘法大師ト申ス聖人此國ニ生レテ、漢土ヨリ眞言宗ト申スメズラシキ法ヲ習ヒ傳ヘ、平城嵯峨淳和等ノ王ノ御師トナリテ、東寺高野ト申ス寺ヲ建立シ、又慈覺大師智證大師ト申ス聖人、同ク此宗ヲ習ヒ傳テ、叡山園城寺ニ弘通セシカバ、日本國ノ山寺一同ニ此法ヲ傳ヘ、今ニ眞言ヲ行ヒ鈴ヲフリテ、公家武家ノ御祈ヲシ候、所謂二階堂大御堂若宮等ノ別當等是也、是ハ古モ御憑アル上ハ當世ノ國主等、家ニハ柱、天ニハ日月、河ニハ橋、海ニハ船ノ如ク御憑アリ、禪宗ト申スハ又當世ノ持齋等ヲ建長寺等ニアガメサセ給テ、父母ヨリモ重ンジ、神ヨリモ御憑ミアリ、サレバ一切ノ諸人、頭





妙道に入るべく、鈍根は三大阿僧祇劫に五十二位を歴て成佛すべしと立つ。

【華嚴宗】『華嚴經』を所依とせる故に名く、馬鳴、龍樹を高祖とし杜順、智儼より、唐の賢首法藏並に淸涼澄觀に至りて大成す、法藏に『五教章』あり、澄觀に『華嚴疏』あり、本朝には審祥、良辨の二傳あり東大寺に弘通す、此宗は五教十宗を以て一代佛教を判釋す、五教は（一）小乘敎（二）大乘始敎（三）大乘終敎（四）頓敎（五）圓敎なり、十宗は略す、又四法界を明す、（一）事法界は諸法差別の相を明す、小乘教及び大乘始教の法相宗に說く、（二）理法界は眞如平等の證性を明す、大乘始教の性宗（三論）及び頓敎に說く、（三）理事無礙法界、事相と法性と差別即平等、平等即差別にして、事理性相融通無礙なるを云、大乘終敎に之を明す、とて、融に天台の觀門に擬す、（四）事々無礙法界は圓敎の華嚴宗也、差別の事相も平等の理性より起れは、事相は理性と融通するのみならず、事相と事相とも融通無礙なるべしといふなり、所謂、如來の一毛孔に一切衆生を納め一微塵に十方世界を入るといふ類

ヲ傾ケ手ヲアサフ、カヽル世ニイカナレバニヤ候ラン、天變ト申シテ彗星長ク東西ニ渡リ、地夭ト申テ大地ヲクツガヘス事、大海ノ船ヲ大風ノ時、大波ノクツガヘスニ似タリ、大風吹テ艸木ヲカラシ、飢饉モ年々ニ行キ疫病月々ニ起リ、大旱魃行テ河池田畑皆カハキヌ、此ノ如ク三災七難數十年起テ民半分ニ減ジ、殘ハ或ハ父母或ハ兄弟、或ハ妻子ニ別テ歎ク聲、秋ノ蟲ニコトナラズ家々ノチリ失ル事、冬ノ艸木ノ雪ニ責ラレタルニ似リ、是ハ何ナル事ゾト、經論ヲ引見候ヘバ、佛ノ言ク法華經ト申ス經ヲ謗ジ、我ヲ用ヒザル國有ラバ、カヽル事有ベシト、佛ノ記シ置セ給テ候御言ニ少モタガヒ候ハズ、

（妙法尼御前御返事）

＊　＊　＊　＊　＊

なり、此事々無礙法界に於て、十玄六相といふ法門を說く、此宗の成佛には行布門と圓融門との二門あり、行布門は五十二位を歷て、過去に見聞し、現在に解行(住、行、向、地)し、未來に證入(等妙)して三生に成佛すとし、圓融門は一念に一切の行を具し、初發心の時便ち正覺を成ずといふ、これ也。

【眞言宗】『大日經』『金剛頂經』『蘇悉地經』等の經に依て立つ、眞言陀羅尼を以て名とす、龍猛菩薩南天の鐵塔を開きて、金剛薩埵より傳へ、龍智、金剛智、不空、惠果と相承し、我が國にては弘法大師之を傳へて東密といひ、慈覺、智證之を傳へて台密といふ、此宗は理智の二法を立て、顯密二教を判じ、十住心を立てて一代佛教を列す、顯教は應化身釋迦如來の說法にして、密教は法身大日如來の說法なりといふ。

住心に法身の說に及ばず、十住心とは(一)異生羝羊心(三惡道)(二)愚童持齋心(人道)(三)嬰童無畏心(天乘)(四)唯蘊無我心(聲聞)(五)拔業因種心(緣覺)(六)他緣大乘心(法相宗)(七)覺心不生心(三論宗)(八)一道無爲心(天台宗)(九)極無自性心(華嚴宗)(十)祕密莊嚴心(眞言宗)とし、此宗を最上となす。此宗にては地、水、火、風、空、識の六大を體とし、四曼を相とし、三密を用とす、身、口、意の三密に就て、佛の三密と我等の三密と相應すれば即身成佛すといふ、胸中八葉の肉團を開きて八葉九尊の安住處なりとし、意密と身密と口密と三密相應して、凡夫の身に即して佛と成るといふ。

【法華天台宗】天台山の智者大師の開きし宗なれば天台宗といひ、『法華經』に依るを以て法華宗ともいふ、龍樹を高祖とし、北齊の慧文、南岳の慧思を經て、天台大師智顗に至る、日本にては傳教大師之を傳へて比叡山に開く、此宗には五時八教を立てて一代の教を判釋す、五時とは(一)華嚴時(二)阿含時(三)方等時(四)般若時(五)法華涅槃時、八教とは頓、漸、祕密、不定の化儀四教と、藏、通、別、圓の化法四教とをいふ、此宗は一念三千の理を立て、一心三觀を修す、一心三觀とは空、假、中の三諦を一心に觀ずるをいふ、即空即假即中と觀ずるなり。

一念三千とは、十界各々十界を具して百界となり、百界各々十如是を具して千如となり、これに三世間を乘じて三千となる、此三千の諸法一念の心に具はるをいふ、凡夫の一念にも三千を具すといふ、理即佛、名字即、觀行即、相似即、分眞即、究竟即の六即を立てて、佛と凡夫との分を判ず。

【禪宗】禪とは靜慮なり、佛の心印を以て直ちに人心を指し、見性成佛を旨とし、不立文字、教外別傳を唱ふ、達磨大師を初祖とし、支那に傳へ、日本にては榮西、道元等之を傳ふ、經文に依らずして、坐禪に依りて頓悟すべしといふ。

【淨土宗】淨土の三部經『大無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』と『往生論』とに依て立つ、馬鳴、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導等相承し、日本にては法然上人之を開く、『選擇集』に此淨土門と聖道門とを分ち、他力念佛を以て往生の正因とす、三心とは至誠心、深心、迴向發願心、四修とは恭敬修、無餘修、無間修、長時修なり、念佛して極樂に往生すといふ。

【一味】たゞ一つの道理なるべしとなり。

【謗法】法を謗ること、又『謗は背の義』とて、口で謗らずとも、法に背くをも謗法といふ。

【十惡】殺生、偸盜、邪淫(身三)、妄語、綺語、惡口、兩舌





(口四)貪、瞋、癡(意三)。

【五逆】殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血。

【比丘】乞士と譯す、破惡、怖魔の二德ありといふ、男の僧。

【比丘尼】女の乞士なり。

【二百五十戒】小乘の比丘の持つべき戒なり、後に出づ。

【八萬法藏】法はよく衆の惡を滅するといふこと、藏は含藏の義にして、八萬四千の法門を攝むるをいふ、凡夫に八萬四千の煩惱あるに對して、八萬四千の法門ありといふ。

【惡道】地獄、餓鬼、畜生の三惡道なり。

【阿鼻大城】阿鼻は梵語にて無間と譯す、大城とは地獄を城郭にたとへていふ、無間地獄のことなり。

【地獄】佛法にて五逆十惡等の罪を犯したる者の、死後に入る所にして、經に說く所を示さば、八大地獄、八寒地獄等あり。

【捺落】梵語那落迦の略、地獄のこと。

【勝意比丘】【喜根比丘】佛の滅後に勝意、喜根の二比丘あり、喜根は諸法實相を說き、勝意は持戒、禪定等を說きて、弟子をして常に持戒の行を勤めしむ、喜根比丘は勝意の弟子に向ひ、貪欲即ち是れ道なりと說く、勝意之を聞きて大に怒り、喜根を謗りしかば、勝意は其の報に依り地獄に墮ち、無量百千萬劫の苦を受け、後に佛に遇ふといふ。

【三千威儀】二百五十戒を行住坐臥の四威儀に亘りて各々二百五十あれば一千となり、過去、現在、未來の三世にわたりて三千となる、之を三千威儀といふ。

【經論】經は、佛の說き給ひし理を記したる物をいふ、例へば『般若經』の如し、論は佛の弟子の經の意を說明したるもの、經と論とを合せて經論といふ。

(一)には邪正を分ち、(二)には法を說き、(三)には理を顯はし、(四)には妙法を明かし、(五)には名を示すといふ、經の意を說きて論の體となす、法を說きて經と論とに分け、佛の說き給ひしを經といひ、菩薩の說きしを論とす、『不了義經』『別中』『了義』『通中』等の名あり。

【月支】印度のことなり、印度の梵語にて月の國といふ意なれば、月支とも、月氏ともいふ。

【佗方】此土佗方といふ、此土とは娑婆世界のことにて、今、佛の出世し給ひし國土をいひ、佗方とは此土を除きての他の十方の佛國のことをいふなり。

【西方】極樂世界のことなり、阿彌陀佛の國にて、此の娑婆世界より西方に十萬億の佛土を過ぎて在りといふ。

【弘法大師】諱は空海、讃岐の人、姓は佐伯氏、延曆二十三年入唐し、惠果に就て密教を受け、大同元年歸朝、高野山を開き、東寺を賜はりて眞言宗を弘む、承和二年入定、延喜二十一年弘法大師の號を賜はる、『十住心論』『祕藏寶鑰』『即身成佛義』等の著あり。

【慈覺大師】諱は圓仁、壬生氏、下野の人、承和五年入唐し、十年にして歸朝、天台の密教を弘む、貞觀六年寂、年七十一。

【智證大師】諱は圓珍

智證は其諡號なり、讃岐和氣郡の人、和氣氏にして弘法の甥、母は即ち佐伯氏なり、十五歳にして叡山に登り義眞の弟子となる、[illegible]仁壽三年[illegible]入唐し、[illegible]法全[illegible]天台[illegible]清和帝[illegible]「大日經」[illegible]園城寺[illegible]寺門派[illegible]座主[illegible]寂す、「授決集」等の著あり。

【持齋】齋は齋也といふ、[illegible]「過中不食」とは[illegible]日中[illegible]佛の食時[illegible]鬼[illegible]「過中不食」といふ。

[illegible]「六齋日」[illegible]八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日[illegible]「九齋日」[illegible]不殺[illegible]不妄語[illegible]比丘若し齋を破り[illegible]地獄[illegible]持齋といふ。

【三災七難】三災には小の三災、大の三災とあり[illegible]刀兵[illegible]疾疫[illegible]飢饉[illegible]火災[illegible]水災[illegible]風災[illegible]「大集經」[illegible]「藥師經」[illegible]「仁王經」[illegible]（一）人衆疾疫難（二）他國侵逼難（三）自界叛逆難（四）星宿變化難（五）日月薄蝕難（六）非時風雨難（七）過時不雨難

上人の出現[illegible]

[illegible]

【御書】「立正安國論」[illegible]

【經文】「大集經」「藥師經」「仁王經」「金光明經」等[illegible]





○吾人と法との關係は
○自己が自己を親むが
如く夫れ親密なる也

【先天】自己より先きに既にありたり師だり親たり深重の恩義を有せるが本佛なり。

## 二　須ラク先ヅ本化妙宗ヲ知ルベシ

世人は何を知らないでも、必ず先づ「本化妙宗」を知らねばならぬ、人は自己の次に父母を知らねばならぬといふよりも、吾人人類に取て『今一重深く立入ッた關係』のあるのが、この「本化妙宗」である。

父母はこの世限りの父母であるが、本佛の吾等に對するや、久遠の太古から、限りなき憐み限りなき救を垂れて、吾等の身心を善導し正化せんと勵みたまへる大恩高義、世界の何物を以ても比することの出來ない無窮絕對の大慈悲ある、『先天の父母なり師なり主君なり』である、その深重廣大なる恩人の心を『そのまゝ傳へた教法』が、即ちこの「本化妙宗」である、自己を知ると同時に、

【妙法五字】妙法蓮華經の五字のことにて、是は經典の名ではなく、久遠本佛の御覺りの眞理の名なり、この名の中に眞理の體も因果の功德も德用も敎義もみな含まれたり、此名を離れて眞理を捕ふることは能はず、その事を『如來神力品』に、『如來神力品』に、如來一切所有之法（名）如來一切自在神力（用）如來一切秘要之藏（體）如來一切甚深之事（宗）皆於此經宣示顯說（敎）と仰せられたり。

是非とも知らねばならぬ大關係の、切ッても切れない、それこそ『先天の約束ある敎法』である、然るに、世人はこれを餘所ごとの樣に思ひ做し、甚しきは名さへ知らないものがある、洵に人間界の一大事ではないか。

八萬法藏の佛敎、その中心が法華經で、法華經の中心が本門、本門の中心が妙法五字、この妙法五字は、モハヤ文字でなく義理でなく、全く直ちに佛の心である、法界の靈原である、吾等一切衆生の最後歸着所たる大安住點である、これを魂とし主義として詮し出された敎が、乃ちこの「本化妙宗」である。

予は此書の刊行に因て、一先づ吾國民を「本化妙宗」の名の下に聚らせ、尋で其敎澤に浴し其妙益を享て、一人殘らず「妙の民」としたいと念ふ、斯くて日本先づ「妙の國」となッたらば、世界の妙の民ありて妙の國成り妙の國成りて而して後妙の世來らん

【一天四海皆歸妙法】世界全體が、みな妙法蓮華經の三大秘法に歸依する時、寂光土實現す、是非ともこれに到達せずは已まずといふ日蓮上人の大願。

【行願】いかにしても遂げればならぬといふ願を修行とし志とす。

人類を、一網に濟ひ取ッて、「妙の人」「妙の世」とすることは甚だ易々たるものである、日蓮聖人以來六百有餘年、吾等の同志先輩は、『一天四海皆歸妙法』を理想として、多數の反對者と奮鬪し、隨分と血を流して來たが、今にその實が擧がらないのは、畢竟吾等の誠意、行願が足りないからであらう、石に嚙り付ても此望を達せずには置かない、世人若し此書を讀んでも、深く思慮を致さずに、尋常雜書の看を爲すならば、予は深くその人を恨む、その代り解らないことがあるなら、予の力の限り御相談しよう、予は法を賣り宗を强ゐんが爲に、「本化妙宗」を勸めるのではない、「本化妙宗」は吾國民の根本性命であるのを、吾國民が知らずに居るから、それをもどかしいとして騷ぐのである。

佛敎を尊び重んずる心は、世人にも往々あると考へるが、徒ら

に形骸を尋ねるよりは、その精神を把住するが、尤も捷路であらう、「本化妙宗」は、すべての點に於て、佛教の精粹を盡したものであるから、此點に於ても至貴至要である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

(一)佛陀出世の本懷、偏にこれを說かんが爲めなり

(二)法界の靈原、眞理の本體、佛陀證悟の內容なり

(三)一切衆生の善心道心美心眞心の根本種子なり

(四)あらゆる佛菩薩天龍鬼神の靈護を集中す

(五)事物の根本性を發揮してその眞性妙用を光揚す

(六)愚人は智と化し、惡人は善と化し、邪見は正となる

(七)眞理の統一性を事物の上に移すが故に事理融一す

(八)事理の融合は轉じて人心を統一し國家を統一す

【佛陀出世の本懷】釋尊が、眞理の國より、人間の世に出られた、根本の意思、根本の因緣。

【天龍鬼神の靈護】佛法には、天の神、天龍八部といふて、天の神、龍の神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩喉羅伽、これを八部衆といふ、夜叉は鬼神の名、これ等一切經界の勢力あるものみな一法華の力により、懺悔によりて靈化せられたれば、其恩返しに法華を護るとなり。

【眞性妙用】眞實の性德と靈妙なる力用。

【事理融一】理性の四融なる如く、一切事物みな圓足融通して理が事の上に現る。

【教行人理】教も一佛乘、行も佛因佛果の一、人も佛乘を求むるもの一、理も諸法實相の一、これを四理一圓會の法門といふ、方便品にあり。

【會】異れるものを一つに合體同致せしむる事。

## 活用醇化

【法華經の化身】法華經が生きて働らいたともいふべき實行者。

(九)向上無限の統一力は遂に人類を統一せずんば已まず

(十)教も行も人も理も統一せられて始めて眞の活動生ず

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

斯の如く廣大を會して一實とし、一實を醇化して活用無限ならしめた「本化妙宗」は、『高妙深遠なる佛の智慧』をそのまゝ人間に翻譯して見せたものである。

佛教經典中の大王たる法華經を本として、法華經の化身ともいふべき日蓮聖人によりて與へられた、『法華經の具體的發現』たる「本化妙宗」は、『佛教の正味であると共に、佛教のすべてである』といふことを知らねばならぬ。

世人は佛教が世界での廣大なる宗教なることを知て居ても、その佛教の大精神たる「本化妙宗」を知らないでは、つまり佛教を知

本化妙宗は佛教の正味なると共に佛教のすべてなり

## 人間の大事

廣さよりも深さ横よりも縱

ッたものとは謂へない、近來宗教に對して冷淡に流れた吾國民は、佛教の事に能く注意しないようだが、佛教を知らないといふことは、只知らないだけで濟まない、世界の行末にも、人生の目前にも、『これほどの大事件』はない、換言すれば『佛教を知る』といふことに於て、人間の大事は解決せらるゝのである、さてその佛教を知るといふことが、元來至難事とされてある、然り難事のである、されど、それは扱ひかたで二樣の別があッて、『横』と『縱』の相違になる、横に扱うと、その廣い間口に彷徨して、容易に入口を見出すことが出來ないで、いつまでも落着がつかなくなる、それ故むづかしい、然るに之を縱に扱うと、その深さが、彼の廣さと同量であるから、素より易しいとは謂へないが、一本口だけに、その入口にまごつくようなことがない、それで一度その口へ



【水源】一佛乘に於て分別して三と說くとありて一切佛法みな法華を本とす。

身を容れさへすれば、(退くことのない限りは)、横徑へまぎれる憂がなく、往くべきところへ往けるのである、詮する所、極めて廣く極めて深いのであるから、何方から往ッても、至難いには相違ないが、深さの方から取ッてかゝる方が、まごつきのないだけ安全である、即ち縱に扱ッて、『一直線に佛教の極意點に達する』のである、廣い佛教を研究して、その結果深奥の法華經に赴くといふことよりも、いきなりに佛教の中樞たる法華經を執ッて、高いところから、佛教を見渡すといふ構への方が、早途でもあるし、間違もないのである、それで法華經に安着た曉、見渡すかぎりの佛教の廣野に流れて居る河川の悉くが、皆水源を法華經より發して居ッて、つまり法華經の一味水の支流分脉たることが解るのである、故に法華經を知るは、佛教のすべてを知るのである、知る

記號的に知るの要なし只得意的に知るべきのみ得意亦二あり一は研究的なり二は信仰的なり前者は學問的にして後者は宗教的なり前者は傍にして後者は正也

佛教には一切の道を包含せり

といふのも、記號的に知るのでない、整理的に知るのである、得意的に知るのである。

予は今此に『佛教を知る』と言ッたが、この『知る』といふことに就て、研究的に知るといふことゝ、信仰的に知るといふことゝ二つある、一は學問的、一は宗教的である、元來佛教は宗教として弘められたもので、學問として存在したものではないが、學問として研究することも出來る、學問としても、一切世間のあらゆる學問を總じて束ねたよりも、もッと大きく高く深く遠い量を有して居るのである、それは世のすべての學問思想に打ち勝ッて、その種々の妄想邪見を破すべき必要と、それから都ての人間の思想を引纏めて、それを統綜調和すべく處分する必要とによッて、段々の思想の階級を餘さず說き收めたので、これは佛教の本領では



【體得】そのまゝ全體にうけ得ること、その中にふくまれた理窟は知らずとも、事實的、具體的に受け得ること世に多し。

凡夫と佛との相交通すべき路

補助機關

【傍意】傍正と對す、「正」なその事の主意とせば「傍」とは附屬的といふほどの意味。

ないが、『補助機關』として學問的要素をも含んで居るのである、肝心の正味たる佛教の大主義は、とても學問力に訴へて知るといふことは出來ない、否、佛には出來ても、凡夫には出來ない、凡夫は信仰的に體得するの外に途はない、たゞ此信の一途ばかりが、細く狹いようだが、長く遠く洞通して、佛境界まで徹ッて居る、そうして此途は凡夫から佛境界に通うばかりでなく、『佛の方から凡夫に交通する』のも此途である、この途は常に佛境界からの光明で照されて居るから、闇に迷う憂ひがないのである、吾等の佛教に於けるや、その補助機關を知るのは、むしろ傍意であッて、眞の目的でない、眞の目的は佛教の本領たる安心立命に到達するに在る、故に吾等は、學問的に知るのは、二の次にして、先づ信仰的に佛教を意識せねばならぬ。

廣―（佛教の全體を研究して法華經の大精神に入る）―歸着、法華經に在り

△廣さで知るのは……學問的……研究的……（補助關聯）○―

△深さで知るのは……宗教的……信仰的……（本領面目）○―

深―（法華經を根據として佛教々理の大歸着を知る）―歸着、法華經に在り

以上の理由で、吾等は廣的研究を第二とし、先づ深的求道より入るのが順序であることを知らねばならぬ、而して此次ぎに來るべき問題は、正しく左の二つに結束る。

第一　吾人人類は、何故佛教を知ることが、即ち自己を究むる所以であるか。

第二　法華經を知るにあらざれば、佛教を知たと謂れぬといふ

△三箇の問題



【能事】効用役目といふほどの意

根本問題に對する根本解決

理由いかん。

この二問題を決すれば、「本化妙宗」の能事は畢るのである、それと共に人間の萬事も、此一事で埒が開いて來る、「本化妙宗」は、幾んと此問題の解決の爲に建てられた宗旨であると謂ッても宜しい、それと共に本書の全部は、その說明であると解して可いのである。

## 三　本書ノ概觀

【說明書】これまでの書にも信仰的の書はあまりに無組織なり、教學的の書はあまりに專門的なり、いとど難解難入の宗法ますく入り難くありしこと自他の「なげき」なりし也。

吾人々類に取ッて、天地間の何物よりも必要だといふほどの「本化妙宗」が、どうしたものか、一般人に讀ましむべき通俗的說明書を有して居ない、けだし大缺典である、依て疾うから其需用に應ずべく本書を出すつもりであッたが、彼是多忙の爲に果さなかッた、此頃日蓮主義研究の聲漸く盛んならんとするの機運に際し、

【己證】自分ひとり深く心に悟て、他人に示す能はざる秘妙の境界なり。

いよ〳〵遲滯することを許さない時機となッたから、所謂拙速を尙ぶの意で、とにかく荒打ながら本書を稿して世に出したが、何分著者の淺學不才なるに、時日と紙數とが自由を與へない爲め、自分ながらも遺憾の箇所が多い、然し予は或る仔細に由ッて、『本書一讀の人は、必ず胸底深く何物かを獲ずには居ない』といふことを信ずるのである。

元より甚深の敎旨をば、廣大の義判で組立てられた、如來隨自意己證の大法であるから、いくら搔いつまんでの略筋でも、多少の複雜は免れないと考へるから、この書を讀む人の爲めに、便宜を圖ッて卷首に本書の荒筋を示して置かう、或は無益かも知れないが、俗忙しい世の中だから、美味を感じないうちに、用でも出來て中止して、あとを忘れる樣なことがあると、いかにも折角だ

## 內容略示
（此書の案內）

から、その防ぎの爲めに……

『日蓮聖人の敎義』……內容略示

**第一篇**＝〔總要〕＝初めに此書を讀むに當て、根本の心掛ともいふべき、佛敎に權實二敎あることを辨へ、その「權」を捨てその「實」を取るべきことを指示し、次に本化妙宗あることを確念して、深き思慮をこゝに致すべきことを說き、而る後、本書の全體に亘り、叙說の次第組立を指示して、讀み行くに便りよからしめ、次には「本化妙宗」の名に親接になッたら、今度は其「本化妙宗」の名の謂れを解し、次に「本化妙宗」のあらましの大體を說明し、次にこの妙宗が、いか樣に傳來して來たかを叙べ、以て本書全體に就ての領解準備とする、それが『總要篇』

**【宗旨】** 宗要旨歸なり、「教判」にて、どの教を宗とするか、即ち尊奉するかといふことが定れば「宗旨」に於て、其宗としたる教が、要となり、歸着となりて吾人の修行して證果を得る修因感果の法則を說き明かしたる「宗旨」といふ。

第二篇＝〔教判〕＝本宗教義の内、「教」と「宗」と二つに分ッた、その一つの「教」即ち「教判」といふことを說く、「教判」とは、教法上の理義を明白に判別することで、諸〳〵の誤りを去て、正しき義分を得る所の標準法則ともいふべき教理の檢覈法であッて、これが「宗旨」を建設すべき基礎である。

「本化妙宗」の教判は、「五綱」と曰ッて、「教」、「機」、「時」、「國」、「教法流布の前後」の五つである、この五つを精細に調査して、而かもその精査の結果として得たる根本標準に照らして詮し出した正味が、此「三大秘法」の宗旨であるから、宗旨を醇味とすれば、「教判」はその原料と釀造法との如きものである、原料が良くて釀造法が完全でなければ、とても善良なる酒醇を得られないようなもので、「宗旨」が大切なれば大切なるほど、その「教判」が公明正大でなくてはならぬ。

**【法華經の本要】** 法華經の根本主要にて、妙法五字が、法華經廿八品の根本なり、要なりといふこと。

第三篇＝〔宗旨〕＝正しく法華經の神髓眼目たるべき妙義として、その歸着點を醇化精要して「三大祕法」と顯はした、それが法華經の宗旨、即ち本佛釋尊の宗旨、吾等一切衆生の歸趣すべき宗旨である、所謂三大祕法とは、「本門の本尊」と、「本門の題目」と、「本門の戒壇」の三つである、是れは妙法蓮華經五字の眞理が、活動的意味に實行されたもので有て、法華經の本要、釋尊の本意、法界の歸着、人生の落居、只この一摠に歸して居るのである。

第四篇＝〔信行〕＝扨ても「五綱教判」の立派な組織より詮要された宗旨、甚遠廣大を極めた「三大祕法」の宗旨、これをいよいよ『自己のものとするの方法』として、先づ第一に「信仰」、一

【教益】その宗教を修行した利益のこと。

【聖祖】日蓮聖人のこと、聖人を特に宗祖といはずして「聖祖」といふは、一宗一門の祖に非ずして、日本國の祖、世界の祖ともいふべき、大聖人なれば、特に聖祖と稱する明治三十年、英照皇太后の御大喪にあたりて「大喪」の語を著さしめしもの。

口に信仰と曰ッても「本化妙宗の信仰」でなくては、形式は信でも内容が相違しては、全く通用しない、即ち『本化妙宗の信』とはいかなるものであるか、「行」はいかん、それより得る「教益」はいかん、吾等の處世に於ける都ての應用はいかん、どうすれば「本化妙宗」の信仰が完全に成立するかを說く。

**第五篇**＝〔史傳〕＝教法の活現は人であるから、史的方面より研究する必要もある、即ち『日蓮聖祖の略傳』、『宗門略沿革』、『顯著なる古事蹟』、『名家略譜』、『聖祖已來今日迄の略年表』を掲げて正式に史傳を研究する端緒を啓けて置く。

**第六篇**＝〔雜要〕＝本篇にはホンの附錄的に讀者の參考料として、『聖祖靈跡案內』、『宗門名著の梗概』、『研究案內』(達意的研究および組織的研究)を載す。



【本化妙宗の名】

【本化の菩薩】久遠の元初に於て本佛の化導を受けたる菩薩を云ふ。

【妙の一字】妙法五字の首なり、釋して不可思議と云ふ、佛所證の眞理此一字に收まる、即ち法界圓融の極理、絕待にして思議すべからず、天台大師は姑く經文により百二十重の妙を釋せり。

【迹化の菩薩】久遠よりこのかた、その中途に於て垂迹の佛の化導を受けたる菩薩の事本化に對して迹化と云ふ。

# 第二章　本化妙宗ノ名

## 一　立名

「本化妙宗」とは、本化の菩薩によりて傳へられたる妙宗といふことで、「妙宗」とは「妙法蓮華經宗」の略稱であるが、面倒だから三河屋久左衛門を「三久」と略する例で「妙宗」としたのではない、法華經の所詮が「妙」の一字に歸するから、その精神を名に取ッて「妙宗」といふのである、同じ法華經でも、迹化の菩薩の傳へたと、全く別のものであるから、それに選んで『本化の妙宗』とふのである、然る上は、「本化」と「迹化」との區別を知るのが必要になッて來た。

## 二　本化ト迹化トノ別

【久遠元初】　天地法界の歴史を超越せる根元最初の時を云ふ。

【娑婆世界】　娑婆は梵語にて堪忍といふ義、此現實世界は何邪も惑の如くならず、堪忍を要する故にかく名く。

【本佛】　本時成道の佛、法華經壽量品にあらはる、測るべからざる永遠の昔に修行して、三身具足したる佛にて、究竟圓滿に眞理中心の本体又勢力也。

【生一本】　右の久遠無始とも云ふべき大昔、本佛が修行し、何の混沌なく說く所の佛法、即ち本佛の隨自意の純佛法なり。

【人機】　人の機、機とは可發かり、丁度、弩の射出すばかりになり居る時は、少し手をかければ、すぐに發射す可きなり、人の心的狀態も、種々なれど其可發の呼吸は、それぞれなるなり、佛その可發の呼吸を呑込みて法を說く少しの手かければ、それ〳〵善根が發せらるゝなり。

「迹化」とは途中から出來た弟子、「本化」とは本からの弟子、『本から』とは釋尊が久遠元初の大むかしに成佛した、その時分からの弟子で、どこから來たのでもない、その大初から、ヤハリ此娑婆世界に生拔の弟子で、影の形に隨ふ如く、常に恒に本佛と一と になッて居て、『必要の時だけ、いつでも出て來て、本佛の化導布く』、全て本佛それ自身の如な、高貴最尊の大菩薩、此菩薩はいつても生一本正味の佛法より外は弘めないので、種々の方便や手段の混ッた教は、他の迹化の弟子が分擔して居て、それの相應する小部分の時代や人機に對して、局部應急の化導をする、本化の方は、佛教の大統化として、萬世不變の化導の爲めに、佛教の眞實義たる法華經の大法を弘めるといふいよ〳〵の場合、即ち『大權の發動』ともいふべき佛教の全權を握ッた總司令官として、本

【諸經中王最爲第一】　法華經法師品の佛說、佛は種々の世界に無量の法を說たれど「已に說き」「今說き」「當に說かん」經々なくらべて此經最第一なりと定む、佛自ら宗を立つる語。

【迦葉】　長老迦葉といふ、大迦葉也小乘教の付屬を得し大阿羅漢、小乘結集の主。

【阿難】　侍者阿難といふ、常に佛に侍し、多聞一の聖者一代佛經を誦出す。

【小乘の釋迦】　小乘教の教主たる釋尊なり。

【文殊】　智慧を司る菩薩三世佛母ともいふ。大乘結集の主。

【普賢】　慈悲を主とする菩薩、普現色身を現ず、文殊と共に迹門最高位等覺の菩薩。

【大乘佛】　大乘の教主たる釋尊なり。

佛の威嚴の下に世に出現して、唯一の佛乘を宣べると同時に、他の迹化已下の弘めた教法の始末をつけたり、又は種々の人師たちの間違を糾明する所の大職務を帶びて居るから、諸經中王最爲第一の法華經には、是非この本化の菩薩が附きものになッて、「本佛」と「法華經」と「本化」との三つは、『一體に具ッた三つの作用』といふべき關係になッて居る。

## 三　佛ノ本迹

佛陀の新古優劣を定めるのに、必ずこの『本化の菩薩の有る無し』で判けて行く、即ち迦葉や阿難を左右に伴れて居る佛は、その弟子から推して、「小乘の釋迦」と判じ、文殊や普賢を帶びて居る佛は、前のに較れば大乘の菩薩を從へて居るから、勝れた「大

【三身常住の本佛】法身のみ常住に非ず、「報身」「應身」も久遠劫來一具して、常に十方世界の衆生を救ふ、常住の佛陀。

【久遠の本佛】法界久遠の元初の時より法、報、應の三身を一体に具したる佛陀を云ふ即ち眞理の德なり。

【證悟の法】本佛のさとり給へる眞理を云ふ、法界實相の極理なり。佛の體得し給へる眞理の全體を本法と云ひ、其正味を把て敎法と爲して衆生に授け給へるを要法と云ふ。

【要法】

【化導の結果】佛の化導を重れ給ふ結果として、智德佛陀に亞げる菩薩を生ず、菩薩一轉すれば佛境界に到る也。

乘の佛」であるが、その文殊や普賢が、迹化の弟子であるから、是猶「迹佛」の分齊にして、未だ三身常住の本佛とは言はれない、本化の菩薩を從へた佛ならば、是れは紛ふ方なき「久遠の本佛」である、久遠の本佛は、すべての佛や菩薩、又は神だの聖人だのゝ根本であッて、この本佛の證悟の法を本法といひ、その本法を土臺として立てられ敎へられた敎法を要法といふので、即ち本化の菩薩は、佛の新古優劣を計るべき尺度である。

## 四　佛ト法トノ關係

弟子て師を度るといふのは、一寸訝しいようだが、佛の內容は尊高幽遠にして、他からは測り難いから、その化導の結果たる弟子を目安として、佛の品位を決定するのである、譬へばその副官の官等で、これは師團長、これは軍司令官と、差別がわかる、元帥や大將が穆々として隨從し奉るのを見て、その大元帥陛下たることを知るが如く、外に表彰の仕ようが無いから、附人のお弟子を尺度として佛を計る、その計るのは又何の爲めかといふと、勝れた佛には勝れた法が伴ッて居るから、所詮は上もなき法を求めて、最勝の功德に接したいといふのが、求道信仰の大主意でもあるし、又佛陀が衆生を導くにも、主とする所は『御自分と同じき證果に入れて、同じ貫さと樂さを與へたい』と思召すより外はないので、いきなり正眞正銘の無上道を說きたいは山々であッたが、說いてもそれが會得ない場合に、務いて速に說くと、解らないうちに邪見を興す虞れがあるから、先づいろ〳〵の方面から、イヤとも解ッて來るように、道具立てを以て、相手の心を慣らし、

【證果】さとりの果を云ふ、修行の因に依て得る所也、菩薩の行を修して佛果を得る迄究竟の證果とする也。

【邪見】衆生の見惑の中の一なり、三界の因果の道理を無視する見解を云ふ。

【凡夫の當體】吾人凡夫の生得のまゝの體を云ふ。

【幼稚な思想】太古の宗教思想は、熟れも多くは、國民の物崇拜、動物崇拜、祖先崇拜等に基づき、是等が稍高等となりて、各特立せる多神教となり、更に系統ある多神教と進歩すなれば、太古一更に一神教と萬有神教、具存体智識なれば、恐べ人體に機物無機物識なるもの、美なるもの、不大なるもの、強きもの、思議なるもの、窓ぜらるゝもの、驚くべきもの、人の境界なる、こゝ野蠻なる、人の境界なる、こゝ波羅門の萬有神教なり、印度なり、今も多くの人の思ふに佛教に入りしとも、境界なり、

て、『こちらも道具立が整ッた、相手も心の訓練が饒りて來た、いよ眞實を明かしても差支がない』となッた上でなければ、說くことが出來ない、その時節を待つまでの手段に、種々の方便が入用であッたから、ならしの爲めに、各方面から、形を變へ品を替へて、權りに異說したので、畢竟眞實に入れんが爲めである、佛陀みづからの本佛たることさへ、いきなりに說くと膽を潰すほどのことだから、凡夫の當體が本佛だといふことは、猶のこと說きがたいのである、それどころではない、元來「佛」そのものゝ尊いことさへ知らない、熱いのに怖ぢて火を拜んだり、音の大なるに恐れて雷を拜んだり、高いのに感心して山を拜し、流動に敬服して河を拜するような幼稚な思想には、『萬物を造ッた神』があると聞いたら、それこそ無限の尊敬をこれに移すのである、中々に神だ



【他方他佛】四方の彌陀東方の藥師等、此我等の住む娑婆以外の佛國や佛陀に憧れ、これにより佛に憧れしむる方便教既の假り物なり。

【因果の原則】原因と結果の法則、因に依りて果を生ずるは宇宙自然の理なり、宇宙間一切の活動は皆總て此理に基く也。

【人心最後の歸向】宗教の信仰は、吾人々生と宇宙の過去現在未來に亘ッて、理想と安心と興ふるもの、人心最後の歸向とのいふべし、人心最後の眞面目に、宗教を求むるは、宇宙人生の多くの疑問か苦悩か、もしくは及び慰藉なとき、目的の最後の解決、及び慰藉なとき、目的の最後の苦悩か、疑問か、宇宙人生の多くの目的に、宗教を求むるは、眞面目に、最後の人心、人心最後の歸向とのいふべし、宗教の信仰は、吾人々生と宇宙の過去現在未來に亘ッて、理想と安心と興ふるもの、

【無因の力】神にもせよ、佛にもせよ、其果報力用は、偶然にもせよ、偶然にもなしたるものなるも、之が體得せしの原因がある也、此宇宙の法則なり、佛陀の大慈大悲力もみな過去の因によるは、漠然と無因の力也。

の萬物だの、根元を究めて、その力の無限絶大なることを認めるなどいふことは、かけても望めない、乃でこの妄想を破るため、假りに他方他佛に托して、力の根元といふものが、偶然に存在するものでない、必ず整然たる因果の原則に依ッて發生するものであるといふ道理を、假定の事實で示したのが、四十餘年の間の經經で、種々の佛土や佛菩薩を推立てゝ、したゝかに其の功德を吹聽して、『一切世間の何ものよりも尊い佛』といふものを合點させて人心最後の歸向を、此集中點に引寄せるようにした、そうして置いて、彼の無因の力を崇拜する不道理心卑屈心を淘汰したのである、今世間の一番聰明な議論て、山よりも河よりも雷よりも蛇よりも、『その不思議なる恐るべきすべての物を造ッた神』といふものこそ、一切萬物の上に超絶した尊貴なるものであると究めた、

【下げつけた頭】山川や、食獸や、木石や、數多き天の神や、唯一神やもとより種々の祟拜物にさげつけた頭といふことなり。

【合理的信仰】眞理に合ひ、吾人の理性に合へる信仰。

【歸依處】凡夫の信念の對境となるものを云ふ、即ち本尊なり、教義の宗教的組織に於て必ず關くべからざるものなり、所謂本尊は教理の盛出する故尊究竟の中心體を云ふ也。

【修行】行を修めると云ふこと、是れ即ち因なり、之に依て之に相應するの果を得る也。

然るにその神よりも幾十百階の上に位する無限の勢力を有した佛といふものがあッて、現に存在して吾等を救ひ護るべく溫き手を垂れて吾等を待ちつゝあると聞いては、どの途何ものかに下げつけた頭だから、諺にいふ『立寄らば大木の蔭』『犬になッても大家の犬』といふ習慣性に幾分の合理的信仰を加味して、衆河の海に入るが如く、世は始めて佛陀の最大尊貴なることを覺ッて之に聚ッた、たゞに勝れた歸依處を得た滿足ばかりでなく、彼の卑い神樣でさへ、『神の株は獨占で、人は神になる權利を有たぬ』とされてあるのに、それよりも尊い佛が、『元をいへば凡夫から修行して佛になッたものだ』と聞いては、吾々凡夫でも修行の功によッては佛になることが出來る道理、して見れば、佛の尊さと同じに尊いものは修行である、その修行は佛の敎に依るのであるから、佛の



【原質的に尊ひ】凡夫の心に本より佛性あれど迷の爲に知れず、されど其質は佛に同じ。

【効用的に尊ひ】佛之を見て其迷を憐み敎法を以て迷を去しむ、人苟くも修行すれば、道に入ることを得る故、効用に於て尊きなり。

【利根】根とは凡夫の賦性心力にして「利」「鈍」の二樣あり、利は鋭利なり。

【極理】法界の萬物一切皆道理を有す、道理に淺深の區別あり、佛陀所證の實相の理は、即ち最深究竟の極理也。

【因果撥無】宇宙間の活動の原則たる因果の道理を無視して信ぜざるを云ふ。

【本因本果】法華經の本門に說かれたる佛法に於ける因果の極說なり、即ち久遠の本佛を標準として說かれたる因行果德の次第を云ふなり。

【善法勢力】眞理の道德的勢力を云ふ也宇宙の諸法に善惡の二あり「法性」「無明」是なり、法性自然の力能く佛陀を生ず、即ち佛を以て眞理の德化せられたる勢力と做す也。

敎(即ち敎法)が、佛の尊いのと同じく尊い、それと同時に、修行さへ積めば必ず佛になれる吾等も、『原質的』に尊い、修行力によッて成佛し得られるとすれば、その修行力を有して居る吾等は、又『効用的』に尊いものである、そのすべての尊さを保有するものは、佛の敎法であるから、吾等は佛を尊しとすると同時に、よく敎法を守らねばならぬといふ覺悟が立ッて來た、こゝで利根なものは、はゝァと極理を悟ッたのであるが、それはホンの少數で、大部分は眞實の佛法に接すべき下拵へとして、因果撥無の邪見より救ひ出れて、他日本因本果の道理を聞くべき準備的訓錬を受けたのである、この訓錬時代に『臨時傭ひ』に傚ひ入れたのが、他方世界の佛や菩薩で、この手間取りの牽制力で、やッと『佛は善法勢力の根元なり』といふことの總體議だけ仕上げた、この場合に

【顯本】本時を顯すと、釋尊の三十成道は、衆生應同の方便、實は五百塵點劫といふ大昔に、修行得道したる常住の佛なりと、本成佛せし時の古きを顯して、無始の久遠の德體を發揮す。

【本地】垂跡は足跡を垂る、義、本地は本住の地なり、今了解に便せば、佛の根本地位なり、百千の枝葉たる垂迹の佛の垂迹の三身はみなその根本の三身に歸らざるべからず、即ち法界獨一の實體、功德の根本中心なり。

【開顯】本物の功德を蔽へる迷の情を開きて、本來具足の佛性功德を發顯す。

【常住不滅の壽命】法華の經旨本佛は、久遠の昔、其中心有の功德を集めて、其中心の妙法に統一したる卿始無終自身に受得したる卿始無終の壽命あり。

【法界萬物の顯本】釋尊はよく自ら覺ると共に法界萬物みな自身の德と同じきを顯本す。

於て標榜され意識された佛は、迹佛といふまでの程度であッた、即ち彼の文殊や普賢を伴れて居る程度の佛である。

## 五　釋迦佛ノ顯本

斯くの如く秩序的に準備を經由して、いよ〳〵眞實を明すべき時機に到達したところて、釋迦佛それ自身の顯本といふて、『俺は今日始めて成佛した佛でない、いつといふ限り知られぬ太古からの佛である』といふて、御自分の本地を開顯なされ、この生身がそのまゝ絶對無限の本體と常住不滅の壽命と妙用自在の靈力との根元であると明かした、それが本佛といふのて、これは『釋迦佛自身の顯本に托して、實は法界萬物の顯本をせられた』のて、これで眞理宣明の總勘定をつけられたものてある、この大說法の興り



【本成の弟子】本時成道の弟子即ち本化菩薩也。

【末法】釋迦牟尼佛入滅の後、正法像法各一千年を經過して次に來るべき時代を末法と呼ぶ、詳くは後を見よ。

【彌勒菩薩】所謂迹化の菩薩にして、行功漸く深く、今番出世の佛釋尊に次ぐて、後番に佛となるべき至高の位に在る菩薩也、慈氏菩薩と譯す。

はといふと、この本佛が成道已來、その初めより影と形との如く聲と響との如く、相伴ッて居る本成の弟子、即ち本化の菩薩といふものがある、生粹の佛法を弘める場合には、是非この菩薩てなくてはならないので、一つは『これを召出して、末法に於ける法華經弘通を特別命令する爲め』と、一つは『この菩薩を召出して來なければ、釋尊みづからの本地を證明的に說き明かすことが出來ないから』といふのて、佛大音聲を以てこれを招き出す、その出現と共に、この菩薩の出處が問題となッて、注文通り一會の大衆が疑ひを起し、彌勒菩薩が代表者となッて佛に質すと、『これは吾本地の弟子である』との答に、いよ〳〵疑ひは大きくなッて、『およそ菩薩の師たるものは、必ず佛てなくてはならぬ、然るに此菩薩たちは、却々昨日や今日の出來星の菩薩てない、なんでも

【父少子老】『法華經』「從地涌出品」の語、本化の菩薩衆地より涌現して佛前に侍候せる時、會の大衆、其の貌の面貌遠かに佛に過ぎたるものあるを見て、疑ふ心あり、彌勒菩薩衆に代て此事を佛に問ひ奉る、師子奮迅の力あり、恰も新月の如き諸の大聖、世尊に倒せる數の化菩薩の父たりと疑て此語を爲せしなり。

餘ほど舊くからの菩薩に違ひない、その德容風采から推しても、大きい聲では言へないが、釋尊よりも勝れた方らしい、それが中々の大數であるから、いよ〳〵變だ、失禮ながら今の釋尊は、佛には相違ないが、その佛に成られてからが、たッた四十何年、いかに如來のお手際でも、御自分よりも勝れた、こんな立派なお弟子を、かくも多數に何うしてこの短日月の間に造ッたのであらう、あまり辻褄が合はな過ぎる、譬へば二十四五の壯年者が、百歲の翁を指して、これ吾が兒也といふのと一般である』と、「父少子老」といふ疑問を設けて、その滿足なる解決を要めた、佛これを解決する爲めに、『我れは今の世で出來た佛でない、太古からの佛で、その時分から手鹽にかけて育てた弟子が、この本化の弟子であッて、吾が眞實本懷の大道たる法華經を弘むるには、是非と



【久遠の本法】久遠本時に於ける佛陀の證り得給ひし實相の眞理を云ふ。

【一會の大衆】佛陀說法の會座に列れる聞法の大衆を云ふ。

【同一體】久遠本佛の體は常住不滅の壽命を有し、而も其一體に法身(理體)報身(慧身)と衆生の機感に應ずる應化身(悲用)とを具備せる也。

の者でなければならぬから、召び出したのである』と、こゝに始めて佛の本地が顯はれ、それと共に、久遠の本法が顯はれ、今まで眞實を隱して居た佛の說には、やはり未だ眞底の本面目が明かされてない、その佛の資格が淺新なるが如く、その說かれた眞理も、那かに缺がある、隨ッて其不完全な敎法で立てた修行は、圓滿の功を收めることが出來ないわけ、いかさま佛が法華經を說かせたまふ初めに、『四十餘年には未だ眞實を顯はさず』と仰せられ『是故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずること能はず』とて、是までの經々を數へ擧げて、みづから『無効だ』と宣告なされたことが、これで雲霧はらッて能く解ッたと、一會の大衆、始めて夢のさめたる如く、眞の佛境界を見ると共に、各自の本地もこの本佛につれて、三身常住の同一體なることを悟ッて、まこと

【一切法】一切萬法を云ふ、又諸法とも云へり、即ち宇宙の森羅萬象を云ふ也。

【本佛開顯】佛の開迹顯本を云ふ、『法華經壽量品』の所說に、即ち中間の迹を開て其久遠本時に於ける三身四諦の成道を明されたるを云ふ也。

【本法の覺體】即ち本佛を云ふ、本法と本佛とは一體の兩面にして能所を以て區別する也、覺の上に約せば法は所覺にして佛は能覺なり。

【教法詮理の體系】教法所詮の理路脈絡の系統と云ふこと。

【教行緣起の關係】教に依て行を起す、教は即ち行の軌也、此行に依て目に合ふ事を得る也故に人法ともに矛盾したることは成立せざる也。

の成佛をしたといふのが、法華經の中心主點である、法華經の中心は、やがて全佛教の中心、佛教の中心は、即ち一切法の中心であるから、この『本佛開顯』の一談道が、法華經の眞價値なると共に、一切萬法に於ける黑白迷悟の死命を扼したもの』である。

## 六　本佛ト本法ト本化

かくして本佛と本法と本化との三つが、離すことの出來ない一連の主要となッて居るのであるから、『本化を帶びた佛ならば本佛と知り、本佛ならば本法の覺體』と知ッて、こゝに始めて佛教の眞意義が光顯せられて來るのである、佛だけ本佛で弟子は迹化とか、佛だけ迹佛で法が本法とかいふことは、佛教化導の原則として、教法詮理の體系として、決して〳〵



【雜稱】理論の陞出したる稱呼と云ふこと。

【天竺出來や支那製】佛は天竺に出現せりと雖も天竺を以て佛法の本場とする能はざる也、佛法の華經を說かせ給ひしと雖も其說の唯百說の一說にして其思想の妙用を活現する能はざりし、及び此處に停來せしの適所に停まるべき處なり、印度支那に於ける佛教は、滅後支那に傳播せられ、其思想を期して存在なり、日本に停て始めて妙用を活現す、其活現は本化の時に來たる也、而も其活現は後に出現せる天竺製の佛教は菩薩の出現なり、「註釋的」支那製の「質行的」日本にぎりて、「具體的」となれる也。

そういふ無秩序な不規律なことは出來ないのである、之を譬へて見ると、吾が日本に於て、『國體』と『皇室』と『主權』との三つが、どうしても離して孤立することが出來ない、又他のものと混合せしむることの出來ないのと同じ意味合である、故に今こゝに「本化妙宗」といふ名稱の影はす所は、最も大切なる義稱であッて、『名は體を顯はす』の格で、「本化」と冠稱したゝけでも、この宗旨がたゝの宗旨でない、天竺出來や支那製の佛教でない、何等の歷史にも人種にも超絕して、なべて人間の尺度や眼鏡の屆く範圍で忖度の出來ない、絕對の大い古い久しい、而して深い廣い高い潔い固い强い明かなものであッて、一切の靈の源たり力の根元たるものだといふことが知れるのである。

【證成、顯說】佛により即悟せられ大成せられ且つそれを衆生に與ふる爲めに顯露に周到に觀き示されたるをいふ。【祖述、體現】本化の菩薩は元より本佛同體の大士なるが故に、少しも誤らずに本法を祖述し傳へて、且つそれを身に行ッて、實地に體得立て、世に示せるをいふ。

# 第三章　本化妙宗ノ概要

今順序を追ッて「教法」「宗旨」「信仰」「修行」の段々を絮說する前に於て、先づ一わたり本宗の概念を把住して置くのが必要であると思ふから、茲に搔い摘んで概要を述べ、讀者の胸底に大體の標準を與へて置かう。

先づ此の「本化妙宗」と云ふ宗旨は、本佛釋尊によりて證成せられ顯說せられ、本化大士によりて祖述せられ體現せられて、地上不滅の光となり、人間無上の依止處として、世界統一の原動力たるべく建てられた所の宗旨であッて、其宗要は、法界の大眞理を究め盡して、それを少しの混雜物もなく、人間の血や肉に調和するように程よく調整して、すべての人々の日常生活の間に活現せ





【大自在】何ものにも碍られざる境界、我波羅密。【大安樂】少しの苦痛煩惱なき安樂の境界、安は常波羅密、樂は樂度羅密。【淨樂】法淨安樂いづれも佛境界をいふ、淨は淨波羅密。【經文祖典】經文とは『法華經』と『無量義經』『觀普賢經』の三部、其他には傍依の『涅槃經』、祖典とは日蓮聖祖の『御遺文』、并に『御義口傳』『日向記』『註法華經』をいふ。【華嚴】如來成道の後初めて法身の菩薩の爲めに色心融通の廣大なる法門を明かし給へる經說。華嚴の後ち前說を收めて更に下根なる二乘といふ人間を聽衆として專ら「戒」と「定」と「慧」の三を各別に說いて佛教の輪廓を知らしめたる小乘經。【阿含】阿含ノ教に滿腹せる二乘の根性を破して其向上心を儲すべく佛と淨土との見本を說ける一般大乘經。【方等】法理の融通を說いて法華開顯の準備を爲したる空門大乘。【般若】

しめ、無限絕待の眞理正道と、大自在大安樂とを得せしめ、齊く此淨樂に同歸して、先づ人より國に及ぼし、國より世界に及ぼし、遂に宇宙法界と共に、眞正極美の境界に安住しようといふのが目的で、釋迦佛もそれで世に出でたまひ、日蓮聖祖もそれで一生涯の大艱難をなされたので、この主張主義が、立派なる組織的教理となッて、經文祖典の儼然今日に存し居ることは、眞理正道の嚴明なる本典であると共に、佛陀聖祖が常恒に吾人を救はうとして『碎かれた肝膽の遺片』である、『流された精血の瀝り』である、粗末に考へてはならない。

さて以上の目的を達する爲め、釋迦如來は印度に於て法華經を說かれた、此法華經を說く爲めに、聽者の機根を調へる必要があッて、その準備に「華嚴」「阿含」「方等」「般若」の四十餘年の說教があ

【涅槃經】法華の會座に漏れたる人々の爲に先の四教を追敍追泥して法華の證を與へて日一法華の掩たるべく證顯したまひし經典。詳くは後の「教の篇」を見よ。

【佛知見】佛の事理を觀察實現する眞智。

り、最後に拾遺として一日一夜の「涅槃經」の說敎があッて、それで大事既に終れりといふので、八十歳で御入滅になッた、即ち釋尊の出現は法華經を說くためで、その法華經を說く必要は、前にいふた人生救濟の大目的のためである、故に經に此事を說いて

諸佛世尊ハ、唯一大事ノ因緣ヲ以テノ故ニ、世ニ出現シタマフ、衆生ヲシテ佛知見ヲ開カシメ、淸淨ナルコトヲ得セシメント欲スルガ故ニ、世ニ出現シタマフ、衆生ニ佛知見ヲ示サントスルガ故ニ、世ニ出現シタマフ、衆生ヲシテ佛知見ヲ悟ラシメント欲スルガ故ニ、世ニ出現シタマウ、衆生ヲシテ佛知見ノ道ニ入ラシメント欲スルガ故ニ、世ニ出現シタマフ（方便品）

かくて釋尊は目的通に法華經を說いて、相手のものを悉く成佛させた、現在に於て思ひ殘す所は少しもないが、佛陀滅度の後の世のものどもを救ふといふことが、今よりも大切である、佛の滅後、「正法千年」「像法千年」、以上二千年の間は、まだ幾等か修行もし、證悟もするものがあるが、其後の「末法」といふ惡時代になると、敎はあッても行ずるものがなく、隨て證るものもない、煩惱惡業の尤も盛なる惡世である、かゝる大惡世を救ふのが、もと〳〵敎法の本領なり佛の目的なりである、佛陀出世の本懷たる法華經は、いふまでもなく此惡世を救ふが大々目的である、故に佛は御弟子中殊に勝れた本化の菩薩を召出して、特に末法の弘敎を懇命せられ、末代の救濟を全ふすべく、「塔中別付囑」といふて、特別なる付囑があッた、本化の菩薩この別命を受けて「末法の初め」に、代々の諸賢聖に豫言せられた、『東方の小國にして、而も一乘有緣の靈土たる日本國』に出現あり、經文の豫證通り、「三類の强敵」に逢は

【正法千年】佛入滅の翌日より一千年の間を「正法」の時といふ、敎行證の三つ正しく行はれし時代をいふ。

【像法千年】正法の終りより又一千年の間を「像法」の時といふ、敎あり行あり、證るもの無き時、即ち形式的佛敎となれる時代をいふ。

【煩惱】凡夫の性欲、習癖小我の見より起る煩惱、自ら苦み他を苦しむるをいふ。

【塔中別付囑】『法華經神力品』の付囑をいふ「塔外悲付囑」に對する也。

【付囑】佛自ら所化の弟子衆に弘敎を命令せらるゝ儀式なり。

【末法の初】さきの正像法の二千年過ぎて後其の翌日より五百年の間をいふ、翌日は末人の出現は「末法」に入ッて百七十一年目なり。

【一乘有緣の靈土】法華經と先天的契合ある最勝の因緣を有せる國土をいふ、『瑜伽論』に「菩薩の小國あり其中には只大乘の種姓のみあり」

と云ひ、僧柴の後記に「此經は東北に絲あり汝諸て除弘せよ」とあり皆其有緣を證明せり。

【經文の證證】　經文に「末法」に於ける弘經の狀況を豫言し證明せられたるいふ。

【三類の強敵】　經文に豫證せられたる三種の法敵をいふ、三類とは俗衆增上慢、道門增上慢、僭聖增上慢をいふ。

【權門】　爾前四十餘年の方便經を依經として立てる宗門をいふ。

【法界唯一善】　妙法五字を持ち護るを以て絕待的最勝の善根となりとし之を一切善の根元なりと歸着なり爲す。

【大義名分の明敎】　法華經は王經、諸經は臣經、釋尊は本佛、諸佛は迹佛、權佛と、名を正し分限を定め、統一の大義を主とする敎なるいふ。

【四箇格言】　一切の諸宗敎を四箇の宗旨に攝して、其邪義餘法を破斥せられたる聖語を云ふ、念佛無間、禪天寬眞言亡國、律國賊の四大格言これなり。

れ、打擲惡口、杖木瓦石、刀杖毒害、流罪死罪の諸難に迫害されて、この救世の大道を宣傳せられた、その敎へ方はいかにといふに、先づ破邪の方面には、三國二千年來のあらゆる諸宗を批判決擇して、法華經を奉ぜざる宗敎はすべて權門邪敎として、法華經を信じ持つことを、善中の大善とし、法華經を用ゐざるを、惡中の大惡として善惡の大標準を、只此一節に集中し、醇要精化、法界唯一善の妙義をかゝげ、天に二日なく國に二王なし、法は法華經の一法、佛は釋迦一佛、『技葉はよし繁多なるべし、根本は必ず一ならざるべからず』と、確乎不拔の大信條に依て、大義名分の明敎を垂れ、嚴明なる『五綱の敎判』に根據しては、彼の有名なる『四箇の格言』を主張して、最後の良斷を諸宗の頭上に下した、その顯正の方面には、法華一乘の正理を表彰するに、『三大祕法』の





【顯正】　とは破邪の反對にして正義をあらはすことをいふ。

【法華一乘】　「十方佛土の中には唯一乘の法のみあつて二も無く三も無し」の金言より來る。

【三大祕法】　三祕とも云ふ、本宗歸依の極旨、

妙法 ─ 本門の題目（慧）
　　 ─ 本門の本尊（定）
　　 ─ 本門の戒壇（戒）

尙詳しくは後の第三篇「宗旨篇」を見よ。

【一本一要】　天地の間には唯一つの本佛、唯一つの敎法のみとして此他を認めざるいふ。

【衆本衆要】　佛も法も中心を認めず隱々により種々の致あり、と執する邪義。

【國性】　尊高なる國體に根元せる國民の享け得たる特殊の性情をいふ。

## 病的國民

大法門を以てし、法華經の敎主を本尊とするの外、他のものを本尊としてはならぬ、法華經の敎理を信ずるの外、他の敎法を信じてはならぬ、法華經の戒を持つの外、他の戒を持てはならぬ、總じて法華經といふ正しい理義から得た安樂でなくては眞の安樂でない、法華經を離れた理窟は多少理窟らしく聞えても、つまり究竟の道理でない、所謂『盜人にも三つの理』の類である、世はこの一本一要を失ッて衆本衆要主義に流れ、天に二日三日あり、國に二王三王あるが如き亂離を極めた間違だらけの敎法に率ゐられた爲め、吾邦の如きも曷時とはなしに國性を誤られ、民性を害し、士風を傷ひ、民俗を枉げて、似ても似つかぬ『病的國民』と成て了たのである。世はいつまでも、斯る過失を繰返して居るべきでない、人として大に覺醒するの要あると共に、國としても大覺醒を

【國命】　國家の運命をいふ。

【建都の勅宣】　『上は則ち乾靈（アマツカミ）國を授くるの德に答へ下は則ち皇孫正を發ふの心を弘め、然る後六合を兼れて都を開き八紘を掩うて宇（イエ）と爲さん亦可ならずや』、又『天業を恢弘し、天下に光宅せん』等の勅語、世界統一の洪謨に就ては『世界統一の天業』を見よ。

【法國冥合】　佛法と國家と融合して一體となる事、所謂王法佛法に冥し、佛法王法に合して王臣一同に三大秘法の宗旨を奉ずるをいふ、詳くは『日本國の宗旨』を見よ。

【窓教】　國民一般が必ず持たざるべからざる國祖的教法。

爲さねばならぬ、日本國がこの法華經に歸向せねばならぬことは、先天的國命ともいふべき約束である、抑そもこの國は、建國のはじめに於て、すでに道義を以て世界を統一する目的で建られたのであることは、神武天皇の建都の勅宣に明かである、それより爾來、代々の聖天子、皆この皇謨に則ッて民を率ゐられた、ところで法華經は『世界を統一すべき教』である、日本は『世界を統一すべき國』である、世界統一の聖業を以て建られた國が、世界統一の教法を歡迎すべきは理の當然である、こゝに於て法國冥合の一大憲教たるべく、弘めもし持ちもするの必要がある、若しこの意義を離れて信じたのでは、『國を離れた個人』、『世界を離れた國』といふ意味に墮ちて、結局孤立に終るのである、孤立は破壞の素であッて、建立の意義でない、全く建立に反するものは、すべて





【寶現境】　眞理の道を事實に現したる國柄。

統一教は必ず統一國を根據として發展す

【願業】　それを遂げんと堅く志し願ふ心の事業の上に顯れたること。

亡國破家の道である、國家が世界を度外し能はざるが如く、個人は決して國家を離るゝことが出來ない、即ち個人の成佛を積んで、國家の成佛とするのである、國家の成佛を期するわけは、必ず世界を道義の中に統一して、眞理正道の實現境たらしめねばならぬと云のが「本化妙宗」の主張、日本建國の天業である、これに進むべく歩し、これに合すべく集り、これに安んずべく行ひ、これに住すべく努むる、それが吾人の理想である信仰である、この意義を充たすべく法華經を信ずる、この意義を發揮すべく法華經を行ずる、これを離れては信仰も修行も證悟も成佛もない、この願業を命として活きて居る、この活氣精力によりて、少しても世を利導し人を救濟する、自己はどうならうとも必しも氣にかけるに及ばない、なぜならば、日本國が國體の外に國民なきが如く、法華

眞の我は其中に在り

【地獄業】大極惡事といふ意味。

經の外に我等はない、法華經の精神即ちこれ我等の精神である、法華經の目的即ちこれ我等の目的である、法華經さへ立てば、眞の我れは其中に存して居る。

善ニ付ケ惡ニツケ法華經ヲ捨ルハ地獄ノ業ナルベシ、大願ヲ立テン、日本國ノ位ヲユヅラン法華經ヲステテ觀經等ニツイテ後生ヲ期セヨ、父母ノ頸ヲ刎ネン念佛申サズバ、ナンドノ種種ノ大難出來ストモ、智者ニ我義ヤブラレズバ用ヰジトナリ其外ノ大難風ノ前ノ塵ナルベシ、我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン、我レ日本ノ大船トナラン等トチカヒシ願ヤブルベカラズ（開目抄）

この三大誓願の聖文は、有名なる一大靈文であるが、この中に法華經主義の斷乎たる確信と、その公明なる理斷とは、眞に遺憾なく發表されてある、これが「本化妙宗」の概念である。

即ち「本化妙宗」は、一切衆生を同一眞理の下に正化して、道義的に世界を統一するため、釋尊によりて首唱せられ、特に末法時代の必要として、本化の菩薩に濁世の弘教を別命し遺留されたる正法にして、日蓮聖祖これを日本に傳唱建立して、退ては釋尊の本懷を滿足し、進んでは事實の常寂光土を建設せんとて、三國二千年の舊佛教を批判するに「五綱の教判」を以てし、法華經の實義を吾人實行の上に現ずるため、「三大祕法」の妙義を立て、「五綱」以て他を判じて自を立し、「三祕」以て自を顯して他を利し、この「三祕」「五綱」を確信實行するを信行とし、その用意應用を願業とし、世界統一の宗綱に住し、「續種護法」の信條を確守するのが、「本化妙宗」の概觀である。

【常寂光土】壞れず燒け滅せず常住にして諸の淨穢約雜を離れ佛の功德のみちゝたる淨土にして最上の佛土。

【五綱の教判】知教　教法の判釋　知機　機根の識別　知時　時代の觀察　知國　國土の鑑別　知序　教法流布の前後を考定すること

詳しくは後を見よ。

【三秘】先の「三大秘法」に同じ。

【續種護法】佛の種たる妙法五字を相續護持することにて即ち修行する者を殖やし擴めることゝいふ。

【群生】　もろ〳〵の生類、衆生といふと同じ。
【大論師大人師】　印度の菩薩論を造りて佛經を釋するを論師とし、經論により各一義を釋するを人師と云ふ。
【三國】　印度、支那、日本をいふ。
【釋論】　釋經論といふ略、其經を解釋したる論。後に詳し
【龍樹菩薩】　後に詳し
【天親菩薩】　後に詳し
【法華論】　二種の釋あり、後魏菩提流支の二卷、元魏勒那摩提の一卷一十無上二種甚深」等の重要なる解釋あり。
【大智度論】　『大般若經』の釋論、羅什三藏の譯百卷あり。
【智藏】　寺號により開善と通稱す、光宅、莊嚴妥法師と梁の三大法師の一、亦法華經を講ず。

# 第四章　佛教ノ大統

## 一　三國流傳

法華經の眞理は、すでに釋尊の開說によりて、威嚴ある大訓誡として、廣く永く滅後末代の群生を救ふべく貽され、降て代代の大論師大人師によりて、縱橫深淵の解釋を附せられ、正しく大王經の面目を持して、三國に崇び奉ひられたのである、上古にありては、印度の大論師たちて、法華經の釋論を造ッたものが、五十餘人もあるといふことて、勿論彼の龍樹菩薩も造ッたのである、眞に盛んなものといふべきだが、惜いしことには此方へ渡ッたのは、天親菩薩の『法華論』一部だけである、まかし龍樹菩薩は『大智度論』の中に、『法華最勝』と決して、その眞價を定めた、支那





【法雲】　光宅と通稱す多く法華を講じ、合座天雨を降すに至る、『法華義記』八卷あり。
【吉藏】　嘉祥大師といふ三論宗の大德、亦法華を講じ、「義疏」「遊意」の著あり、後、天台大師に歸伏して剃髮、捨つ。
【親基】　慈恩大師といふ唐ッ玄奘の高弟法相宗の意により『法華玄說』を造る。
【天台大師】　後に詳し
【法華三昧】　法華經によれる正しき禪定と其より生ずる智慧。
【慧文】　後に詳し。
【慧思】　後に詳し。
【法華玄義】　妙法蓮華經の題號五字に就て幽玄微妙の義理を釋し出す、十卷あり。
【法華文句】　法華經廿八品の文々句々を釋し妙義を盡ず十卷。
【摩訶止觀】　法華圓妙の理により一念三千十乘觀法を明す、十卷あり、三書とも天台の弟子章安灌頂の筆記。
【震旦の小釋迦】　天台無礙の妙辯義、釋尊の再來にもひすべしとて、世斯く歎稱す。

に在ッては、開善寺の智藏、光宅寺の法雲　嘉祥寺の吉藏、慈恩寺の窺基等の諸大家が、天台大師に前後して、いづれも盛に法華經の講述に力めたので、いかに法華經が重んぜられたかゞ解るであらう、尙講說のみでなく、實際これを修行に經て、法華三昧の悟りを開かれた人は、北齊の慧文禪師に次ては、南岳の慧思禪師である、天台大師はこの慧思禪師を師として、法華經の深義を悟り、遂に『法華玄義』『法華文句』『摩訶止觀』等の大講說を開いて、空前の妙義を佛教大系の上に建設して諸宗の異說を殘りなく批判せられた、洪大の佛教始めて大歸を得、深邃の妙旨始めて光輝を揚げた　眞に千古の大觀である、『震旦の小釋迦』と稱揚せられ、天竺から『天台の敎迹を渡されたし』と申來ッたのも尤もの事である、この已後に於て、支那の佛敎は非常の旺盛を極め、華嚴、眞

言、法相、禪等の諸宗、或は勃興し、或は新たに入來り、蘭菊の美を競ッて、法林いよ〳〵榮えたが、要するに卑きは天台に掩はれ、高きは巧を天台に竊みたるに過ぎずして、佛教判釋の大權は千古を空うして獨り天台大師に歸した、これと殆ど同時に、吾が日本に於ては、聖德皇太子が三經を講ぜられた時に、『法華經義疏』を撰述せられたのが、世に『上宮疏』と稱して行はれて居る、後に唐招提寺の鑑眞和尚が來朝の時、天台の三大部を將ち來ッたのを、傳教大師之を見て、『佛教の正統斯に在り』と爲し、遂に支那の天台山に到ッて、六祖妙樂大師の直弟道邃行滿の二師に逢ッて敎觀二門の法脈を承けて、歸朝の後、天台大師も未だ弘めなかッた法華圓頓の戒法までをも弘めて、日本の天台は、正しく三國の佛法を大成せるものとなッて、内には三學整々として法統ます

【敎迹】　敎の迹は書となりて殘るなり。

【聖德皇太子】　後に詳し。

【上宮疏】『法華義疏』とて四卷あり勝鬘維摩の疏と合して上宮三疏といふ、上宮は太子の別名、我國法華經註疏の最初。

【鑑眞和尚】　後に詳し。

【天台三大部】『玄義』『文句』『止觀』の三部をいふ。

【妙樂大師】　後に詳し。

【道邃】　後に詳し。

【行滿】　後に詳し。

【敎觀二門】　敎とは一代佛教の同異の相を分別して眞實の教理に歸着を求むるが敎相、觀門とは其眞實の理を我心に觀ずる成佛の觀心門即ち修行。

【法華圓頓の戒法】　法華圓頓の教理により、梵網の大乘戒を開顯して、圓頓の戒法とす。

【三學】　戒、定、慧を三學といふ、「戒」以て煩惱の賊を捕へ、「定」以て之を縛し「慧」以て之を斬るといひ傳ふ。





〳〵榮え、外には桓武の聖主ありて、王法佛法の冥合を奬げられたので、一たび佛教の天下を經王法華の下に統一したのは、非常な勳功である。

## 二　正統ノ法系

法華經は佛教の帝王である、法華經を度外視して弘めた佛教は統治の大權を失した亂世の狀態である、法華經を宗奉して無上の法としたものは、即ち佛教の大統を復したものである、三國に亘ッて、眞正なる法華經の行者は、これまでに四人あッた、即ち印度で釋尊、支那で天台、日本で傳教、日蓮、の二師である、其外には意見講說の上に於て正統に貢献したものは、これが傍系として功績を認むべく、左に圖表して見よう。

【桓武の聖主】　桓武天皇は英主なり、大和平城を帝都に適せずとして、山城長岡の京に遷り遂に平安の新都に遷り規摸宏々として將來國運發展の基をなし給ふ、且つ天皇は大乘佛教の興隆に志し、傳教大師に歸依し比叡山延暦寺を王城の鎭護と定められ、大師の弘通する法華天台宗を諸宗の上に置き、佛教統一の基と王法佛法冥合の策とに盡されし御方なり。

【經王】　法華經は釋尊の說かれたる澤山の經々の中の最第一のものなればこれを世間の帝王に比して經王といふ。

【宗奉】　最上乘の中心骨髓の經として、それを尊び崇奉するをいふ。

### 正統四人

【釋迦牟尼佛】父を淨飯大王、母を摩耶夫人といふ、今より約二千九百年前四月八日中天竺迦毘羅衞國藍毘尼園に於て降誕し給ふ、時に三十二の奇瑞あり、七歩して「天上天下唯我獨尊」と唱ふ、幼名を薩婆悉多といふ、長ずるに及び武技學藝倫を絕す、御年十七摩訶那摩婆羅門の女耶輸陀羅姬を納れて妃と爲す、十九歳の時、世の無常を觀じ衆生救濟の大志を起して出家す、檀特山に入りて跋伽婆羅門に從ツて道を學し難行苦行し身體羸弱すれども、皆意を滿す能はず、御年三十の時遂に尼連禪河畔に於て牧牛女の捧ぐる乳を受けて身相圓滿、氣力充足し、菩提樹の下に端座し衆の惡魔と鬪ツて之を降伏し心淨く滿然として十二月八日淨月映徹明星燦爛たる時豁然として大悟し給ふ、その道場を動ぜずして大機の爲に三七日の間『華嚴經』を說く、次て波羅奈國鹿野苑に於て憍陳如等五比丘の爲に小乘四諦の法を說き、爾後四十二年給孤獨園、毘耶離城、大寶坊、竹林園、鷲峯山、他化自在天等に於て『阿含』『方等』『般若』の諸經を說き、或は父王を度し、或は波羅門、大臣等を敎ひ、諸の機根を調へて遂に最後八年王舍城靈鷲山及虛空に於て出世の本懷として統一の王經たる『妙法蓮華經』を演說す、御年七十九の二月十五日拘尸那城跋提河婆羅雙樹の間に於て、『涅槃經』を述べて最後の遺誡とし、不滅の滅に入り給ふ、爾後法燈數千歲、本化の出現によりて眞相全く顯る。

- ●●釋迦牟尼佛（天竺）
  - 龍樹（天竺）（有『法華論』不到）
  - 天親（天竺）—（『法華論』）
  - 須利耶蘇摩（沙勒）—— 羅什（龜茲）—— 道生（支那）
- 慧文（支那）
- 慧思（支那）號南岳大師 —— 聖德太子（日本）（『法華義疏』）
- ●天台大師（支那）諱智顗　字德安（『玄義』『文句』『止觀』）—— 道宣（支那）—— 鑑眞（支那、歸化日本）
  - 章安（支那）諱灌頂　此間三傳至湛然
  - 妙樂（支那）諱湛然　號荊溪尊者
  - 道邃（支那）
  - 行滿（支那）
- ●傳敎大師（日本）諱最澄
  - 義眞（日本）叡山第一座主
  - 圓澄（日本）叡山第二座主正統斷絕
- ●蓮長法師（日本）後更日蓮 ——（末法萬年廣宣流布）





【龍樹】南天竺の人、佛の滅後七百年に出世す、天資聰悟、幼にして外道の『四韋陀』四萬偈を誦し、通達す、人生色然を道求するを樂となすとて、王宮に入りたるも欲の遂げがたきを悔し悟し、爾後專ら佛典を研究し、付法藏の第十三に列す、馬鳴菩薩に紹て專ら大乘を弘宣し、多くの論を造り、外道を難じ、小乘を破す、正法時代に出でたるを以て、表には『空宗』を傳へたるも、其著『大智度論』には法華の勝義を述べ、『中觀論』には一心三觀の妙旨を示して、天台弘敎の先驅となる。

【天親】梵語にて婆藪盤豆といふ、世親とも譯す、佛滅後九百年の人なり、始め『一切有部宗』にて出家し五百部の小乘論を造り外道を破し、また大乘を誹せしが、兄無著菩薩の敎化により、小乘を捨て大乘に歸し、懺悔の爲に五百部の大乘論を撰して盛んに五天竺に弘宣す、就中『法華論』は無上二稱甚深等の妙義を顯揚して後世法華傳弘の資となす、又『涅槃論』の著あり涅槃經の釋なり、唯識論其他多くの論述あり、世に千部の論師といふ。

【須利耶蘇摩】沙勒國の王子にして『日月』と譯す、三藏に通じ大乘を解す、羅什に遇て大乘の法を授け、後『法華經』を授けて「此經は東北に緣あり、汝傳弘せよ」と命じたる非凡の王子なり。

【羅什】具に鳩摩羅什といふ、『童壽』と譯す、龜茲國の人、七歳にして出家す、小乘の典籍に通じ、須利耶蘇摩より大乘を受け、晉ノ太元七年涼州に至り、爾後支那に留りて、專ら經典の飜譯に從事す、七十四部二百八十四卷の大小諸經論は門弟子と共に譯出する所なり、『妙法蓮華經』七卷の翻譯はその最も心血を灑ぎたる所にして、前譯の誤を正し、經義と相待ッて譯文能くその意を傳ふ、表には大乘空宗の祖と仰がるゝも、舌根不爛の瑞あり、傍系ながら法華傳弘の一員たりしも明なり。

【道生】羅什三藏四哲の一人にして能く義理に通じ、什の翻譯事業を資け、又『法華經疏』を造りて、その妙義を弘宣す、『法顯泥洹經』の一闡提無佛性の說を破し、法華の意に依りて本義を歸顯したる卓見家なり。

【慧文】北齊の人にして、龍樹菩薩の造れる『大智度論』の『三智在一心中得』并に『中論』の『因緣所生法』の四句の偈に依ッて空假中三觀の妙旨を悟りて弘傳す、衆徒百千人、學者之を仰ぐ、後この妙旨南岳慧思大師に傳ふ。

【慧思】南岳大師と號す、元魏南豫州武津の人なり、幼にして『法華經』を誦し、十五にして出家し專ら法華を讀む、豁然として大に法華三昧を悟る、又慧文禪師より空假中三觀の妙旨を授り、大蘇道場に於て盛に一乘法華の義を講ず、法を天台智者大師に傳へ、大建九年六月寂す、壽六十三、述ぶる所『法華懺法』『安樂行儀』等皆法華の旨を說く。

【聖德太子】用明天皇の皇子なり、初め『廐戶』といふ、敏達天皇三年正月元日誕生す、後父皇の池邊宮の南上殿に居するを以て『上宮太子』といふ、幼より聰明、群を超へ、航來の典籍に通曉し、十九歳皇太子として攝政の要職に居る、最も佛敎の興隆に志し、高麗百濟より諸僧を招き、講筵盛なり、堂舍佛像を造ること多く、法華經等の講讚を開くこと數回、推古天皇十二年憲法十七條を制定し、諸臣に頒與す、能く王法佛法冥合一體の旨を述ぶ、その他工業美術文物を輸入振興す、同三十年二月斑鳩宮に薨す、年四十九、述ぶる所の『法華』『勝鬘』『維摩』三經の『義疏』は能く經を闡き理を顯はし、法華經の力用を以て主とせられたる旨明かなり、世に太子を支那南岳大師の後身と傳稱す。

【天台大師】諱は智顗、字は德安、陳姓にして潁州の人、初名光道、七歳にして普門品を誦す、貫曜あり、十八歳出家し廿歳に具足戒を受け、慧曠に從て律戒に通じ、又大賢山に諮み法華經及無量義經を誦す、廿三歳にして、大蘇山に詣りて慧思禪師に謁す、路兵又の交る處かゝり、求法志堅し、南岳見て曰く『昔俱に靈山に法華經を開く、宿緣の追ふ所今また來れり』と、即ち普賢道場を示し、四安樂行を觀て法華三昧を行ぜしむ、二七日を經て行道し、經を誦す、『藥王品』の『是眞精進是名眞法供養如來』の文に至り豁然として定に入り法華を照了し、羅を以て南岳に白す、南岳曰く『爾に非ずんば證せず、我に非ずんば知らず、所發の定は法華三昧の前方便、所發の持は初旋陀羅尼なり』と、時に年廿三、居ること七年、往々師に代りて講經す、『大品經』を講ずる時、三三昧三觀の旨を師に開き、餘は自ら說す、智辯深妙、前師慧懷か臨法慈客す、南岳自の數授に非ず、法華三昧の力となす、卅歳陳に入り、金陵瓦官寺に『法華』文び『智』を講ず、三十八歳天台山に入り、修禪寺を開く、至德三年陳主の爲に太極殿に『智論』及『仁王』を講じ帝師と

なる、禎明元年『文句』を講ず、年五十、隋開皇十一年揚帝の爲に菩薩戒を授く、此年荊州玉泉寺を建て、十三年『玄義』を講じ、翌年『止觀』を講ず、十五年、鄰州に至り、再び天台山に入り、十七年十一月廿四日寂す、壽六十、隋揚帝、『智者』と號せしより、「智者大師」と稱す。

【道宣】律宗の祖、廿歳にして律を學び唐の高祖武德七年、終南山白泉寺を開き居る、南山律師と稱す、『四分律』を弘通し『三藏』に通じ、『高僧傳』等著述多く、『妙法蓮華經弘傳序』を撰し、又天台を讚じ、佛月を指すに同じく宗は一極に歸すと稱し其學に推服せり。

【鑑眞】唐の揚州の人、道宣の弟子、十四歳にて出家し、十八道岸に律を學び、廿一年弘景に具足戒を受け、後律を研究し、天台を學ぶ、[illegible]天平勝寶六年、我國に來り、東大寺に戒壇を建て、天皇已下受戒す、又唐招提寺を建つ、師が戒

將來の經論多く、中に『天台三大部』『四敎儀』『小止觀』あり、後年傳敎此三大部に依て天台宗に歸す、天平寶字七年、七十六にて寂す。

【章安】諱は灌頂、天台の高弟、『玄義』『文句』『止觀』を筆錄して世に傳へ、其他天台の講記を整正す、支那天台の第二祖、『涅槃疏』等の著書少からず、玄義の後、唐貞觀六年七十二歳にて寂す、天台の敎を傳へたるは實に師の功也。

【妙樂】諱は湛然、妙樂大師と號す、姓は戚氏、晉陵荊溪の人、荊溪尊者と稱す、家本と儒を業とし、十七歳にて左溪玄朗に從ひて天台の學を究め、三十八歳にして出家し、常に天台の敎觀を以て任となし、『釋籤』『弘決』『記』三大部の註釋を作り、『金剛錍』『止觀義例』等を著して他宗を破斥し、天台中興の祖と稱せらる、建中三年寂す、七十二。

【道邃】興道尊者、又は和尙といふ、唐の大曆中荊溪の門に入り、天台の敎觀を受け、深く幽玄を悟り、止觀の旨を授けられ、輔行を作る、日本傳敎大師に多く法を授けたり、此師より天台の敎相を傳ふ、天台山國淸寺に住す。

【行滿】唐の萬州の人、始め荊溪の門に入り、後天台山佛隴寺に住し、敎法を授く、傳敎の相承多く、法門を授く、時に傳敎大師に法を傳へ、師の入滅後、我國に智者の法を傳へしめたりといふ。

【傳敎大師】諱は最澄、日本天台宗の開祖なり、近江滋賀の人、俗姓三津首、十二歳にして出家し、十九歳東大寺にて具足戒を受け、叡山に入り『法華』『金光明』『般若』の經を讀み、明年延曆二十三年入唐し、道邃行滿に從ひて天台の敎を受け、『起信論疏』『華嚴五敎章』等を研究し、和尙の『文句』『玄義』『止觀』の天台三大部を得て歸朝し、大乘戒壇を建て一乘止觀院を延曆寺と稱し、天台法華宗を開き、

安、遂に天台と共に、南都の六宗に對し、延曆寺を王城の鎭護となし、[illegible]

【義眞】相模の人、傳敎に從ひて入唐し、[illegible]

【圓澄】延曆寺第二座主、[illegible]

[illegible]宗を弘め、天台宗を繼ぎ、[illegible]

【蓮長法師】日蓮聖人の始の名、安房の人、[illegible]建長五年、[illegible]

宗義を辯論し、御衣を賜はる、承和四年十月卒す、年六十六。





【三學相傳】圓頓戒、(戒)止觀(定)台學(慧)と三學共に法華經に統一し更に三學倶に傳の妙法蓮華經といふを傳ふ、眞言をば除く際の方便とせられしのみ。

【解說の進步】佛敎敎理の解釋は、天台の圓理に從ふ故に漸々進步する也。

【理路の彷徨】餘り解釋が巧になりて、執れが佛敎の中心だやら頭も尾もわからぬようになる也。

【諸宗統一の反應】傳敎が南都の六宗を降伏せしめ叡山に天台、眞言、禪、大乘戒を密して、天台法華を以て統一せしに、統一の中心法華にあるを忘れては、其統一の反應として、眞言、禪、淨土と次第に諸宗分裂し來りしなり。

【謀叛人】慈覺智證は眞言は法華と道理同じく事相勝るといひ、安然は禪宗は天台に勝ると言ひ、慧心は念佛を末代の目足なりとして孰れも純法華經の主義に背きたればなり。

## 三 一時的統一ノ破潰

天竺で開宣せられた法華經が、支那で解釋を完成して、日本で實地建設に取掛ッた順序は、いかにも味ふべきことである、時代は段々と落下して澆末に成行く、その反比例に法華經の解釋と應用とは段々に進步して來た、所謂病が重くなるほど良藥を要するの理てある、いよ〳〵進步の極が、傳敎大師の三學相傳で一先中絕した後、甘い菓物には虫が多い道理で、解說の進步は、遂に理路の彷徨となりて、徒らに高尙幽玄にのみ走せて實行に疎くなり、諸宗統一の反應は遂に多岐雜亂の混濁となりて、人傑が出れば出るほど、理窟が多くなり、慈覺智證安然慧心などの謀反人を出して、或は眞言に內應し、或は禪宗に加擔し、又は念佛を煽動

【十住心論】弘仁十四年(傳教寂後一年)弘法大師大日經住心品に根據して、十界及諸宗の十心を判じて眞言の教判とせる書。辭は源空集を撰し、吉水に退き、專修の往生要集を閲して、念佛者となり、慧心、法然房と言はる。

【法然上人】四光大師と稱す、美作の人、十五歲叡山に登り、後黑谷に隨ひ天台教を受け、後四國に入り、諸宗の章疏を極め、智慧の叡空に入り、頓戒を中傳され、後敕されて建暦二年八十歲寂す。

【觀經疏】の意に依り、淨土宗を立つ。撰擇集を撰し、吉水に退き、專修の弟子の罪に坐して流され、後敕されて建暦二年八十歲寂す。

【圓爾】辭は辯圓、聖一國師と稱す、駿河の人、姓平氏、三井寺に入り、台教を受け、後に東大寺に關東長戒、禪寺に受戒し、更に宋に入り、禪、密、禪寺を歷學し、嘉禎元年歸朝し、藤原氏の家に入り、後宋に渡り、六年歸朝し、福岡に住し、建長七年落慶の二寺を開き、弘安三年十九に寂す。

【道元】希元と號し、承元二年入宋、年廿四、在宋六年、安貞二年歸朝し、寛元二年越前永平寺の開山となる。

【法華經は戲論】『秘藏寶鑰』に、法華宗を第八如實一道心に配し、自乘に佛の名あるも、『大日經』に對せば戲論なりといふ。

【捨閉閣抛】『擇擇集』に、聖道門の經教は捨て、上下に閉ぢよ、閣よ、抛てよ、而して唯念佛せよと勸む。

【教外別傳】佛涅槃の時、拈華微笑して迦葉に傳へ、即ち一代經教の外に心印を傳ふるが禪宗の法門で、法華經は此心を指す、禪は月也と印を指す。

【閑文字】心印こそ實物にて、各の心に在り、一切經の文字は反古に比しき不要物ぞ、各自らの心を悟れといふ也。

【法身】肉體の色身に對す、佛の心は修行して功德莊嚴せられたる心なり、此心即ち法性なり、法華經は佛の法性功德身ぞと也。餘の菩薩人師の語てなく、佛が直ちに爾か判ぜられる聖斷となり。

【直判】

する等、四海一統の大系は、こゝに諸宗分裂禍機の根元となり、一大佛教の天下再び雜亂紛淆して、どうにも纏りが着かなくなッた、この無政府の亂世に乘じて、傳教大師の入滅を待ち構へて、『十住心論』を發表した弘法大師の眞言は、計らざる慈覺智證の內應に、手もなく天下を風靡して、一たび日本を眞言化すべくなッた、その後に現れたのが、法然上人の念佛宗、これは叡山から出たので、慧心が俑を作ッたのである、續いて圓爾や道元の諸傑が禪宗を鼓吹した、これも叡山から出たのである、以上三宗の主張は、各々特殊の見地に立ッて居るのであるが、法華經を度外したことに至ッては同罪である。

眞言の弘法大師は、『大日經第一、華嚴經第二、法華經第三』と立てゝ、剩へ『後に望むれば法華經は戲論である』と貶した、勿論これは天台の所立に就て言ッたのだが、結局法華經を貶挫したことになるのである、念佛の法然上人は、『捨閉閣抛』の四字を以て、絶待的に法華經を捨てた、禪宗では、『教外別傳』と立てゝ、法華經をも閑文字として斥けた、いづれも釋尊の金言に違背して居る、釋尊は、『法華經を第一とした』のに、弘法は『第三』とした、釋尊は『末法に於ては法華經の外、利益はない』と定められたのに、法然は『末法無益』として捨てた、釋尊は『法華經を以て吾眞正の法身である』と示したのに、禪宗では『閑文字』として度外に置いた、吾等たるもの、抑そも釋尊に就かうか、法然弘法達磨等の人師に就かうか、苟くも佛弟子と名乘るほどのものにして、經教の取捨を決するに、佛の直判を指南としないといふ筈はない、いかなる智者でも大德でも、佛にくらべれは何でもない、

佛に背いたものは依用しないのが、佛道修行の原則だ。

いづれの經も、皆『それを持てば利益がある』と說いてあるには違ひない、それは其經で救はるべき機に對していふからなので、釋尊みづからの本領を證したのではない、一代の經敎を比較して、何れに本意があるといふことを立證しての上で、此經は我が本意なりと定められたのは、『その經限りの鼓吹』とは、全く趣を異にして居る、機に對してこの經を持てといふたのは、「當分」である、經と經とを較べて取捨を決したのは「跨節」である、「當分」はその經限りその機限りでの推奬で、「跨節」は一代諸經の中から撰り拔いて、正直に佛の眞意の在る所を明かしたのである、「當分」は他の機情を目安とし、「跨節」は佛の自意を定木としての判斷である、出世の本懷たる法華經であればこそ、他經と同例に誤られる

【當分】當の分際、そのときかぎりのこと。
【跨節】分節を跨越すること、一代佛敎は五時八敎種々の時節を一貫し、跨り越えて、釋尊一代敎を全體として見ること。
【機情】佛の說法を受くる人機の執着せる情識。
【自意】佛の自らの覺りにて、法華經なり、この法華經に入らしむるが、佛自らの本立てし誓願にてあるなり。



のを虞れて、くどいほどにも念を入れて、必ず〳〵『法華經を宗とせよ』と敎へられたのである、何故佛の親切を無にして、法華經を重んじないのであらう、その不明はとにかく、あまりといへば、佛の熱心を侮辱したものと謂はねばならぬ。

佛が法華經の尊崇を勸められた金言は、何十何百だか知れぬ、今これを概表して示すと、這いふ判定になる

- ▲法華經第一 ── 本門 ── 天皇
- ▲涅槃經第二 ── 迹門 ── 皇族
- ▲無量義經第三 ── 大臣
- ▲華嚴經第四 ── 大將
- ▲般若經第五 ── 官僚
- ▲方等諸大乘第六 ──

諸經の校量は佛の尤も意を注がれたる所その故なからずやは

【官僚】官僚の內には次官もある、檢事總長もある、左右もある、受付もある、何れも國用の良臣なれども非等差歷然として侵すべからず。

【對判】對は對望、判は判決で、法華經と諸經とを引き對へて、その勝劣淺深高下成佛不成佛等を決判するなり。

【見計】自分の意見にてかうであらう、あゝであらうと計り定めること。

【安心立命】安心は安住心地にて、心が法に安住せること、立命は、生れ出てたる甲斐を全ふするをいふ。

已上の分別は、佛の自說にして、「法華經」、幷に「涅槃經」「無量義經」等の明文にあらはれた比較對判である、佛自ら執拗も、斯く經敎の優劣差等を判じたまへることは、出世の本懷を水の泡にせぬ爲めである、佛のこの判定を大事とすれば、佛敎諸宗の中に、『法華經を度外視せる見計の存して居る』といふ事は眞に由々しき佛門の大事だと謂はねばならぬのである、天子蒙塵して位に安んぜずといふ事變を、國の最大事でないと謂へようか。

## 四　反統一ノ根本誤想

中には、這んなことを言ふものもある、『つまり宗敎といふものは、安心立命が主意であるから、法華經であらうが、何の經であらうが、人心をよく調へ導いて行ッて、相當の効果がありさへすれば、それで可い、何も必しも法華經が勝れて居るの、何の經が劣ッて居るのといふ詮索をする必要はない』と斯ういふ「世智辯」な說が、昔しから有る、今でも猶この思想が跋扈して居るようであるから、こゝで一つ敎訓して置かう、凡そ藥でも食物でも、その要素成分の確實でないものは、之を用ゐて確な營養にも治療にもならないと同じ道理で、たとひ一時口腹の慾を充たし、目前の小効能が有ても、根底の不確なるものは、永いうちには終に不良の結果を身に及ぼすのである、吾々は船にさへ乘れば、それで航海の目的は達し了れりとは謂へない、方向を誤ッたら、着くべき所へ着き得ない、其では仕方がない、乘るばかりが船の能ではない、走らなければならない、浮ぶばかりが船の功能ではない、浮くのは半ば已上は水の力である、浮て而かも安全でなければならない、

【世智辯】意味は佛敎の出世間の因果を知らず、之れを求めんとせず、生死無常の理に暗く、偏に現在世のみ貪眠して、その現世のことは、流石に利巧らしく、考へもし、喋りもすれども、根本に人生の秘奧、法界の眞理を知られば、その眞理を知られば、その所謂、淺薄にして少しく非常のことには忽ちにケラック也、天台大師、智顗の妙の下に二十智を說く、中一番の幼稚なる智慧也、換言せば、常識萬能主義のこと也、「世智辯聰」といふて佛の化導を受け難き八難の一。

養ふ者は食を擇び航する者は船を擇ぶ

『雨霰雪や氷と隔つれど落つれば同じ谷川の水』とか、『分け登る麓の道は多かれど同じ高根の月を見る哉』とかいふヒヒ悟りの駄歌を以て金科玉條とするものあり笑ふべきの至りも也。『谷川の水も流れて海に入り一つ潮となるを知らずや』と日ひ『居ながらにながむる月のあるものか分け登るとは迷ひ也』などと返答する人、愚なき心地する也。

ぬ、安全の保證には船の堅牢といふこと、機關船具の整頓と、船長船員の確實などいふことが具備して居らねばならぬ、吾人が宗教を信ずるといふことは、靈魂の爲に療養攝生の藥餌として要求するのである、生死の大海を航して大安樂地に到達するための船として要求するのである、一時の効驗一時の姑息に康んじて、永久の實効保安を無視するといふのは、大體に於て既に宗教を要求する本志に背いて居るのである。

若し佛教經典が、どれも同じで些も異說や衝突がないのならばであるが、『西へ行け』といふのと、『東へ行け』といふのと、二つあッたとすれば、どちらが本當であらうかと思案せねばならぬ、若しその西といひ東といふたのは、見る勝手からこそ違へ、その實は一つもので、所謂『東家の西は西家の東なり』の理窟か、又は『難波の蘆は伊勢の濱萩』の轍で、名稱だけの異りであるといふような、よく世間の半利怜の人が常に言ふ通りのものならば、何んで佛は丁寧にも執拗も、『未顯眞實』だの、『無得道』だの、『不受餘經一偈』だの、『要當說眞實』だの、『正直捨方便』だの、『唯此一事實餘二則非眞』だの、『唯有一乘法無二亦無三』だの、『已今當說最爲第一』だの、『一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提皆屬此經』だの、『一切世間多怨難信』だの、『而此經者如來現在猶多怨嫉』だの、『六難九易』だの、『十喩稱揚』だの、『分身聚證』だの、『多寶來證』だの、『三止三請』だの、『重請許說』だのと、幾ど一經の全體に亘ッて、他事もなく此經の勝能を述べるのに全力を注いだものであらう、この尋常ならざる用意から推察しても、『經の得失が、どれほど吾人の求道に必要なものであるか』といふことは、少し血の氣の循

【丁寧】一經に亘りての比較對列は後章に道々詳說せらるゝを見よ、「六難九易」は『寶塔品』、「十喩稱揚」は『藥王品』に在り。

【一經の全體】『法華經』は說ることのみ多し、說るによりて功德は增すと缺して、畢竟二十八品の全面に亘ッて經の德及び經を持つものの功德を說ぜる文の多きことは、經の所詮たる妙法ハ字といふ主體あり、持經者といふ准主體あるが故なり。

『どちらがエライ？』

環たものならば、必ず心付かねばならぬ筈である。

若し口の減らないものがあッて、『經々の勝劣は、到底吾等の知る所でないから、吾等は自己よりも智德勝れた祖師先德の指南に任せて、念佛でも、眞言でも、自分〳〵の好いと想ッた宗旨で安心するより以上の才覺はない、爾ういふお前も法然上人や弘法大師ほどエラクはあるまい』と言うかも知れない、イヤ吾人は數々這般話を聞かされて、いつも〳〵迷惑するのである、法然上人や弘法大師と吾人とどちらがエライ？……、いふまでもない、吾人は無智無德の凡愚である、固より對比ものにはなるまい、けれども若し釋尊に對した場合には、それを捨て　佛に就くのが當然だ、智德の有る無しは此の場合の問題ではない、若し吾人を侮ッて、この誠ある言を蔑ろにするなら、吾人はその人に對て『法然弘法と釋尊とはどちらがエライ』と反問する迄のことである、どんな智慧でも神通でも、「一」を二と讀み三と讀む事は出來ない、故に予は此に於て『弘法は智者なるが故に一を三と讀む、我れは愚者なるが故に一を一と讀む』と返事して置かう。

佛教に一定の主張なしと考へたるは如何にも不思議の頭腦也

## 五　世界ノ最大事實

法華經より外に佛法は無いと究ッて、始めて佛教の條理が整然と引き締り、理義も修行も統一せられた圓滿の宗教となるのである、この燒點を外づして了ッて、散漫茫漠支離滅裂に、彼れの此れのと勝手な解釋を振廻して居たのでは、佛教一定の主張が那邊にあるのかトンと判らない、今日に及んでも、未だ佛教の眞相が世に彰はれて居ないのは、全くこれが爲であると謂はねばなら

ぬ、佛教は世界で一番大きい宗教である、一番深淵な、一番博大な教法である、即ち『此人間の世の中に、佛教の有るといふことは、人間界での一番大きい事實』である、然らば佛教の中心點が知れないで、その教理や行用の混亂不統一であるといふことは、佛教界の一大事計りでなく、眞に人間界の大事件である、少くとも『一國として君主を失ッたほどの大事件』である、故に我日蓮聖人は、法華經尊奉の回復に就ては、命がけで全力を注がれた、『善ニツケ惡ニツケ、法華經ヲ捨ツルハ、地獄ノ業ナルベシ、大願ヲ立ン日本國ノ位ヲ讓ラン、法華經ヲ捨テヽ、觀經等ニツイテ後生ヲ期セヨ、父母ノ頸ヲ刎ネン念佛申サズバ、ナンドノ種々ノ大難出來ストモ、智者ニ我義破ラレズバ用ヰジトナリ、其外ノ大難風ノ前ノ塵ナルベシ、我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン、我レ日本ノ大船トナラン等ト誓ヒシ願ヤブルベカラズ』との高大堅實なる信仰主張は、單に聖人の慈念ばかりではない、全く「法華經」の教意、佛教の歸趣が然らしめた『自然の叫び』である。

要するに法華經を中心とすることを忘却した佛教は、天子を失ッた國である、精神を失ッた人間である、柱を失ッた家である、苟しも國を念ひ世を念ふものゝ、決して默して居られない所である、世人は古くより、『中心を亡くした佛教に慣れて居る』から、此樣の談道に接すると、一時は驚くであらうが、それはまだ苦勞が足りないからである。

佛教の大統を正す事は、佛滅後に於ける佛教の一大事件であッて、同時に世界の最大事件である、「本化妙宗」の創唱は、全く之が爲めである、堂々たる「五綱教判」、勃々たる「三大祕法」、その縱

教理自然の命ずる所主體の存在を擁護するのみ唯夫れ是れ耳

先づ驚けよ而して後に深く顧みよ

横不測の妙義、これより已下篇を逐ひ條を次で叙説するから、上來總要の注意を目に當、深く意を致して味ッて頂きたい。

【總要の注意】本書の「總要篇」に叙べたる各種の注意項目を目安にしてとなり。





# 第貳篇　教判

## 第五章　本化妙宗ノ成立法義

これより「本化妙宗」の組立を述べる、どの宗門でも、その宗教的成立の形式は、必ず「判」と「旨」と「行」と「益」との四つを備へて居る、「判」とはその教法を開宣する時に、『是でなくてはならぬ』といふ理由を決するに付て、他の所立と較べて、自らの所立が勝れて居る次第、隨てその所立を主張するの已を得ざる趣を判ずる、『建宗の理由』ともいふべき教義の論究に屬したもので、これを備へない宗旨は、佛教では禪宗ばかりである、次に「旨」とは其教判より詮し出した一定の教理を宗要と定めて、それにて依經立行の

【宗教的成立】宗教として形造られたる仕組。

【依經立行】佛教とは佛の教なれば、どの宗門でもその宗を成立するには佛の教なる、佛の經典に依りて、修行得道の方法を立つるそれを「經に依りて行を立つ」といふなり。

主義を建立する、即ちその宗門の旨歸とする所ろ所謂『宗旨』である、「行」とは其宗旨の命ずる所に於て定めた修行法、「益」とは其主義立行が、恁麼利益を、その信ずる人なり社會なりに與へるかといふこと、此四條件が他の宗教に勝りて、且つ何人にも能く解し能く持ち得る教法が、最後の勝利を占めて、人類の究竟指導者となるのである。

乃て「本化妙宗」に於ける此四條件いかんといふに、釋尊の自ら『法界は唯一佛乘の法華經のみ』と判ぜられた所に據りて、法華經を第一とし、釋尊の自ら『我が宗旨は法華經なり』と撰ばれた所に據りて、法華經を宗旨と爲し、釋尊の『自ら法華經を行ぜし先蹤』に據りて、法華經を修行とし、釋尊の自ら『法華三昧自受法樂に住せられ、一切衆生にも我れと同じ樂を得せしめたいと誓はれた

## 釋尊の宗旨

【自受法樂】他から受くる樂は他が何か問遂がてくれば、眞理は樂なくば名も利益なくば果報も位もみなくなる時どんなに起きて無くなるやうなる樂は永遠なれば、凡そ自己の存在する限り、自己の精神の中に、自己の心に、眞理を受け、其の眞理を受くる樂、自己の眞理を受け持つて、自己の眞理を受け持つて、自己の樂を根本的に得給へり。

【法界一體】この宇宙の相は、千差萬別なれども、眞理は一つなり、一體の眞理の上に種々の差別が因果によりて現はるゝも、いづれも眞理妙法の體にはづれたるものなしとなり。

【人師見】人師の私見。

【佛立宗】佛の自ら立て給ひし宗といふことにて、法華經は佛法の師品に於て、已に說かれ、當に說き今に說き、此經に立て勝れて法華經最第一と、樂王品に喩へ、此經は日月、諸經は星宿、此經は江河、此經は川流、此經は海、諸經は小王、此經は大王等と說き、自ら王中の大王等と說き、故に法華の宗を佛立宗といふ。

【佛智宗】衆生の機に依らず、唯の智慧を說き、經が法華經なれば、法華宗を佛智宗ともいふ。



妙益』に潤ひて、法界一體の大涅槃樂地に住するを以て、本宗の成立とするので、大に他の宗門の「人師見」や、機類を追ッて開いたのと趣を異にして居る、故にこの宗を古來「佛立宗」とも稱し來ッた、即ち衆生の機類を票準として立てたのでない、佛智を票準として立てたのであるから、「佛智宗」ともいふのである。

さてこの四條件の中、先づ教法としての組立は、「判」と「旨」即ち「教判」と「宗旨」の二つである、所謂「教判」には『五綱』、「宗旨」には『三大祕法』である、正しい「教判」から、正しい「宗旨」が生れるのであるから、「教判」と「宗旨」との相持は、宗法成立の大要素にして、研究の圖星も全く此に在る、先づ「五綱の教判」を前きに述べ、次に「宗旨の三祕」を說く事とし、本化佛教の學問的基礎から宣明して、教義組織の概要を示さう。

【五知判】五綱は神力品の「於如來滅後知佛所說經、因緣及次第隨宜說」の知は此經文の「知」なり「教」を知り「機」を知り「時」を知り「國」を知り「序」を知り「教」を知り「判」を定むゆゑに「五知判」といふ。

【五義】前に擧げし經の隨宜如實說とある、「宜」の字なり、教機時國序とも之を判釋するには語によらず義に依りて明むべきことゆふ、五義といふ。

【大綱】大づななり、この大綱を擧れば一切の網目は之に隨ひ來るなり。

【聖人】聖人とは佛、下とは凡夫衆生をいふ。

# 第六章　五綱ノ名義

古くは「宗教の五箇」とも曰ふた、或は「五知判」といひ、「五義」ともいふ、この五つの判釋が、一代佛教の淺深勝劣を判じ、又それを『人間の上に宗教として持ち傳へる事』の進退得失を決するに就て、开が檢覈糾明の大綱であるから、五綱といふので、即ち「教」「機」「時」「國」「序」の五つを知ることである。

〔教〕……教とは『聖人下に被るの辭』と言ッて、佛が衆生を導く爲めに說き置かれた一代五十年の經教といふことで、その數多くの經教には、いろ〳〵の異りがあるから（無ければ何も文句はないのだが）それを一々知り分けて、どれが佛の本懷正道かといふことを究めるのを「教を知る」といふ





【化儀】化導の儀式といふことにて、佛が衆生を教へ導くについての手加減懸引なり、譬へば藥方のごとし。

【化法】化導の法理といふことにて、佛が衆生に教へたる法の道理なり、いはゆる藥味。

【性の惇漓】性は品性といふが如し、善惡奸魔などに就き、性情として厚薄惇漓などに分ち得る。

【根の利鈍】根とは六根なり、即ち五官及び意識の感受性、比較總合の識力の銳利なるを利根といひ、それ等の遲鈍なるを鈍根といふ。

【調育】佛の本意を明き得るよう、衆生の心を調へ育てゝ行くこと。

【鑑機】機根を鑑みて授くべき法を錯ちぬこと。

ので、これに「化儀」と「化法」の二つある

(1) 化儀（教へかた譬へば藥の調合法の如し）

(2) 化法（教へた法譬へば藥そのもの〻如し）

即ちいかなる『教へ方』が佛の本懷である、いかなる『教法』が佛の正意であるといふことを審にする、これが「知教判」

〔機〕……機とは『可發に名く』と言ッて、教を受けべき衆生の情向の態、たとへば治療を受ける病人の疾病の症候といふようなことで、性の惇漓、根の利鈍、調育の熟不熟などをいふ、即ち教へられる方の衆生の機根といふこと、その機の本末輕重を攷へて、現在の機の何たることを知り、その鑑機を錯らざるようにするのが「知機判」といふことで、これにも亦二つある

【機縁】　縁は、教法に對する縁なり、順縁、逆縁などいふ。

(1)　機根（生れついた性根の機類）
(2)　機縁（教法に對しての機類）

〔時〕……時とは『變遷に名く』と言ッて、世の移り變ッて行く經過、即ち「時代」といふことである、むかしの時と今の時と違う、その違う時に際して、舊時代の舊套を逐うことは出來ぬ、又その變遷によりて當然發生すべきものをも「時」といふ、たとへば春夏秋冬の運行の如き、春去り夏來るのは變遷であるが、春の次に必ず夏、夏の次に必ず秋といふような必然の發生を有して居るのは、所謂時の要求であッて、之を「時節」といふ、即ち時代の變移を知り、時節の適中を知ッて、時代及びその要求を審にし、これに應じて誤らざる所の「知時判」といふこと、即ち亦左の二つがある





【序】　正しくは『教法流布の前後』と稱すべし「序」の名稱は近來の呼び做しなれど、簡にして要を得たれば今これを用ゆ。

(1)　時代（移り變るその時〳〵）
(2)　時節（變遷によッて顯はれる節度）

〔國〕……國とは『教化所縁の土地』といふことで、國の性質から、文野の區別、歴史、習慣、風俗、それ〴〵の差異によりて、一々教法の適否が分れる、それを審かにするのが「知國判」で、これにも亦二つの別がある

(1)　化境（教法を受くべき縁）
(2)　依地（教法の立つべき縁）

〔序〕……序とは『教法流布の前後』といふことで、前に弘ッた教法の影響で、後の教法の取捨がある、例へば食物でも、前に喰べたものゝ性質で、後の食物の進退をするようなもので、前の教法より受けた善惡の影響は、後の弘教に對し

【前現】前は前代教法の誤謬、現は現代思想の誤謬、これを破するに就て、それ〴〵次第あるなり。即ち四箇格言の、先づ「禅」と「念佛」とを破し、後に「真言」に及びたるが如し。

で必然の要求を發生するものである、その次第順序を攷へて教を垂れるのが「知序判」で、これにも亦二つある。

(1) 破序（前現の誤謬を破るに就ての次第）

(2) 立序（正意を顯すに就ての次第）

已上の五綱は、『教法を判明して正意を決定する』に就ての骨とすべき目安なるゆゑ、「五綱」といふので、五つともに日蓮聖人の創めて言ひ出されたので、古來何人も未だこの五大綱領の教判の必要なることを認めたものさへ無い、況してその一つ〳〵に、正しい見解を下したものは、猶さら無いのである。

尤もこの中「教」の一判は、華嚴宗、天台宗、其他の諸宗でも盛に判教を明かしたことであるが「機」といふことに就ては「淨土宗」が大に力を入れた、「時」の判は日本の傳教大師が論明せられたが、





【戒壇建立】戒壇とは戒を受ける壇場なり、戒に大小權實本迹あれば、戒壇にもその通りの差別あるなり。國立戒壇は必らず國主が立つるものとなり居れり、これ國民に對して、政治的に戒壇を履み、受戒信敬すべきことを命令するを要するゆゑなり。

【立宗の綱格】宗門の大切なる骨組の事。

教綱とするほどの決斷は下さない、「國判」も傳教大師は大に着眼されたのであるが、それは戒壇建立に就てゞあッて、猶立宗の綱格とまで行なかッたのは、畢竟未だ時の來ないのである、「序判」（教法流布の前後）に到ッては、曾て以て何人も言はない所である、要するに五綱を具備した所が、用意周到だといふばかりでない、たとひ各宗で、教なり機なりを判じたからとて、それが自己の臆斷が土臺となッて、佛說を強てこれに結びつけたとか、言ッても節に中らないとか、言ッて而かも明かでないとかいふのでは、何にもならぬ、この五つの綱判を備へた上に、それが一々佛の金言に適中して、遺憾なく佛の本意が發揮されて居らねばならぬ、即ち日蓮聖人の五綱判は、左の三條件を完備して居る、

(一) 五綱教判は、古來のあらゆる教判に比して用意の周到精密

【佛の正判】神力品の佛語なり。

【應時利生】時に相應して教を布き、衆生を利益すること。

【神力】神力は神通力のことなり、此品に、法華經弘通の上行菩薩に付囑して十種の神通力をあらはす。

【囑累】末代に法華經を弘めることを囑托し累はすといふこと。

【劫】梵語の「劫波」を略して劫といふ、非常なる長時なり、小劫、中劫、大劫の差あり。

なる事（卓絶せる哲學論證の基礎に立つ）

〔二〕五綱教判は、すべて佛の正判に根據して一點の私意なき明判なる事（一々に經文に證を取りて公明正大なり）

〔三〕五綱教判は、應時利生の進退を決するに就て遺憾なき教判なる事（實際に應用する上に於て尤も巧妙を極む）

「五綱判」の一々が、すべて佛の自判に根據して居るのみならず、五綱を建立して末代弘教の大謨を奠むべしといふことも、亦釋尊の金言高囑に出たものである、今本論の總提として、左にその經文を示さう。

能ク是經ヲ持タンヲ以テノ故ニ、諸佛皆歡喜シテ、無量ノ神力ヲ現ジタマフ、是經ヲ囑累センガ故ニ、受持ノ者ヲ讃美スルコト、無量劫ノ中ニ於テストモ、猶ホ盡スコト能ハジ、是人ノ功





【多寶佛】「法華經寶塔品」に、多寶塔を涌出して其中より、法華經の眞實說なることを證明せる佛。

【分身者】釋迦佛が神通力によりて、自己の身を、十方種々の國に分けて法を說きたまふ彌陀も藥師も、法華經の「壽量品」よりいへばみな久遠本佛の分身也。

【十方現在ノ佛】十方世界に現在說法せる佛。

【道場】道を修行する場處即ち寂滅道場。

【秘要ノ法】秘密主要の法。

【樂說】人をして明くことを樂はしむること義無礙、名字無礙、言辭無礙と共に四無礙辯の一なり。

【經ノ因緣及次第】その經の經致の說かるゝ因緣とその經が說かるゝに至りし次第順序。

【實ノ如ク】實とは如來の實意の如くなり。

【斯人】法華經の行者のことにて、專ら上行菩薩を指す。

德ハ、無邊ニシテ窮リ有ルコト無ケン、十方ノ虛空ノ邊際ヲ得ベカラザルガ如シ、能ク是經ヲ持タン者ハ、則チ爲レ已ニ我レヲ見、亦多寶佛及ビ諸〳〵ノ分身者ヲ見、又我ガ今日教化セル諸〳〵ノ菩薩ヲ見ルナリ、能ク是經ヲ持タン者ハ、我レ及ビ分身滅度ノ多寶佛ヲシテ一切皆歡喜セシメン、十方現在ノ佛、並ニ過去未來、亦ハ見亦ハ供養シ、亦ハ歡喜スルコトヲ得セシメン、諸佛ノ道場ニ坐シテ得タマヘル所ノ秘要ノ法、能ク是經ヲ持タン者ハ、久シカラズシテ亦當ニ得ベシ、能ク是經ヲ持タン者ハ、諸法ノ義、名字及ビ言辭ニ於テ、樂說窮盡無キコト、風ノ空中ニ於テ一切障礙無キガ如クナラン、如來ノ滅後ニ於テ、佛ノ所說ノ經ノ因緣及ビ次第ヲ知テ、義ニ隨テ實ノ如ク說カン、日月ノ光明ノ能ク諸〳〵ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯人世間ニ行ジテ、能ク衆

【行】遊行現行などいふ、『あらはれ働く』こと。

【無礙】何等さはりなく自在なること。

生ノ闇ヲ滅シ、無量ノ菩薩ヲシテ畢竟シテ一乘ニ住セシメン（神力品）

この經文の中の『能ク是經ヲ持ツモノ』といふのは、末法唯一の救世主たる本化の大導師を指す、即ち日蓮聖人がそれに該るのである、『能く是經を持つ！』日蓮聖人ほど、能く是經を持ッた人は外にない、そこで此純法華經主義の行者は、『諸法ノ義名字及ビ言辭ニ於テ、樂說窮盡無キコト、風ノ空中ニ於テ、一切障礙無キガ如クナラン』とあッて、教判に就ての智能が絶倫であるといふことを示してある、無礙といふことに就て、「智」と「辯」との兩重があッて、それに各々四つの「無礙」がある、即ち佛法中何よりも大切なる法華經を弘めるに就ての重任ある菩薩なる故、その資格も隨ッて重いのである。



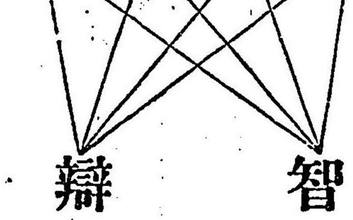


【法無礙】とは、森羅三千の諸法を知るに自在なること。

【義無礙】とは、諸法の中に含まれたる義を知ること。

【言辭無礙】とは、法を表し義を彰はす所の名目言語に就て、其意を得る事、又其意味を顯はすにも自在なること。

【樂說無礙】とは、意に得たることを他に對ッて言ひ顯はす場合に於て、些の過失なく義を損ぜず情を失せざるよう、聽者の意を得て、何人にても喜び樂ッて、進んで聞きたがる樣に、義を說き情を盡すに自在なる事。

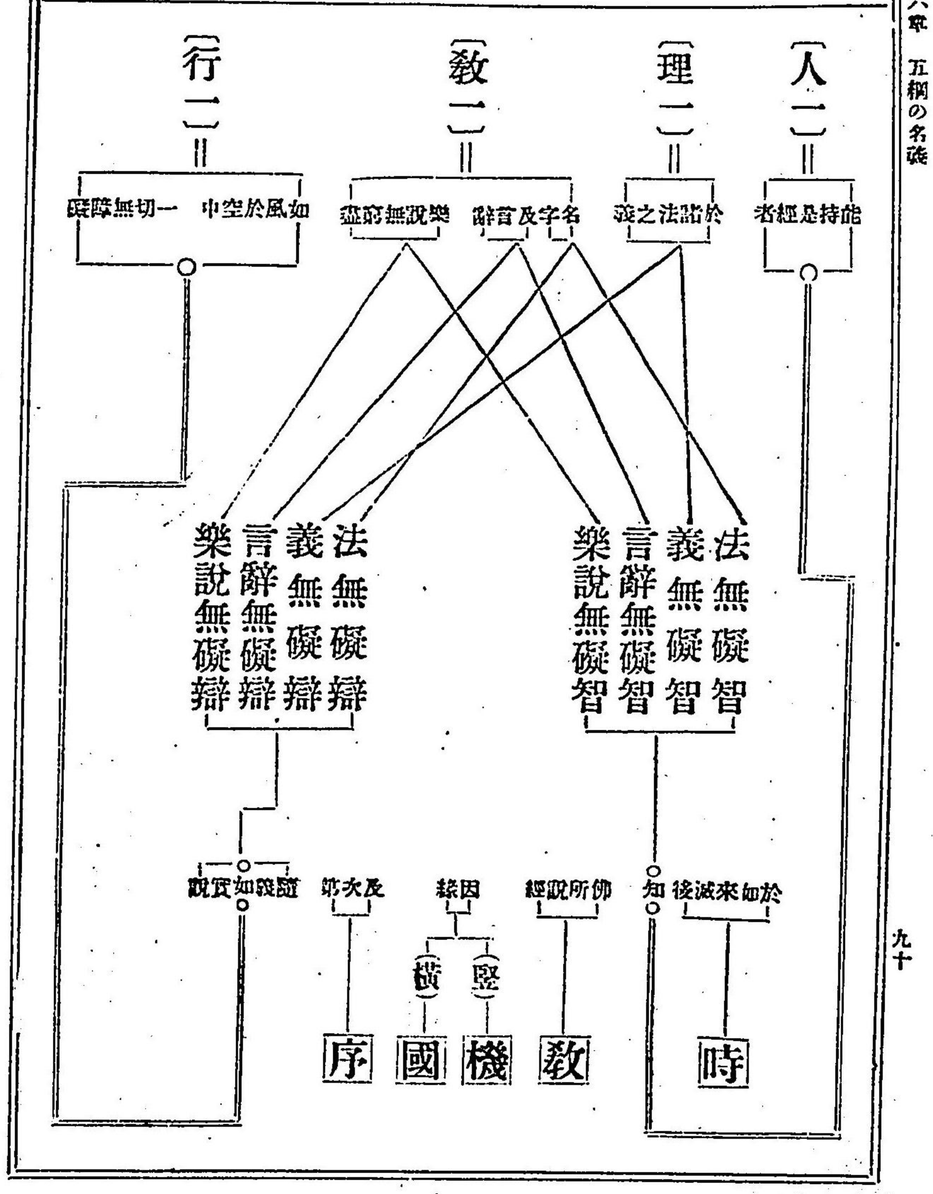



「法無礙智」で、諸法を觀察して有から、一切明瞭洞達して、これを人に說く時分に、その說話が、よく解る、他の三無礙も此例で知るべし。

この四無礙が、自己に在る場合を「四無礙智」といひ、他に對ッて說く場合を「四無礙辯」といふのである。

この周到にして缺點なき思慮辯才より出たる判決は『必ず五綱の判なるべきぞ』といふことを示して『於如來滅後知佛所說經因緣及次第隨義如實說』と說れたのである、この深き源より出でたる義の泉、是れが本化の五綱判である。

能持是經者
於諸法之義
名字及言辭
樂說無窮盡
如風於空中
一切無障礙
於如來滅後
知佛所說經
因緣及次第
隨義如實說
如日月光明
能除諸幽冥
斯人行世間
能滅衆生闇
（神力品の偈）








【綸言】天子の御言、如來は法に於ける天子、大王なるゆゑ、佛の語を綸言といふ、佛勅といふに同じ。

【涅槃經の明誡】「涅槃經」に「人の四依」、「法の四依」といふことあり、「法の四依」とは

○○○依法不依人
○○依義不依語
○依智不依識
○依了義經不依不了義經

なり、文に「了義經」とは純大乘別しては「法華經」なり。

即ち「五綱」を以て判ずべしとは、正しく佛の高囑より出た顯著なる綸言である、然らば恁麼「知る」かといふ「知りかた」は、こゝに細說しないでも、總じては『法華經』の深意、『涅槃經』の明誡等にも顯はれ、別しては本化の四無礙智に一任してあるのだから、その結果を示せば、それで事は足りて居る、乃ち『日月ノ光明ク能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯人世間ニ行ジテ、能ク衆生ノ闇ヲ滅ス』とある、闇を除くものは燈もある、けれども日月の光には及ばない、華嚴天台等の諸宗も、幾分の義理はあッて、世間の闇に對し多少の光りはあるが、要するに蠟燭かランプ、極上等で瓦斯電燈ぐらゐなもので、日月の光明とは謂はれないとある、誰れでもと謂へない「斯人」とある、『能く是經を持つ』所の「斯人」である、斯人世間に行じて能く衆生の闇を滅すとある上は、若し斯人

【三世益物】過去現在未來の三世に、常住にして衆生を利益すること、物とは衆生のことなり。

【五濁】劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁、とて、世末になれば、萬事濁化するとなり。

**佛教釋義上無比の大價値**

が世間に行はれなかッた時は、衆生の闇はいつまでも滅せられないのである、三世益物の佛の大慈として、爾底ことは出來ない、出來ないから、一番佛が心にかけられた末代五濁旺盛の時代に、この純法華經の流通弘傳を宣言せられて、懇ろにその人を指し、且つその判教立宗の大方針までをも指定なされた、即ち佛から末代の衆生に貽された「信任狀」である、かくも用意周到に準備された立教判釋が、いづれの時代、いづれの國、いづれの人にも無いのである、即ち「佛立宗」の佛立宗たる所以がこゝであッて、この五綱教判が佛教釋義上に無比の大價値を有して居るのも、これで判るのである。

## 第七章　教判ヲ要スル理由



【御夢想】時宗の祖一遍智眞が熊野權現の御夢想により、要偈を授かりたりとか、融通念佛宗の祖良忍が三昧中夢の如く阿彌陀佛より偈を授かりたりとして、建宗せるの類。

【手探り】善導は經藏に入りて我に有緣の經を授けられよと瞑目して手探りに取りて淨土の三部經を得これを以て宗を立つ。

都ての宗教に於て、「教判」が開教立宗に必要だといふことは、大要左の二つの趣意に由るのである

（一）自らの正意とすべき宗旨を定めるに就て……

（二）他の立宗との異同勝劣を對判するに就て……

宗旨を定めるのに、確乎たる據り處のないようでは、その立てた宗意が獨斷に歸して了ッて、人が信じない、たとへば何々神佛の『お告げ』とか『御夢想』とかいふのがある、是非得失の思慮のない迷信者流は、それでも信ずるかは知らないが、少しく智識あるものは、そんな事では滿足しない、或は『お神籤』で決めたとか、目を塞いでお經を手探りにしたら、このお經が手に觸れたから、是が『佛の本意だらう』とか、『衆生に緣のあるお經だらう』とかいふ行方では、手もなく『小兒誑し』のようなもので、堂々たる立教とい

正しき義より正しき旨は立てらるべし斯くて正しき信によりて吾人はこの正法に入て住する事を得ん

ふことは出來ない、爾いふ行り方で宗旨を究めた人も、古來の佛教家中には往々有る、あまり天理教や蓮門教を笑へない、宗旨と定めた法門には、人間の口嘴を容れさせないのだが、『其のこれを定めた所以の次第からは、斯々爾々である』と、立派に根據がなくてはならぬ。

それから又古來いろ〳〵の宗旨があッて、おの〳〵佛の本意がこゝに在ると稱して居る、誰れか烏の雌雄を知らんといふ光景である、そのところへ、『是非これでなければならぬ』といふ宗旨を推立てるには、イヤトモ前々から在る總ての宗旨と較べて『これで無くてはなるまいがな』といふことを明がにせねばならぬ、そこで苟くも宗旨を開創するに就ては、是非に「教判」の必要があるのである。（例の御夢想主義で濟まして置く一類は別として）

【傍難】或る論難を進めその主張を立んとする場合に、傍よりさまゝ〳〵と論難するをいふ。

【入實修行】法華經に入りて修行すること。

【左券】證據の手形。

佛教が廣大で、典帙が多くて、義理が深いところへ、古來から種々の解釋が入りみだれて、議論が多く、惑ひが多かるべくなッて居るから、後になるほど明了に精密に判釋をしてかゝらねばならぬ、そうして多くの疑ひや傍難を排ひ除けて、一言も異議の挾めないようにして置いて、「なるほど」と曰はせねばならぬ、當今のように學問の精密になッた時代には、猶さら是れが必要である尤も教判の檢覈を經ずして、絶待的に祖訓に服從して、直ちに入實修行するものには、教判も理窟も要はないようなものだが、それでも教法の眞價値を證明すべく、その確實の擔保として、人のこれを要すると否とに拘らず『明確なる教判』は、『深遠なる宗旨』の左券として、存して居らねばならぬ、されば日蓮聖人も、教判の公明を意味して『智者ニ我義ヤブラレズバ用井ジトナリ』と明

【最勝義】どこからも非難の入れられぬ最も勝れたる確理。

言なされて、その最勝義なることを示されてある、畢竟用意周到にして理義究竟した、嚴密明確なる教判よりして、至大至妙なる三大祕法の宗旨は詮し出されたのである。

教を知る事

【久遠實成】久遠五百塵點劫の背に實際に三身如來の成道を遂げ三世に身を現じ衆生を利益しつゝある本佛。

【無始無終法界同體本有三身無作本佛】始も終もなき法界と同じ大きさ同じ壽命の本佛にて、出來た始なき故本有の三身なり造作を假らぬ故無作の本佛也。

## 第八章　五綱各論ノ一「教」（教ヲ知ル事）

### 一　教義ト宗旨

「教義」とは、佛が衆生を教ふる言説の中に含まれたる義理にして、その義理の中心たる主點が『宗旨』といふのである、「教義」は教法組立の筋道にして、「宗旨」はその歸着の主意である、法華經本門の久遠實成は、三身常住三世益物を「教義」とする、その教義によッて、無始無終法界同體本有三身無作本佛といふ「宗旨」を了知するといふ趣向であッて、身體で譬へると、「教義」は臓腑肢體の脉胳貫通した『組織』で「宗旨」はその完全なる組織によりて持たれて居る『神經』と言ッた樣なものである。

### 二　教ノ種類

（其一）……教法ト施設

「教」には、その「教へた法」そのものと、その「教へかた」との二つがある、「教法」とその「施設」である、之を教語で「化法」「化儀」といふ、「化法」は藥味の如く、「化儀」はその藥味を調合投劑する方法のようなものである、即ち佛教の法理に深いと淺いとがあッて、それを「化法の四教」（藏、通、別、圓、の四教）と言ッて、凡そ四通りの段階を爲して居るものとしてある、その四段階の法理を、或はその内の一つ丈で教へ、或は二つ竝べ用ゐ、或は三つを帶び、

教の種類を知らざるは藥の能毒を辨へずして之を服せんとするものなり危いかな

【攝化】　攝護化導なりひきよせて導くこと。

【四の原料】　化法の四教。

【頓】　いきなりすぐに大乘を説くこと。

【漸】　小乘より漸々に大乘に、權教より漸々實教へと引入れる樣に説くこと。

【秘密】　如來が神力もて同一座席で彼れには小を説き此には大を説くに聞く者互に相知らず。

【不定】　同一會座で同じく法を聞き、その領解の不同なること。

又は四つを並べ用ふるとか、教導攝化の順序によッて、增したり、減らしたりして、衆生を調熟したのが、釋尊一代五十年の説法で、どの經典でも、この『四つの原料』の内でないものはない、それが深い部分の原料が多いか、淺い部分が多いか、それを分拆調査すれば、その經典の勝劣が分明に判るのである、それから又その四段階の法門をば、その幾つかを並べて説いたり、その内のどれか一つで立切ッたりする方式にも、端的に説くのと、加減して説くのと、顯露にしたり、秘密にしたりする場合が、やはり四通りある、それを「化儀の四教」(頓、漸、秘密、不定の四教)といふのである、前の「化法判」で經の淺深を拆ち、この「化儀判」でその施設を考へて、その經典がいかんの階級のお經で、且つどういふ爲めに説いた經で、眞實を顯はした經で有るか無いかの區別を定める



【因緣生滅の理】　一切の諸法は、因緣によりて生じまた滅す、みな實體あることなし、仔を破して空に入ると立つ。

【聲聞】　佛の四諦の聲教によりて、之を聞いて小乘の空理を覺る機類。

【緣覺】　十二因緣といふ法門にて小乘の空理を覺る、又此根性の機は、無佛の時にも、飛花落葉を見て空理を覺る、それを「獨覺」といふ。

【體空無生】　諸法はすべて緣による、生ずるも滅するもなし、その法體そのまゝ空也無生なりとの理。

のが、「約教判」といふのである、これは天台大師の發明で、深く佛意を得られた千古の良斷で、日蓮聖人によッて、眞の應用實行を全うせられたのである、扨てその「化法の四教」「化儀の四教」といふことを述べよう。

## ▲化法ノ四教

〔藏〕……「藏教」具さには三藏教といふ、これは小乘の法にして、因緣生滅の理を談じ、聲聞緣覺の二乘を主と教へる(傍ら菩薩も教へる)佛教中最下劣の教理。(それでも一切の外道よりは遙かに勝れた正法)

〔通〕……「通教」は大乘の初門にして、前の藏教にも通じ、後の「別」「圓」にも通ずる、謂はゞ間生兒のような教法で、體空無生の理といふて、前の小乘よりは進歩した教理。

〔別〕……「別教」は大乘の教理にして、菩薩專門の法であるから、前の二教(藏通)と異り、後の圓教とも別で)(圓教は二乘法でも菩薩法でもない、唯一佛乘である)諦理の無量廣大なることを說き、次第隔歷して融即しない、謂はゞ量の大きくて滋味のないといふような教理。

〔圓〕……「圓教」は一乘(大乘の至極したる教理)にして專ら無作の妙諦を說き、諸法圓融して事理圓妙なる佛境界を明す所の無上佛教である、而かも前の三教に對しては、與奪生殺の權能を有して、捨つる時は一毫をも留めず、用ゐる時はすべて開會點睛して、諸法を圓活する所の最高教理、即ち佛の證悟の內容たる法華經、一切衆生の成佛はこの教理に依る、佛の本領とする所の無上乘。

【諦理】諦は審實不虛として佛の說は少もまちがひなき法理なり、今は四諦の理のこと。

【次第隔歷】次第とは佛で例へば先に法身あり、次に報身を得、それより應身を得たりと、時間的又は空間的に、すべて理とも隔てゝ說くこと。

【融即】事實と道理と事實と事實と、みな互に融會相即すること。

【無作の妙諦】四諦の法も、法爾に圓融相即し居る道理。

【事理圓妙】事實は道理に融し道理は事實に融し互に圓融なる事。

【開會點睛】事物の奧底に潛める眞理妙用を開發活用する教能。

【圓活】一切諸法をすべて四諦に活かすこと。





已上の四教が原料となッて、自在の應用に巧みの限りを盡し、一代五時の化導を經緯せられたのが、釋尊五十年の說法、即ち一代佛教である。

- 四教
  - 藏
    - 生滅の四諦
      - (二乘八正)
      - (菩薩八傍)
  - 通
    - 無生の四諦
      - (三乘)
  - 別
    - 無量の四諦
      - (獨菩薩)
  - 圓
    - 無作の四諦
      - (一佛乘)

界內

界內とは欲界、色界、無色界の三界の內也此二教は界內だけの事所謂現實界の部分を說く教

界外

界外とは、三界の外也この二教は廣博なる菩薩の境界及び高遠なる佛の境界までをも說く

「四諦」とは「苦」「集」「滅」「道」の四諦、諦とは『審實不虛』といふて、

【欲界】男女の欲や睡眠の欲ある故に名く六道と二十八天の內、下より第六天まで。

【色界】欲なく色體あること第七の天より廿四天迄。

【無色界】色體もなく心のみの存在。

【三界の外】前の三界は見思の煩惱によりて生るこの煩惱なき時は三界に生れずして「方便」「實報」等の土に生るといふ、これ三界の外也

佛教は三根に通ずと雖多分は下根を正意とする故に下劣の機を對象とする形式を停めたり教いよいよ勝れば機根いよいよ劣る是れ佛教の殊勝卓絶なる所以なり

『これは苦、これは樂』と佛の說いたことは、決して缺陷もなければ錯誤もないといふこと。

四諦
- 苦諦……苦とは煩惱によりて受けたる苦の果報
- 集諦……集とは煩惱、諸の苦を集め造る故に集といふ
- 滅諦……滅とは前の煩惱の滅した大涅槃の安樂地
- 道諦……道とは前の滅に到達すべき修行道法

この四諦は、實は集、苦、道、滅、と次第すべきであるが、下根のものは「苦」の恐るべきことを聞かぬ間は、煩惱の斷ずべきを思はず、「滅」の安樂を示さない間は、修行する氣にならぬ故、斯いふ順序にして教へたので、譬へば下劣のものは刑罰に恐れて始めて愼み、賃銀や賞與の事を聞いて、始めて働く氣になるといふようなわけである。



【三智】一切智は空諦を覺る、道種智は假諦を覺る、一切種智は中諦を覺る。
【三觀】空觀、假觀、中觀。
【三諦】空諦とは一切法はみな差別なくして空なりとの理、假諦とは各相性差別宛然なりとの理、中諦は空に非ず假に非ず、亦空なり亦假なりと空假を統一する理。

右の四諦に、「生滅」、「無生」、「無量」、「無作」の四種の意味の異があッて、それで四教の區別が立つ、これは四教おの〳〵の形式であッて、この四種の四諦で、教理の深淺權實がわかれる、その所詮に到ると、「三智」を用ゐ、「三觀」を修して、「三諦」の理を證るのである、而してその證悟にも『欽けた』のやら、又は『具ッても廣いばかりで融即しない』のやら、『能く具はり能く融して圓滿自在』なのやらの差異が出來て、證悟にも淺いのと深いのとがある。

凡そ物の理を觀察することは、先づその極端と極端とを比べておの〳〵其異れる特色を發揮して、而も後に復それを整理て見なければならぬ、こゝに於てか、一方は物の立場を蕩空し、一方は事物の立場を認定して、兩面觀察を爲し、やがて其れが調和を目的として、中和觀を爲す、それが三智三觀三諦の究竟觀察の起る

兩面觀あり
中和觀あり

三智三觀三諦の教義は天台大師の所立にして法華の圓理これにて證すべしと雖も「本化妙宗」に在ては唯其義を存して必ずしもこれを用ひず然れども諦觀の妙理宛然として備足するは三秘一如の妙法なり

理由である。

●三智
- 一切智
- 道種智
- 一切種智

- 空觀
- 假觀
- 中觀

三觀

●三諦
- 空諦
- 假諦
- 中諦

又は眞諦ともいふ(空諦は一切の法を泯す)
又は俗諦ともいふ(假諦は一切の法を立す)
又は中道ともいふ(中諦は一切の法を統す)

即ち「三智」を開て「三觀」を修し、「三觀」を以て「三諦」の理を照らして、眞理の中正本體を見る、その積極的方面を「證理」(理を悟ること)といひ、その消極的方面を「斷惑」(煩惱を斷ずること)といふ、



【八万四千の煩惱】五利使五鈍使の十使の煩惱が、各十使を具して百使、過去、現在、未來に存して二百使、過去と未來の各一百使には、また各一使を具して二千使、現在を合して二千百使、それ〴〵貪、瞋、癡、慢の四種の衆生に約して八千四百使、それを四大六義に約して八萬四千の煩惱といふ、要するに、衆生の煩惱はそれからそれと限りなきをいふ。

【塵沙】事實の進退に迷ふ惑、化導障の惑といふ、即ち菩薩が、空理に入りて更に衆生を化するに、假諦の理により、差別の方面に出で化導するそれの惑障なり。

【惑】煩惱の事

無學病以外に學問病ありて由來人を惱す

即ち煩惱が一つ除れる度に、理が一段づゝ明かに成て行く、煩惱に種々の種類があるから、理の顯はれるにも(理は一つであるが)種々の段階があって、智慧も法門も層々重々して眞理の大觀を極めたのが佛教である、今煩惱のことを搔い摘んで述べて見ると、八萬四千の煩惱も、性質から類別して、左の「三惑」となる。

三惑
- 見思
  - 見惑(八十八あり)
  - 思惑(八十一あり)
- 塵沙(三品三根實數無量)
- 無明(四十二品)

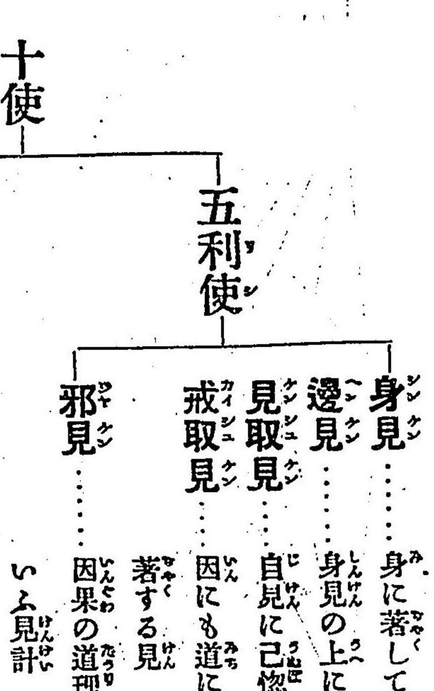
界內の惑
界外の惑

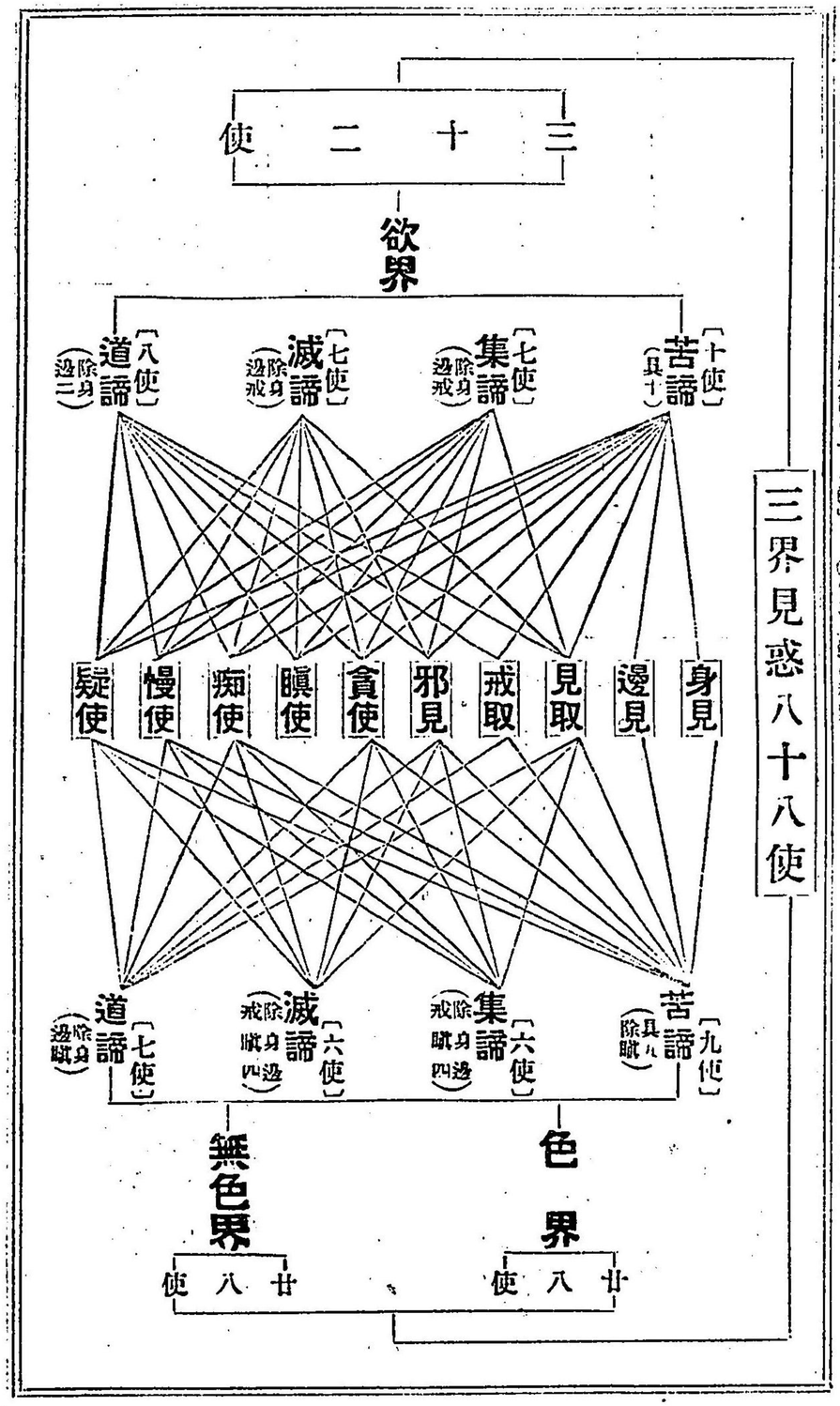
「見思」は三界有漏の惑と言ッて、六道生死の基本たるべく、吾々凡夫の日夜に常に發生相續しつゝある所の煩惱である、「塵沙」も「無明」も吾等凡夫には皆悉く備ッて居るのだが、凡夫はこれを起すほどの地位に進んで居ないのである、先づ一番手近で粗い煩惱

【宇宙觀】宇宙に對する觀念。
【人生觀】人生に對する觀念。

が「見惑」と「思惑」の二つであるから、これを少し話して、『佛智を假らざる凡夫の智慧』の恃むべからざることを知らしめて置かう、先づ「見惑」といふのは、『諸見の惑ひ』で、「見」とは事物に對する心の觀察のことで、世界の始めが云何したとか、心が云何したとか、宇宙觀だの、人生觀だのと、凡夫仲間の盲推量、ドングリの背競べで得々として居る學者の見識から、一文不通の愚夫愚婦が朧氣に有して居る人生觀に至るまで、すべて『中正の眞を得ざる思慮』は、皆この「見惑」の部類で、これは「五利使」「五鈍使」合して十使の見が本となって、三界の四諦の一々に或は增し或は減りして、總じて「八十八使」となるので、「使」とは使役といふことで、この諸見が心を驅り立てゝ、迷ひの中に彷徨はせるといふこと、さて其の十使といふのは、

【我見】我ありとの見、此我は、因緣和合して假にありと知らず。
【斷無の見】我といふものは死れば全く無くなると觀ず。
【常見】我は何時迄も常に在りと見る。
【冥初】數論外道の世五諦中の自性といふ一諦あり。これなば自然とも世性とも冥初ともいふて、世界の初の何とも知れぬ處をいふ。
【法】とは意の對象










## 心の垢

【正思惟正憶念】眞理に如し正道に合すべき思考力とその逆念力。

前の「十使」が凡夫の心の發動となッて、初めは立派な心掛から生じたのでも、それが本となッて妄見邪想の力を生じ、果ては十惡五逆のような非道をも釀し出すに至る、『一切の迷ひ苦みの原動力となる心の垢』をいふので、之を煩惱といふ、「煩」は煩はす「惱」は惱ますであるから、この迷ひが心の煩ひとなるといふことである、即ち「昏煩惱亂」といふことで、一たび此煩惱心の發生續起するや、眞性忽ちに昏昧惑亂せられて、あられもなき邪徑に趨り行て、「正思惟正憶念に遠ざかる、いくら考へても、見當が狂ッて居るからダメだ、而もこれが習慣性となるに及んでは、この間違ッた心を却て眞の心として、我を立てるに至るのである。

次に「思惑」といふのは、貪、瞋、癡、慢の煩惱の情慾的に發生したものをいふので、これに「八十一品」ある

【六欲天】四王天、切利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天。

【界繫思】三界九地各この思惑によりて繫がれて自在か得ざるゆゑにいふ。

【色心】眞と心。

**思惑八十一品**

- **欲界**……六欲天より下は地獄界迄
- **初禪**……梵衆天、梵輔天、大梵天、
- **二禪**……少光天、無量光天、光音天、
- **三禪**……少淨天、無量淨天、遍淨天、
- **四禪**……（無雲天、福生天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天）
- **初定**……空處天、
- **二定**……識處天、
- **三定**……無所有處天、
- **四定**……非非想天、

**正三毒**　貪瞋癡慢

- 上の上
- 上の中
- 上の下
- 中の上
- 中の中
- 中の下
- 下の上
- 下の中
- 下の下

此「思惑」といふ煩惱は、同じ貪、瞋、癡でも、前の「見惑」のは『迷理の惑』といふて、理を見るに就ての考へ違ひから起るのであるが、これは『界繫思』と言ッて、三界の生を受くると共に、色心に

【迷事の惑】飲みたい食いたいの事に就いて迷ひ起す煩惱。事實に就いて迷ひ起す煩惱。

【法塵】意根の上に善惡の諸法を起す。

【六塵】五塵の外に法塵を加へたるもの、塵とは染汚をいふなり、この六のもの衆生の情識を汚染して、眞性を蔽はしむるゆゑに塵といふ。

【輪廻】生れては死し死しては生れてめぐり〳〵て世に迷ひ彷徨ふこと。

固有した「迷事の惑」であるから、又は「俱生の惑」とも言ッて、生れると共にくッ付いて來る所の煩惱としてある、小兒が乳を貪り愛するが如きは、即ち俱生の「貪慾」で、これを得ざる時はむづがり瞋るは、即ち俱生の「瞋恚」である如く、心理的にも生理的にも任運に發生存在して居る心の固癖であッて、それが五塵（色、聲、香、味、觸）を緣して、種々に心を昏昧にする、そこで前の「見惑」は法塵（六塵の中の）を緣して理を誤り、この「思惑」と相結んで人心を愚化し慢化し退化し掉化して、次第に正憶念を失ひ、生死界に輪廻するのである。

要するに煩惱の障へて居るだけづゝ、其方面は昏闇である、それが除れただけづゝ、其局部々々が闡明なる、その明るくなッただけづゝ、眞理を見る面積が大きくなる、一闇去りて一明來り、

◉煩惱に就て

此一節は本章叙述の際、來訪者に語り[illegible]なるも、故ありて此に載す

一　煩惱といふ蟲や腐れが付いて居る垢穢の心[illegible]

二　[illegible]

三　[illegible]

四　[illegible]





百明來て百闇去り、斯して法界の事理を究める、それを次第的に分解的に別說したのが、四種の四諦て、その一部づゝを分類した教理が、化法の四教といふのである、次のは化儀の四教。

▲化儀ノ四教

これは前の化法の四教を調合進退して、衆生の機根を調へるために『教へ導いて行く仕方』に四通りあることて、即ち

〔頓〕……誘引の手段をからず、短的に大乘を說く化導法

〔漸〕……小を引て大に入るゝに漸々に誘引する化導法

〔秘密〕……同じく聽て居るものゝ中に、互に相知らずして、各各に會得を與へる化導法

〔不定〕……小を聞て大を悟り、大を聞て小を悟る、互に相知り

【純大乘】華嚴は純ら菩薩の爲めに說ける教にして別教圓教の二教理を說きたり。

根本佛教

【昔圓】爾前經に說ける圓教の理。

ながら、得益の不同なる化導法

以上四つの「教へ方」で、前の四つの教理(化法の四教)を加減取捨して、一代の經教は成立たのである。

「華嚴」の如きは、いきなりに純大乘を說いたから、これは「頓」に屬し、それより「阿含」、「方等」、「般若」の四十二年の說は、時間的には「漸」の化導で、時ありては「秘密的」、「不定的」の儀式を用ゐられたのである。

以上化儀化法を合せて「八教」といふ、この八教に超絕した根本佛教が「法華經」で、即ち「法華」は非頓、非漸、非秘密、非不定、非藏、非通、非別、非圓、(昔圓を非す、猶法華經の中に來て更に迹圓を非して本圓をあらはす、故に「圓」には昔、迹、本の三があ る)である、要するに「法華經」は能判の地であッて、判ぜらるべき



【超八の醍醐】爾前經に藏通別圓、頓漸秘密不定の八教を說く、この爾前の八教に超過せる、純知一實の教が法華なれば、超八といふ、「超八」とは八教の上に拔出て居ること。

【結集】佛入滅の後に於て佛所說の經を集め編輯すること。

【不世出】希れに世に出るエラキ人。

(所判)地位でなく、能開の經にして開せらるべき(所開)の教でないから、法華經を「超八の醍醐」といふのである。

其二……施教ノ類別

釋尊一代五十年の間にお說きになッた說教は、今結集されて世に傳ッて居るだけでも、五千七千の廣博のものであるから、通常の眼識では、讀了するさへ容易でない、況して此經はどういふ種類の教理(化法の四教の中の何々)を含んで、いかなる場合にどういふ方法(化儀の四教の中の何々)でお說きになッたものといふ事を究めるのは、猶更容易のことではないから、古來不世出の偉人が、幾代もの間に、廣く究め深く攷へて、確乎不拔の判釋を下された、その勝義判に據るより外はないのである、所謂勝義判と目すべきもの、凡そ左の三條件を具へたものに限る。

【詮了】　あらはしだすこと。

【内鑑】　心の内によく鑑みて知り居ること。

【部】　一代經の部節、部類。

【時】　部別を五に分つ。說法の時節を五時に分つ。

【味】　法を受けて益を得る次第を乳等の五味に譬ふ。

【一切經】　如來一代の經及び諸菩薩の論等。

(一)　判釋の根據が經典の文義に確證あること。

(二)　その判教公正にして自他共に許す所なること（尤も一類邪僻のものが之を首肯せざるの類は取るに足らず）

(三)　その判教によりて甚深奥妙の宗義を詮了し得べきこと

右の要素を具備したものは、古往今來たゞ天台大師一人である、故に本化聖祖は、挺然として獨り天台大師を推して、判教の正統と爲し、且つこれに入眼して、更に甚深の内鑑を發揮したのである、天台大師は、諸家を批判折衝して、具にその得失を斷じ、正しく佛說に根據して、縱横の判を定めた、即ち前の八教を基礎として、更に「部」、「時」、「味」の三類別を立て、一代聖教を遺憾なく仕分けせられた（一切經を十五遍も精讀されて究めたのである）今その仕分けの仕方を話すと、『横に經の部類を聚めて同異を分け』





【兼】　圓が別を兼ねること。

【但】　但小乘三藏教のみ。

【對】　藏通別圓相對して大を以て小を打つ。

【帶】　通別を帶して圓を說く。

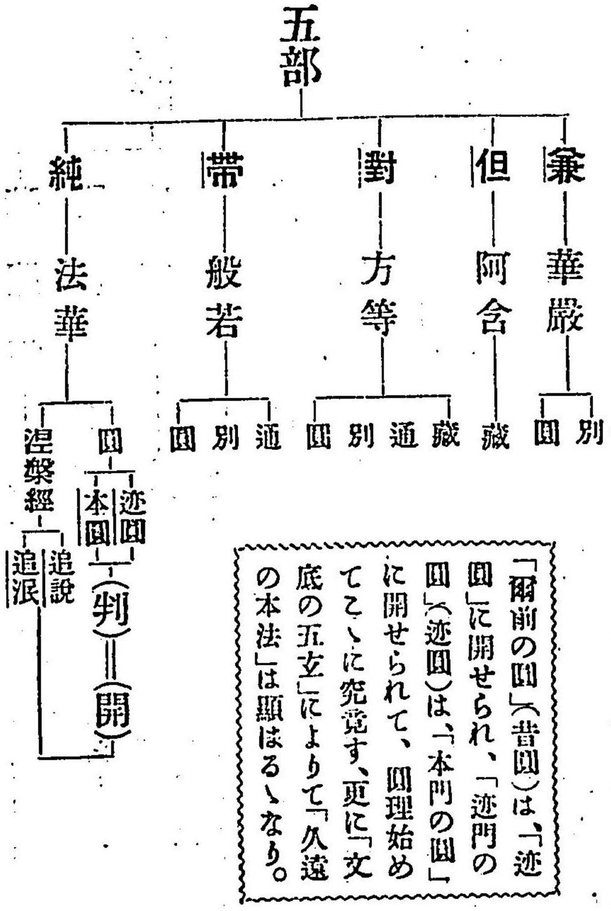
【迹圓】　迹門の理圓。

【本圓】　本門の事圓。

【追說】　捨拾の爲に重て藏通別圓の四を說く。

【追泯】　重て說きし藏通別をば追ひかけに泯亡して純圓と爲す。

たのが「五部」で、『縱に經過を判じ』たのが、「五時」で、『得益の順序で判じ』たのが「五味」である。




「爾前の圓」（昔圓）は、「迹圓」に開せられ、「迹門の圓」（迹圓）は、「本門の圓」に開せられて、圓理始めてこゝに究竟す、更に「久遠の本法」により「久遠の五玄」は顯はるゝなり。

【最初】　釋尊が成道ありしその當時。

【擬宜】　あてがひ見ること。

【誘引】　ひきよせること。

【彈呵】　しかりはじく。

【淘汰】　よなげること。

【付業】　佛の家督をつがせること。

この五つは、法華經信解品の說に基きたるもの也。

五時
- 華嚴時——(最初三七日)
- 阿含時——(十二年)
- 方等時——(八年)
- 般若時——(二十二年)
- 法華涅槃時——(八年)

古來五時の頌といふものあり
華嚴最初三七日。
阿含十二方等八。
二十二年般若談。
法華涅槃共八年。

五味
- 乳味——華嚴——(擬宜)
- 酪味——阿含——(誘引)
- 生蘇味——方等——(彈呵)
- 熟蘇味——般若——(淘汰)
- 醍醐味——法華涅槃——(付業)

「乳味」等の五味は『涅槃經』の說にして、「擬宜」等の五は『法華經信解品』の說なり、更に「華嚴經」の「三照」といふとあり、後に圖すべし。

「部」で分ける邊から言へば、いづれの時に在ッて說かれた經でも、圓理が欠けて全くなければ、それは小乘經で「阿含部」に屬すべきもの、又圓理の外に「別」の理を兼て說かれた經は、總じて「華嚴部」に屬すべきもの、「藏」「通」「別」「圓」四教並べ用ゐた說經は、どこに在ッても、都て「方等部」に屬し、「通」「別」「圓」の三教を含んで居るのは、即ち「般若部」に類屬するものとして、經教を性質から仕分けしてかゝる、要するに純圓獨一でなければ、すべて方便であると定める。

【純圓獨一】　純ら四教のみにて一つもまぜものなしに說ける經。

それから一代五十年の佛の化導の發展から觀察して、「五時」の判が出來る、これは歷史的教判ともいふべきもので、多少の異例は無論ある、結集といひ、翻譯といひ、素と統一ある編纂によらない佛典のことだから、何年何月から何經の始まり、何年に終りて、後が何經と、ソーは日記的に誌されてないのであるから、片卷零冊も悉くこの時間割に箝め込むといふわけには行かないが、

【歷史的教判】　釋尊一代の說教を、五時といふ、時別をして、史的意匠にて見る判釋。

【約】　約束といふて、つゞめ結び付けること、即ち何々の義なれば、何々の法に結び付けて言へば云々の義になるの意、佛教學上の常套語。

經教の發展と釋尊の歴史とを對照して、不思議にも、此「時判」は大體に於て彼の「部判」と一致して居るのである、隨て初めの華嚴時代に受けた化益が、淡き『生乳』のようであッたのが、次の「阿含」時代にやゝ濃い『酪味』となり、更らに「方等」で『生蘇味』と變じ、「般若」で『熟蘇味』と化し、終に「法華」に到ッて『醍醐味』といふ最上乘の醇味になッたと、教を受けた方から觀察して、佛の化導の發展經過をも判じたのは、涅槃經の明文が指導したとはいふものゝ、天台大師の烱眼、まことに敬服すべきの至りである。

「部」は經に約して判じ、「時」は佛に約して判じ、「味」は機に約して判じたのである。

以上五時、五味、五部、等を「判教」といひ、化儀化法の八教を「釋義」といひ、總稱して「判釋」といふのである、教判釋義ともに確



【觀】　觀心をいふ、教相に説く所を、吾人の心に觀察して、修行にうつすこと。

乎たる根據があッての創説で、殆ど空前絶後の大斷なることは、諸宗諸家の判教と比較して研究して見ると能く解るのであるが、此册子の頁數に限りがあるから、それは略する。

**其三……教ノ所詮**

「教」を能詮とすれば、その所詮は何であるといふ時、その所詮を單刀直入に把住するを「觀」といふ、「觀」はやがて實行の資料となるべき爲めであッて、即ち「宗旨」である、故に教法と宗旨との相對は、又「教」と「觀」との相對である、尚こゝに「教」といふことは、廣義にいふ「教」であッて、教理とも教法とも總てに亘る、乃ち思考分別の所對となるものをいふのである、さてその「教」としての内容はどういふ組立のものかといふと、左の『八法』によりて成立して居るのである。

【能詮】能く理をあらはす言詮文義。
【所詮】教にあらはされる理義。
【能觀】能く理を觀察する。
【破惑】煩惱を破る。
【結歸】かうと定めた。
【證理】眞理をさとッた
【絡行】道を修め行ふ。
【證得】さとり得たる。
【融不融】「融」は法華經「不融」は爾前經、機情が本法と隔離して眞か去るか不融といふ。爾前四十餘年は不融なり。
【始終不始終】化導に始と終りの因緣を明すか明さぬか。

教

- 教理
  - 能詮の教……それが權か實か
  - 所詮の理……それが偏か圓か
- 智
  - 能觀の智……それが淺か深か
  - 破惑の程度……それが高か低か
- 斷
  - 結歸の行……それが麤か妙か
- 行
  - 證理の程度……それが尊か卑か
- 位
  - 修行の因……それが純か雜か
- 因
  - 證得の果……それが分か滿か
- 果

―て―其教の勝劣は定まる

これを組織的に剖判して、「部判」「教釋」で、一代佛經の淺深勝劣を知るに就て、又三層の扱ひ方がある、即ち

(一)には　根性の融不融
(二)には　化導の始終不始終
(三)には　師弟の遠近不遠近

……(爾前四十餘年の經を『法華經』と相對して)……判ずる

## 初層判

【遠近不遠近】久遠と始近との異目を明すか明さぬか。
【溯源的】源泉に溯りて第一の原因をもとめると。

## 第二層判

【脈絡】佛が衆生を教化するに就ての筋立、その因緣次第の脈絡貫通あるべき事。

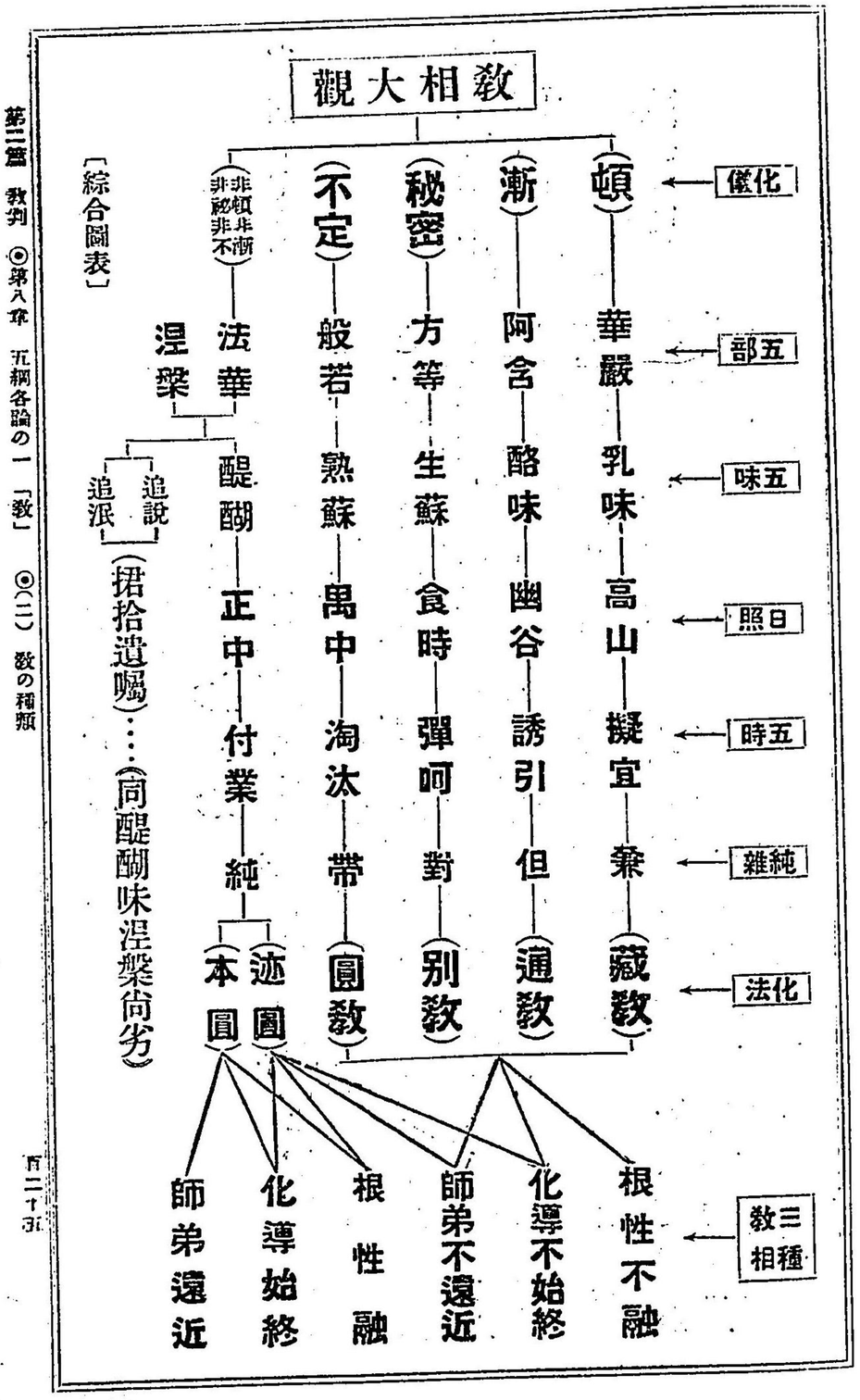
## 第三層判

上來の五時八教を用ゐて判釋したのは、初層の「根性の融不融」だけで判じたものである、そうして置いて、今一層深く溯源的に、一代五十年の範圍内ばかりでなく、佛のこの法華經に於ける因緣を追尋して、佛出世の本懷が獨り法華經に在ることを知るのが、第二層の「化導の始終不始終」といふ撿覈法である、是れは「法華經迹門」を原始的に見た「教判」で、乃ち『法華已前の經は、化導の始め終りが明かしてない』から「化導不始終教」で、佛化と脈絡を斷ッて居る權教なることを明す、更に今一層深く撿尋して、佛及び教法、乃至法界なり眞理なりの全面を赤裸々に顯はして、根こそげ佛化導の實地を明かした頂點に立ッて、一代佛教を判釋するのが、第三層の「師弟の遠近不遠近」といふ教判である、これは「法華經本門」の究竟開顯より見た「教判」で、佛教の廣さと深さと高

【究竟開顕】開顕の尤も究極せるもの。迹門の廣さへ、更らに本門の深さを加えて完備せる開顕。

請ふ深く『日蓮は第三の法門なり』の一言を味へ

さとが是で盡きたのである、この「三種教相」の中の「第三の教相」が、全く純法華經主義の「教判」で、本佛釋尊の『これこそ肝要』として、本化に付囑せられ、末法の正時節に中ッて、本化聖祖が命懸けで絶叫せられた所の「教相判」で、『日蓮は第三の法門なり』と宣べられたのは是れである、委細の事は次の『簡擇』の項で述べる、尚それを知るに付ての素地ともいふべきものが、一代「五時」「八教」の大判であるから、説明の略を補ふため、別に大觀に便なるよう、綜表の圖を添えて置くから、それで大體を知り、更に詳く調べたいと思ふ人は、此種の書籍(幾らもある)に就いて研究ありたいのである、要するに「教」を判別するのは、佛法の中心を把住するに就ての基礎準備である、あまり繁紛に流れ葛藤に失するのも良くないが、去とて閑却してはならぬ次第である。




〔綜合圖表〕

【權智】衆生の煩惱に應じてかげんして導く智慧。衆生界の法にゆきわたる智慧。

【實智】佛自身の內證の眞智。眞理を見る智慧。

【大悲方便】悲とは煩惱に同情するあはれみの心なれば衆生の迷に同情しての方便といふことなり。

【權謀】はかりごと。

## 三　教ノ簡擇

### 其一……權ト實

教法に「權」と「實」の二ある、その「權」とは『權謀』といふて、僞のこと、「實」とは『眞實』で僞らぬこと、なぜ佛が『僞』を說かれたかといふと、それは方便のために用ゐたので、その僞のために結構な功を奏して居る、その僞を用ゐる智慧を「權智」と言ッて、これは佛の眞理を見たまふ「實智」が究竟して居る處から發し來る智慧で、巧妙の限りを盡した佛の大悲方便の作用である、そこで其の『僞』の教は、一たび用を了へれば、モー入用のないものであるから、『眞實』が顯はれると共に廢して了う、故に「暫用還廢」（暫く用ゐて還て廢す）と釋して、佛が入用でお用ゐになるの外は、他の輩の用ふべきものでは無いのである、譬へば一概に藥と言ッても良藥もあれば毒藥もある、「モルヒネ」は人を殺す所の恐るべき毒藥であるが、治療の方法によッてはこれを用ゐて、或る特殊の功を奏することがあるから、醫師は之を用ゐる、果してみんごと功を奏した、功を奏したのは、藥そのものゝ性分已外に、醫師の智能手腕があッたからである、若し醫師を離れては、全く一の危險物である、『藥でさへあれば』と、素人が「モルヒネ」を濫用するのは治療といふ法則から言ッて、絕待に之を禁じなければならぬ、てうど其れと同じことで、權教方便の說は、本と正藥でないから、佛限りの使用に止ッたもので、一たび用を成し了ッたら、それぎりで後は用ゐない筈である、ところで其方便權教といふべきものは、『佛教中のどれ〳〵であるか』といふと、教では前三教（「藏」「通」

毒藥の用を爲すは醫師の力なり凡夫みづから揣らず權教を濫用すること危險なり

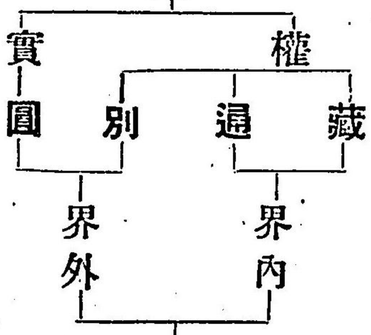
【正藥】偏淺を含まざる淵が配都しても和いて功能淵深なる正健の藥料。

【前四味】乳、(華厳)酪(阿含)、生蘇(方等)熟蘇(般若)の四はいづれも法華已前の經でなければ、之を前四味といふ。

「法華經主義」と「諸經主義」

【諸經主義】『法華經が家の佛教とすべきが「法華經主義」それに反して、諸經いづれも同じとするが「諸經主義」。

「別」の三教、部では「華嚴」「阿含」「方等」「般若」の前四味である。




一教の中の當分にて、その含まれた教理中「藏」「通」「別」の三つは權、「圓」の教理は實とするのであるが、全體の上から云ふと、權實混合して居るので、結局は權に歸して仕舞うのである、この『教の上ていふ權實』は「當分の判」次の『部から究めた權實』は「跨節の判」

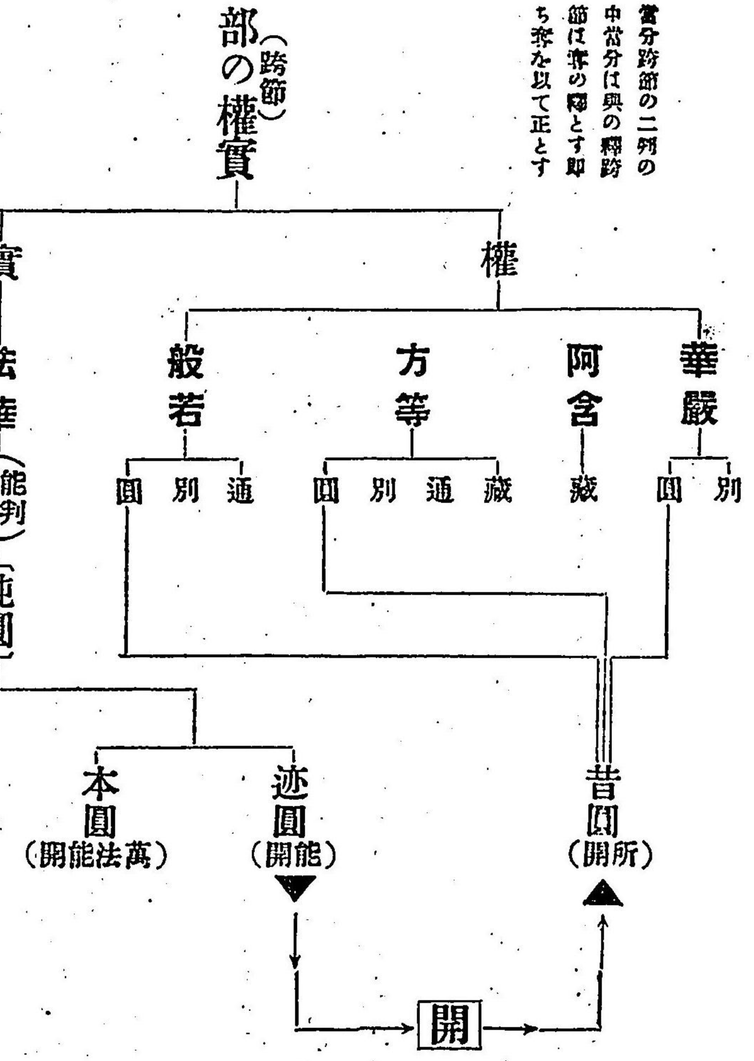
『約教』は「當分」『約部』は「跨節」とあッて、約部の方が正意である と定めてある、然れども通途の佛教家は、往々「約教判」を標準と したがる傾向がある、是れは「法華經主義」と「諸經主義」との差異が然らしむるのである。





【萬法能開】天地一切の諸法の眞理の根本を開きてその功德を顯はすこと。

當分跨節の二判の中當分は與の釋跨節は實の釋とす即ち實を以て正とす



【唯實無權】佛の眞理ばかりで、權理のなき教。
【唯權無實】權理のみにて佛の眞理のなき教。

建築既に成て而も尙「足代」を存する要いづくにありや

即ち跨節正意の教判によッて、法華は「唯實無權」その他の經教は「唯權無實」となッて、畢竟たゞ法華經を說く爲めの手段として說かれたもので、佛の本意は唯專ら八箇年の法華經に存在するが故に、佛教といへば「法華經」のことて、その他の經は準備の經である、法華經が家屋ならは、他の經は足代である、建築するまては入用のものであるが、すでに建築落成して、いよ〳〵住うといふ場合になッて、『前きに用をたしたものだから』とて、足代を除らずに置かうといふのは、隨分間違ッた話である、苟くも佛教を信ずるとならば、長い短い少々の理窟や見地は別として、大體に於て是事から先きに決定して掛らないといふわけは、どうしても無い筈である。

其二……本ト迹

【前十四品】序、方便、譬喩、信解、藥艸喩、授記、化城喩、五百人記、法師、寶塔、提婆、勸持、安樂の十四品。
【後十四品】涌出、壽量、分別、隨喜、法師功德、不輕、神力、囑累、藥王、妙音、觀音、陀羅尼、藥王、普賢の十四品。

權實は邊と中との相對にして本迹は淺と深との相對也

法華經の中に於て、「迹門」と「本門」との二つある、前十四品は迹門で、後の十四品は本門である、迹門とは佛の本地を顯はさない間の說、本門とは佛の本地を顯はして『歷史上の釋尊が、直ちに久遠の大古より成佛した法界唯一の本佛である』といふことを明かした經說で、この二門は前の權と實との相違より一層大きい違目で、權實は邊と中との相對であるが、これは淺と深との比較である、佛の資格が全く變ッて來たから、その教法の精神が全く天地水火の相違を爲して、前の教說は、『根なし艸の水に浮べるようなもの』となッて、佛教の神髓が、始て此本門で發揮された、而して此本門の大教が、文底の觀心を產み出して、『佛の種子』たるべく末代に殘された、それが法華經の醇要たる『妙法蓮華經の要法』である、今左に本迹二門を圖表して置く。

【分經の法】序、正、流通の三段に分けて經典を釋するは諸家みな同じと雖も、法華一經を重々に分ちて、五重の三段を立てたるは、獨り日蓮聖祖の創唱する所にして、此一案に化佛教の大斷賢の根基す、委細は後に在り。

（分經の法は台家と當家と碩異あり後に詳し）.

## 迹門十四品

- 序品第一——（四花六瑞此他六同）——〔序分〕
- 方便品第二——（正說）
- 譬喻品第三——（領解）
- 信解品第四——（授記）
- 藥艸喻品第五——（述成）
- 授記品第六——（授記）——（譬說周）
- 化城喻品第七——（正說）
- 五百弟子授記品第八——（領解）
- 授學無學人記品第九——（述成）
- 法師品第十——（授記）——（因緣周）
- 見寶塔品第十一——（分身來集多寶來證）〔正宗〕
- 提婆達多品第十二——（成佛現證二箇諫曉）
- 勸持品第十三——（發誓弘經濁末豫證）
- 安樂行品第十四——（初心始行末代旁避）

五重三段トハ

- 一代三段
- 一經三段
- 迹門三段
- 本門三段
- 法界三段

なり、詳くは後に在り、今は只一經三段の通釋よりして二十八品の名稱を知らしむるのみ。

## 本門十四品

- 從地涌出品第十五——（本化出現顯本開序）
- 如來壽量品第十六——（久遠實成大事究竟）
- 分別功德品第十七——（佛壽功德增道損生）
- 隨喜功德品第十八——（五十展轉初品因德）
- 法師功德品第十九——（六根淸淨初品果德）
- 常不輕菩薩品第二十——（逆緣下種信毀罪福）
- 如來神力品第二十一——（十大神力塔中別付）
- 囑累品第二十二——（餘深利喜塔外惣付）〔流通〕
- 藥王菩薩本事品第二十三——（十喩稱揚苦行乘々）
- 妙音菩薩品第二十四——（三十四身三昧乘々）
- 觀世音菩薩普門品第廿五——（三十三身三昧乘々）
- 陀羅尼品第二十六——（五番神呪惣持乘々）
- 妙莊嚴王本事品第二十七——（邪見即正誓願乘々）
- 普賢菩薩勸發品第二十八——（四法成就神通乘々）

（諸品の大要を述ぶるは此冊子の頁數の許さゞる所ろ故他に讓る）

要するに一代五十年の經敎は、法華經が正意で、法華經の外に佛敎がないものとなり、その又法華經が、今度は本迹の判で「迹門」が全佛敎を代表して、本門の「成敗」を受け、迹中の經敎を泯亡して、法界は唯一の「本門」のみが、『究竟眞實の佛敎として』殘り、その本門よりして「本化妙宗」の敎觀は成立して來るのである。

同じ佛敎でも、權實を分けないのが多い、本迹を擇び分けるなどいふ事は、尙さら無い、夢にも考へ附かない、良い上にも良く、深い上にも深くと、捨劣取勝して、詮し來り詮し去て、此上もないといふ處まで競詰める揚句、いよ〳〵是れといふ落着を決めるのが「本迹判」であッて此本迹の分け方一つて、別頭の佛敎と、普通佛敎(實は誤り傳へたる佛敎)との差異が出て來る、故に當家では三秘ともに一々「本門」と冠稱して居る。

【本門の成敗】本門の裁定處分といふこと本門は究竟發起なれば、天地間の何物をも進退するなり。

【別頭】頭は類の義、類の別なる境界といふこと、要するに高き位地にして尊常のものに窺ひ得ざる分といふこと。



## 佛の種

【一實】三世にわたッて常に衆善萬德の元となりて變りなきこと。

**其三**……五段相對

權實で一代佛敎を横に正し、本迹で縱に正して、一先づ佛敎の大整理が着いたから、今度はその結着した佛敎の正體から、三世を一貫して法界の精神となるべき『佛の種』を詮出するのである、それに付て更に今一層博く、佛敎內の簡擇のみでなく、宗敎的(勿論本化固有の)立脚地より批評して、周到に廣さと深さとを盡して之を收束して置て、段々に燒點を絞ッて行くのが「五段相對」の敎判である(又は五重相對ともいふ)

〔一〕內外相對　「內」とは佛敎(大小權實を含む)「外」とは外道

〔二〕大小相對　「大」とは大乘「小」とは小乘

〔三〕實權相對　「實」とは法華經(本迹未分)「權」とは爾前諸經

〔四〕本迹相對　「本」とは本門「迹」とは迹門

【種脱】「種」とは佛種の事なり、「脱」とは脱益として成佛得脱の益をいふ、在世の本門は久遠已來のものを脱益せしめたる故「脱」といふ、文底の妙法五字は末法の佛種として留めたる故に「種」といふ。

【本門】文上本門の經。

【在世の本門】佛の法華經を說き給ひし時の本門、即ち「涌出品」より經末迄、就中「涌出品」の半品と「壽量品」の一品と「分別品」の半品。

【文底本門】妙法五字の事。

〔五〕種脱相對　「種」とは妙法五字、「脱」とは本門

又は教觀相對ともいふ(「教」とは本門、「觀」とは妙法五字)

凡夫と外道と相對すれば一對出來るが、たゞの凡夫は何等繼ッた思想も教行もないから、こゝでは凡夫中の精粹ともいふべき「外道」を取ッて、之を佛教と比較し、外道を劣とし佛教を勝とし、その又佛教中で、今度は「大乘」と「小乘」とを相對して、小乘を劣とし大乘を勝とし、大乘の中に於て、法華已前「權大乘」を劣とし、法華經「實大乘」を勝とし、實大乘法華の中で、更に「本門」と「迹門」と相對し、迹を捨てゝ本を取り、更に本門に於て、在世の本門を「文上脱益」として之を捨て、「文底本門」の佛種を取ッて、佛教觀行の燒點と奠めるのが、本化特得の教判たる此「五段相對」である、而して此判は專ら勝劣相望して「捨劣得勝」し、劣りたるを捨て勝れたるを取る批評的判釋である、消極的に反對物を否定して、ありく〳〵と正意の見えるようにした判式で、次の「五重三段」の積極的建設的教判と相待ッて居るのである。

**其四**……五重三段

これは前の「五段相對」より、今一層大仕掛けに、法界を立場として、眞理發動の本因緣から判じ、建設的に包容的に、『法界の中心を求むべく撿尋した取要判』である、先づ三段とは「序分」「正宗分」「流通分」の三段で、これは經典分文の例である、「正宗」を主と立て、その準備を「序分」とし、その應用を「流通分」とするのである、是れは經典詮要の中心點(正宗)を見出すと共に、その來由(序分)と應用とを攷ふる所の基礎釋義である、この三段を五重に疊み上げて、『第五重の三段』を正意と立てるのである。



**法界の中心を定むる取要判**

五重三段の判釋に注意すること深からずしては、佛教の妙味は遂に知る能はざらん、又五重の第五法界三段は、尤も本化佛教の冲霞發揮したるものなり、殊に法界を直に法華經としての分段は他家不共の妙談と謂ふべし。

【法華部】法華經三部を含む、三部とは、開經たる『無量義經』と、本典の『法華經』と、結經たる『觀普賢經』との三部なり。

文底三段の流通に本化聖祖を指すことは、本化縮要の談道なり、然るを人法不對などの種種を試みて深く惟はざるは可慨哉

## 五重三段生起之圖

- ○一代三段（第一重）
  - 序分——前四味（四十餘年の經敎）
  - 正宗——法華部
  - 流通——涅槃部
- ○一經三段（第二重）
  - 序分——無量義經幷序品
  - 正宗——（自方便品至分別品十九行偈）十五品半
  - 流通——（自分別品現在四信至觀普賢經）十一品半一卷
- ○迹門三段（第三重）
  - 序分——無量義經幷序品
  - 正宗——自方便品至人記品八品
  - 流通——自法師品至安樂行品五品
- ○本門三段（第四重）
  - 序分——從地涌出品半品
  - 正宗——壽量品及前後二半
  - 流通——其餘
- ○文底三段（第五重）（又ハ法界三段トモ本法三段トモ云）
  - 序分——三世諸佛一切の佛法
  - 正宗——妙法五字の本法
  - 流通——末法救主本化聖祖



【大通智勝佛】『法華經化城喩品』にある、三千塵點劫已前に佛、此佛の出家せざる前に十六人の子あり、そのうち各々八方に二人づゝ成佛して法を說く、此佛も法華經を說き、また法華經本迹十六王子も法華經を樂說す、その人の第八は彌陀、第十六は釋迦牟尼佛ぞといふ。

【今佛】釋尊のこと。

【五玄】名、体、宗、用、敎の五重玄にて妙法五字は眞理の名なるのみならず、體なり宗なり用なり敎なりといふこと。

斯く五重層々として正意を顯了した上で、扨て立ち還ッて見ると、第五重の「文底三段」に於て、あらゆる經々を包括し來て、法界一大法華經に歸する事左の如くである。

- 文底三段（第五重）
  - 序分
    - 三世諸佛の一切の經々——第一重の三段
    - 十方諸佛の一切の經々——第二重の三段
    - 大通智勝佛の法華經等——第三重の三段
    - 今佛一代五十年の經々——第四重の三段
  - 正宗——壽量文底五玄具足の本法五字「妙法蓮華經」
  - 流通——本佛の體現者末法唯一の救世主本化大聖

即ち妙法中心主義の眼からは、諸の理義法門はすべて「序分」で、その人格的發作即ち實行面が「流通分」となッて、法界の全體が一部の

## 「本門」と「妙法五字」との關係

經典となり了るので、大きいとも廣いとも、壯觀とも美觀とも、この上の教法はあるまい、本化妙宗の大建設面は、此通り絶大である、破折が絶大であると共に、斯る大建設があるのである、世間のワイ〳〵連中が動すると『日蓮は破壞主義の人物だ』とか、『折伏奇激の熱性に驅られて溫かい部分が缺けて居る』とか、能く言うことだが、かゝる深奥にして整正せる大教判のあることを知らないから、そんな淺薄な駄評を加えるのである、愼んで研鑽するがよろしい。

**其五**……本門要付の大教法

さて重々の教判で、いよ〳〵佛教の中心點が判ッた、それに付て、一つの必要なる結論がある、即ち「本門」と「妙法五字」との關係である。

【靈山の顧命】『神力品』の付囑のこと。

【末法生類の機感】末法の衆生の機がこの要法を感ずべくなり居る事。

【下種の機感】末法の機根は、下種の妙法を感ずべくなり居ることは既に善根斷絶の衆生なる故、捨置けば惡道へ墮ち行くべく、惡類なれば、イヤとも教はずに、即ち更めて大善の種を下すべく本化の大聖の出現を感起しつゝあるなり。

【超悉檀】四悉檀中世界爲人、對治第一義の「對治悉檀」でない、この悉檀已上の大對治。

【三佛】釋尊、多寶、十方分身の三佛といふ、『法華經寶塔品』より『囑累品』迄に在座す。

本門壽量の詮し出した『妙法五字』は、即ち本門の產物、开を原理的に言へば、『久遠の本法』、所謂眞理の本體、若し宗教的に言へば、『末法の要法』、則ち唯一佛乘の種子である、而して此「要法」には、左の諸分子を含有して居る。

- ○久遠の本法——理
- ○本佛の智慧——(三身常住)
- ○本佛の慈悲——(三世益物)
- ○靈山の顧命
- ○末法生類の機感
- ○下種の機感
- ○超悉檀の折伏
- ○萬法開顯の能用
- ○本化の誓願
- ○三佛の證誠

人　行　教

本門は要法の産地たる故を以て尊し

『妙法五字の要法』があれば、モハヤ「本門」も「法華經」も入用でないかといふに、修行門では爾ても、教相門では大に入用である、元來本門は要法の産地たるの故を以て、常に此要法の證明たり介添者たるべく必要である、殊に又他の諸〳〵の誤れる教判や宗旨の邪見を救ふために、之が解決者として、全く教相を亡くすることは出來ないのである、故に三大秘法の觀門でさへ、一々『本門の本尊』『本門の戒壇』『本門の題目』と、皆本門の二字を冠して居るのである、即ち教としては本門が本化妙宗の立脚地である、「本門」は上妙法五字に陪し、下一代佛教乃至一切世間の學問宗教までをも進退成敗する所の大政府である、但し法華經一部も、この場合に於ては、本門開顯の實義を經て、所謂本門化して用ゐるのである、是れで『教を知るの綱判』を終へて置かう。



機を知る事

世將に亂れんとする に先ッて之を救ふ是れ濟世治國の機を制したるものなり昔者牛の喘を察して政を愼みたるの類是なり

# 第九章　五綱各論の二「機」（機ヲ知ル事）

## 一　教ト機

機は『可發』で、將さに發せんとする『はずみ』といふ意味であるから、現前に付て言はないで、未然に就て言ふのである、例之胸がムカ〳〵して嘔氣を催して居るのは、即ち吐かんとして居るのであるから、嘔の機ではなくして吐の機である、之を治療する方からいへば、收斂劑を與ふべき機とするのである、人心があまりに氣樂で呑氣なのは、樂天の機とは謂はれないで、是は墮落の機である、即ち常樂主義の教を隱くして、厭世主義を以て救ふべき機とする、若しあまりに厭世的に悲觀に過ぎて、自暴自棄の迷想に陷らんとするものは、即ち常住安樂の主義を以て救はねばなら

區々の機情を還元して一理に會入せしむ

ぬ所の機であるといふように、その現狀から後の成り行くべき機先を察して、これに相應した救濟法を下すといふのが、「教」から見た「機」である、故に衆生の機が佛の教を感じ起して、こゝに教行が成立つのである。

「機」に種々の變化があるから、教行にもそれに應じた變化があッて、種々に法を説いたと言ふのは、機を末から數へたので、それを『機情』といふ、この機情を將護して、その跡を追て説いたのを「對機教」又は「隨他意教」といふて、それは權教の分際である、機を本の方から觀察して、彼の區々の機情を還元して一理に會入せしむる所の教を「佛智教」又は「隨自意教」といふて、それは實教である、實教の機を「直機」といひ、權教の機を「雜機」といふのは、性欲不同は元來機の假狀にして實體でない、『萬法同一性の法本に歸



【應病與藥】病が種々に異る故、それに應じて藥もいろ〳〵と異る如く、衆生の機もいろ〳〵なれば、それに應ずる教も亦まち〳〵なるを要すとて、教法の千差萬別なるを辯護する時に用ふる術語。

入すべきが、生類向上の眞趣』であるから、唯一佛乘の教行には、イヤとも入るべき筈のもので、衆生自身は知らないでも、爾あるべき筈の先天的法則なる處へ、佛の垂教化導も、中間に種々の對機權説を多々用ゐてはあるが、元來初めより一佛乘に歸入せしむるのが目的で、『實』も『權』も皆それが爲の説法であるから、一佛乘の正機を「直機」といふのである、斯くの如く「機」にも本末あることを知らずして、只教法とさへ言へば「對機説法」とか、「應病與藥」とかで推通さうといふのは、あまりに荒量な扱ひかたである。

「應病與藥」といふても、驅除すべき病毒と共に、保持せねばならぬ身體が存して居るから、一面に毒を驅ると共に、一面に健康を與へて行かねばならぬ、その毒の方は『毒で毒を打つ』のであるが、健康を長ずる方は、『滋養營潤の正藥』で、ちゃんと一定した

**權教は驅毒にして實教は營養なり**

眞の營養は養ふと共に毒を驅るの能あり これ「萬病一藥」の妙たる所以也

**渾然たる法界一の惡人なし**

ものである、營養と驅毒と同時に爲し得べき藥があッたならば、是れは萬人が萬人、處を嫌はず時を嫌はず、恆久一定の食餌となすべきものである、「權教」は營養を主としない、驅毒を主とした教であるから、單の「應病與藥」であるが、「實教」即ち法華經は營養を主とした教であるから、「萬病一藥」である、然るをこの「應病與藥」の掟木で以て法華經までも權教と均し並みに扱はうといふのは、『牛乳も石炭酸も同じ』だと考へたようなものである。

佛在世の機類を判ずるは兎に角、滅後に於て佛教を弘め說くといふことに就ては、この「機」と「教」との關係を能く研究しなければならぬのである。

たとひ惡人たりとも、都てみな善根を發すべき機を備へて居るから、その善根の機關を照準に教を垂れるのである、故に教法と



**【無緣】**三緣の慈悲の一、三緣とは、衆生緣、法緣、無緣なり、而して前の二は菩薩も之を有すれども、無緣の慈悲は全く佛特有の大慈悲なり。

しては、いかなる人にても惡人として見ない、たとひ『人殺し』の樣な惡黨でも、これは心の變から生じた假性的動作であッて、素地を研き出せば、必ず善人であるといふ觀察から、必然的に『發眞作善』せしむる樣にと、必ず衆生の善機を票準とするのが通則である、若し善根微少なれば、その缺陷は、佛無緣の大慈の方から補充して發生せしむるのである、末法に於ける「機」は、通例の釋義で行かないのは、この點にある。

## 二　機ノ種類

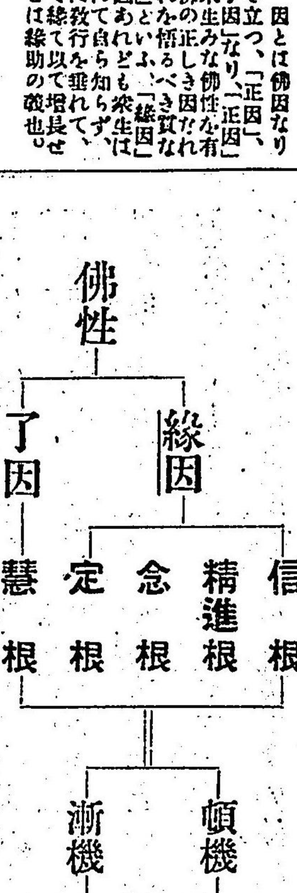
**其一……機　根**

『機の性根』といふことで、根とは善根のことである。善根とは佛果の大善に融合すべき性分の根基で、現には惡習に覆ひ隱され

【善根】　衆生善心の性根にして、理に合ひ聖に入るも、これあるが爲めなり、乃ち「信」「進」「念」「定」「慧」の五根中、特に「信根」を根元と爲す詳くは後の「信行篇」を見よ。

【緣因】　因とは佛因なり佛因に三を立つ、「正因」、「緣因」「了因」なり、「正因」とは一切衆生みな佛性を有てるが成佛の正しき因なれば也、それを悟るべき貫なれるを「了因」といふ、「緣因」とは、正因あれども衆生は迷に蔽はれて、自ら知らず、ゆゑに佛は教を垂れて、行を助て以て增長せしむ、佛因をして緣とは緣助の義也。

て居ても、根は殘ッて居るのであるから、その脈を探ッて行けば必ずその動作を發生して來る、その善根は五つある、即ち「信根」「精進根」、「念根」、「定根」、「慧根」の五根である、小緣にも此のつかまへどころがあるから、それを的に佛は教を垂れるのである、この五根を佛果に契合すべき力因から觀察して、「緣」「了」の二善根に束ね、それから「利」「鈍」を分けて、その利と鈍とに應じて、さては頓漸權實の教は發生したものとなッて居る。






【調熟後の直機】　脫益のこと即ち種々の調熟を歷了て、正しく本種を成脫する場合の機には「まぜもの」なし。

【原始的直機】　下種益のこと即ち始めて佛種を下す時には、純ら一の種のみ要す、決して「まぜもの」なし、故に直機なり。

【超悉檀】　悉檀として普通の衆生教化法より以上根本的の發動の教化、即ち悉檀に拘らぬ化導法なり、故に又は「根本大化」ともいふ也、本化の教導に悉檀の化導もなきに非ず、それ以上に此根本化導を立てるなり、尙後の「四悉」の項にも注す。

## 其二……機類ノ直雜

性根には自ら『樂欲』が伴ッて居る、その樂欲があるから、これを善導すれば修行が起る、修行が起れば、持合せの憶念（假りに智慧として置く）が、この善導された修行と相應して來る、それに本末が岐れる、その末を「雜機」と名け、その本を「直機」と名ける前の頓漸種々の機類は雜機で、その中に非頓非漸單刀直入に、一佛乘に契應したのを「直機」といふのである、「直機」に又『調熟後の直機』と、『原始的の直機』と二つある、脫益でも原始的でも、圖星に一佛乘に直接應對したものは、都て「本門ノ直機」であッて、一佛乘に誘引すべく、種々の準備化導に應じたものは、都て「雜機」とするのである、即ち純法華經の機が「直機」で、非法華經的の機が「雜機」である、雜機は悉檀攝化、直機は超悉檀大化である。と佛

【爲人悉檀】四悉檀の一、悉は梵語なり、檀は梵語なり、施すなり、この四種の施に、一切に法益を施す、也、「爲人」とは、個人の性によりて善を生ずべく誘導する生善益。

【世界】「世界」は、世間の樂欲に隨うて、誘導する機、歡喜益といふ。

【對治】惡法を以て惡法を破する益。

【第一義】眞理に入らしむる益、四悉の事は尙後にもあり。

（漸頓諸緣）
- 雜機
  - 性—爲人悉檀
  - 欲—世界悉檀
  - 行—對治悉檀
  - 智—第一義悉檀
- 直機（根本化導）
  - 在世本門—熟後圓滿の脫益
  - 滅後末法—後番下種（原始的）
    - 悉檀攝化
    - 超悉檀大化

純法華經の機が直機だとすれば、それは在世の壽量品の時と、末法の今とである、然るを淨土宗などでは「機」といふことに力を入れながら、却て機を誤ッて、末法の機類を、『法華本門の直機』でないと判じて、方等の雜機中に入れ、特に念佛往生の機であると判じたのは、教を誤ッたのは言ふまでもなく、却て大に機をも誣る、且つ釋尊の自判に戻た話である。



【即聞即證】聞いて直ぐに眞理を證る。

【修習護持】法を修行し護持して、覺に歸る。

【隨順結緣】法を聽るほどには積極的ならず、法に順ひ、背かれども罪る迄には行かず、後生の大緣を結ぶこと。

【宿種開發】前世に正法に緣を結び置たるが今日こゝに開くこと。

【現種信伏】現世で始て、下種の法を受て即時に信伏する。

【現謗】謗法を現在にあらはして居るもの。

【不現謗】謗法を現じて居れども、いつにても妙法と接すれば、必ず謗法を現すもの。

【本因下種】佛になるべき根本の種子を下されて謗法によりて惡道に一たび墮ちても、かならずこの下種の功德で、未來にこの法によりて救はるゝこと。

其三……機緣ノ順逆

一佛乘專注の直機に、又二つの緣別が分れる、即ち「順緣」と「逆緣」である。

- 直機
  - 順緣
    - 上根（即聞即證）
    - 中根（修習護持）
    - 下根（隨順結緣）
      - 宿種開發
      - 現種信伏
  - 逆緣
    - 現謗
    - 不現謗
      - 本因下種の益を蒙る

「順緣」とは、一乘の化導に浴し、即時に信伏して、法華の妙益を蒙るもの、「逆緣」とは、信伏しないで反對するもの、即ち反對した爲めに、法華の妙益に預る、それが逆緣、所謂『逆ひながら佛

種を種ゑられる縁』といふこと、これに「現謗」とて、『現に毀謗する』のと、「不現謗」とて、『現に毀謗しないけれども、反對して信じない』といふのとの二つがある。

「順縁」は勿論のこと、「逆縁」でも救ひを受ける、どちらかといふと、むしろ逆縁下種が末法直機の大部分である、これは善根斷絶の機を以て充たされた末法の世に於ける、『大善回復』といふ大事業の化導が、法華經の本能なり、末法の時代的要求なりであるから、一網打盡的に『順ふものも反くものも、殘さず漏らさず救う』といふ絶大の化導なるが故に、濟度の對機が斯く限りなく攝盡されるのである。

いくら機に對して安賣主義を取て、『何でも救う』と言ッても、肝心の法が下劣では何にもならぬのである。

【大善回復】大善とは根本善なり佛性ともいふべし。

【安賣主義】やさしいから持てるとのみ敎へて、其法の勝劣得失を棚にあげたるは無責任の化導なり、之を安賣主義といふ。



## 三　機ノ生熟

### 其一……四悉ノ對機

衆生に佛を召く機感があり、佛には衆生を救ふべき機應があッて、感應相發して、こゝに教は起るのであるが、その機には「生」「熟」の異りがあッて、生しきものは、いろ〳〵の手數をかけて誘う、それにいろ〳〵の方便が要る、熟したものには眞實を說く、その因緣の厚薄、及び『導き勝手』に基いての化導が、「四悉檀の化益」といふので、悉檀とは「悉」は『つくす』で治くする義、「檀」は施すといふことで、法を說て益を與へることをいふ、それが「四悉檀」とて四通りある、即ち『どれかの途で濟度して、廣く利益する』から「悉檀」といふのである。

【感應】感は感發性といふが如く、應は應同性といふが如き語、衆生の方にて佛の化導を召き寄せる感と、佛の方にて衆生のこの感を見拔て、其れに應ずるを應と云ふ。

【四悉檀の化益】佛種を種ふるといふ大化導にこそ悉檀化導にては間に合はぬ、勿論、一般化導法にはなれど、この形式に由るなり、即ち根本化と攝化と相扶くるが本化の化導法也。

超悉檀根本大化彌々深くして彌々益を爲す『日蓮の法門は四悉檀を以てときに適ふ』の聖訓是也悉檀攝化は普通化導なり其以上に超悉檀の大化あるが本化別頭の大化儀也

△世界悉檀（歡喜の益（事物調和應用の化導）
△爲人悉檀（生善の益（情を攝護するの化導）
△對治悉檀（破惡の益（理を格守するの化導）
△第一義悉檀（入理の益（自覺證悟入眞の化導）

此四の内の一つで救うか、四つを兼備へて濟度するかの相違はあるが、要するに熟前、熟中、熟了までの間の化益で、之を「悉檀攝化」といふのである、この御厄介に預るものは、概して『熟中の機』若しくは『脫益の機』とするのである、『熟、脫の二機』は、「下種」と較べて同異がある。

【熟前】熟益の初め
【熟中】熟益の最中
【熟了】熟益の終了

【三益】三益を明かすにあらざれば佛化導の始め終りを知る能はざる故、途中より出し拔けの化導には用なき事なれど、法華經の如き出世本懷教にては是非とも之を明かさざれば埒明かざる也。

其二……三益ノ進退

「種」、「熟」、「脫」の三益といふことは、佛化導の大關節であるから根本教法たる法華經では、必ずこれから割出して一切の教法化益を進退するのである。

【根本化導】本佛自覺の大慈より發する根本動の化益、三緣悉檀の中にては無緣の慈悲より發するもの即ち菩薩二乘等の與り知らざる大統化。

「下種益」とは始めて衆生の心田に佛の種を下すこと、「熟益」とはその下した種を漸々に長育て行くこと、「脫益」とはその育て上げた結果、實が成ッて收穫たこと、この三段に經て化益の相を考へるのである、故に衆生の機も、亦この三節に經て進退を考へて行かねばならぬ。

三益
- 種 ――超悉檀根本化導（「悉檀」以上の根本大化）
- 熟
- 脫 ――悉檀的化導（「四悉檀」にて導く局部的化導）

佛種の大善が既に種ゑられてあるは、モー再び種ゑる必要がないから、唯それを育て〳〵行けば可い、その成熟時代の機類は、いろ〳〵に四悉檀の誘化を以て、衆生の雜機に便宜ある權の教法を說

【乘種】教行の緣により複製せられたる、佛乘種子。

【性種】佛種を「性」、「乘」、二つに分つ内、「性種」とは、一切衆生が本來持ッて居る佛性なり、理性に約したる佛種。

●佛種の事は、『本化攝折論』にくはし、就て見るべし。

て導ぐべき機であるが、佛種の斷絶したものに至ッては、悉檀攝化では益を成さない、こゝに於てか、悉檀以上の化導、即ち超悉檀の根本的化導で救ふ事になる、それが「下種益」といふので、即ち『種下し』であるから、よろづ原始的になッて行く、所謂『根本法の發動』といふ大化導である、(こゝで佛種が斷絶したといふたのは「性」「乘」二種の中「乘種」の斷えたことをいふので、「乘種」とは『教行の化緣に複製せられた佛の種』といふことである)。

乘種斷絶の場合には、已むを得ず各個固有の「性種」を挑發すべく、『乘種の電氣力』を注けるのである、どんなものでも佛性を有て居ない者は無い、『それを呼出して、乘種化する』のが、「下種益」における開顯の化導であるから、三益の中には、「下種益」が根元である、今一切世間の機類は、熟益の機でも無く、脫益の機でも無い、全く下種益に預るべき正機であるから、此根本化導が興立しなければならぬ、「下種益」の化導には、『決して他の物を雜へない』のが法則である、種を蒔くに、米を得んとならば必ず米の種なるべく、決して他の種を雜へてならぬと同じ道理である「熟益」となると、種の問題よりは、種を育てるに就ての種々なる成熟方法が必要であるから、一法のみでは往ぬ、肥料も要る、雨も要る、太陽も要る、雜草も取らねばならぬ、霜覆もせねばならぬ、この時代に於ては方便權教のいろ〳〵の道具立が專門となるのである、「脫益」となれば收穫るのだから、もー肥料も雨も要らない、即ち權教方便の入用な時は熟益時代ばかりで「種」「脫」の二機には、必ず一佛乘の法華經一點ばりと究ッて居るのである、但その中で「種益」では原始的に純佛乘を要し、「脫益」では終結的に純佛乘を要するの

**下種の法には他事を雜へず**

【原始的】佛乘種のないものへ、佛種を與へて、本來有ち居る性種の功德を開發せしむ。

【終結的】熟益の時に、種々雜多の多岐的功德法門にあやつられて中心を失ひ根本を忘れたるものに、佛乘種の根本を攷へて、眞元的に一切の功德法門を統一せしめ、終結せしむ。

何故に一般教家は佛教中にかゝる大特殊の最高問題あることを忘れて印度山出しの舊を逐ひ支那仕入の陋を是れ襲はんとのみするにや

異があるだけで、純實化導たることは同一である。

「三益」は、迹門にも本門にもあるが、今は本門の三益を基礎として前後を一貫する、それ故却て迹門も末法も一目瞭然して『佛種化導の大統關節』がありくと曉るのである。(下種のことは『本化攝折論』六八＝七八、及び一七三＝二一〇參看)

いづれの宗門學說にも、此「種熟脫の三益」を言はない、是れが沙汰してない限りは、所謂「化導無始終教」て、即ち『いきなり主義』『出し拔け主義』の教法である、『何の爲に始ッて云何して終ッたか』が判らない、乃ち括りのない、原因不明、目的不明の局部化導といふに歸して了う。

一體普通の佛教談を扱うつもりて居ては、とても本化佛教の事は埒明かない、この『三益談』だけでも尋常地を拔いて居る。



【大通結緣】むかし大通智勝佛の時に第十六の王子としての「釋迦菩薩」が法華經を說て一切の人に下種結緣せしめしたいふ。

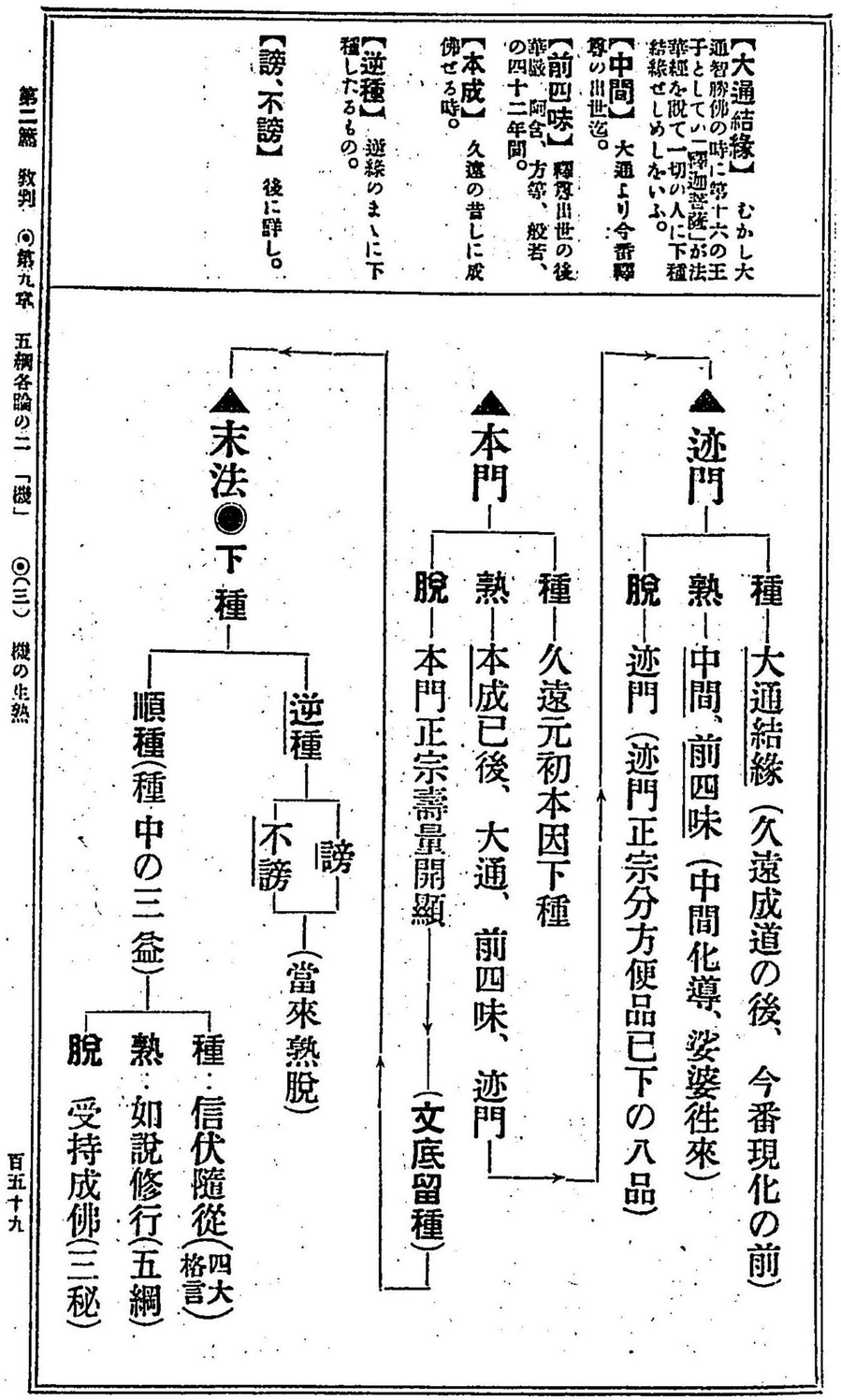
【中間】大通より今番釋尊の出世迄。

【前四味】釋尊出世の後華嚴、阿含、方等、般若、の四十二年間。

【本成】久遠の昔しに成佛せる時。

【逆種】逆緣のまゝに下種したるもの。

【謗、不謗】後に詳し。



【結縁衆】發起、影響、當機、結緣の四衆の一也、結緣衆は其時に其教を信受する能はず、只緣を結ぶもの。

【三慧四悉】聞慧、思慧、修慧の三慧、四悉は前によりし四悉檀。

【五逆謗法】「五逆」とは、殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血なり、此五は大逆罪にして極惡なり、「謗法」は又その上にして正法にそむく罪、即ち一切の罪の根元となる極々の大惡、末法の時代は、五逆や謗法のものが多い故、多分に約して「逆謗の機」という。

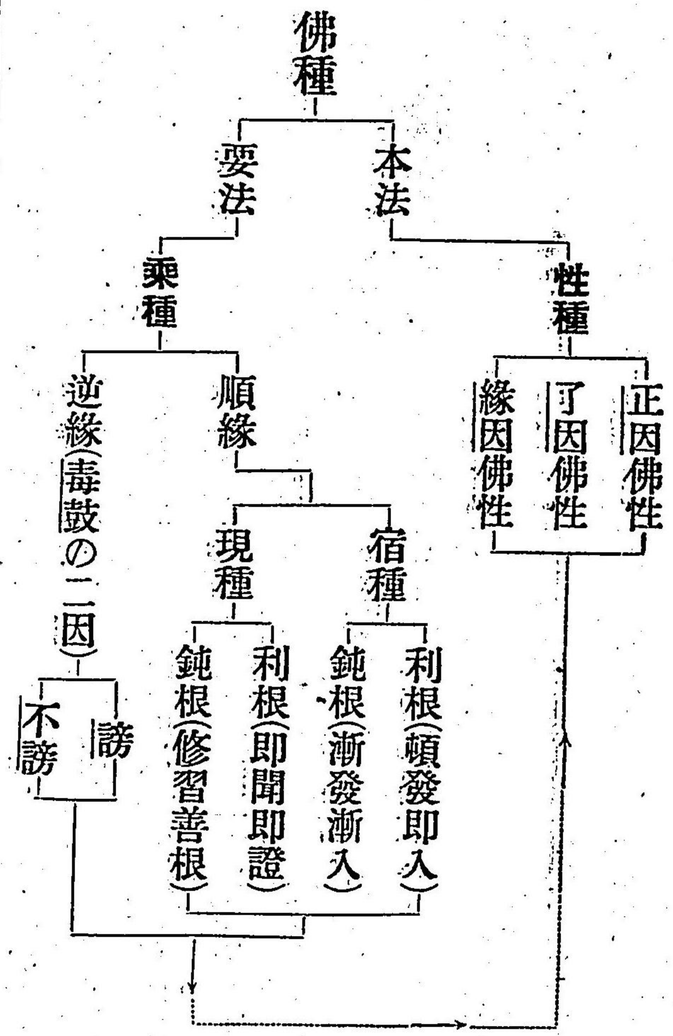
【本善妙種】根本善の妙法佛種。

## 其三……末法下種ノ大化

末法本未有善の機類に對して興す化導は、單純にして原始的なる「下種益」の大化である、即ち在世の「結緣衆」と同く「三慧」「四悉」の益なしと定められた五逆謗法の機であるから、種々雜多の教行では救ひ得ない、即ち專ら佛乘種子たる妙法蓮華經の要法でなければ救ふ能はざる機類である、故に餘經他宗を一切に廢除して、專ら本善妙種の大化導を開くのである。

「本因下種」といふと、『本因の妙法を以て下種する』といふ義、そこで「本因」とは『本有の因』といふ事で、『本來固有の因行』といふ義、『久遠の因』といふ時は、『久遠の本時に修した因行』といふことで、『その時に種を下したといふ義』になる、要するに『本因の行』としての「下種」は本佛の直化であッて、必ず本化の菩薩に由りて爲すべきものであること、猶久遠時代の釋尊が、自ら爲したまひし「下種」と同例である。

【正因了因緣因】「三因佛性」といふ「正因」は固有性に具せる佛性、「了因」は智性に具せる佛性、「緣因」は修行性に具せる佛性、この三因はみな何人も有する故「乘種」一たび之を蒔くすれば即ち發生するなり。




【毒鼓】『涅槃經』に毒鼓の譬あり、毒を鼓に塗りて之を擊つに聞く者みな死すとあり、折伏逆化の鼓によりて、煩惱の賊を死すなり。

【謗、不謗】前の「現謗、不現謗」に同じ、不謗といへばとて、謗法せざる清淨の機といふに非ず、謗法すべき機類にてありながら謗を現ぜざる迄のものを云ふ、譬へば身に發あるもの、發して浮き出てたるが「謗」にて、それが内訌して居るが「不謗」なり『法華經』も結構ゆゑ吾れは謗らず、去りとて他の經にも「よき事」ありなど利口ぶりて云ふものは、却て謗者よりも惡しきなり、古歌に

信せずばせめての事にそしれかしよごれぬきぬの洗はれもせず

とあり味ふべし。

**○下種に就て**

下種の事に付て『本化攝折論』に參考すべき事あり、左に少々引用す。

下種と折伏

『本化攝折論』に云く「本法三段」の流通は本化上行菩薩にして、上行菩薩の所作は何ぞといふに「正しく折伏」であるといふことは、經證教判の歸着であツて、明々白々一點の異議を容るべき餘地がない、然らば本化の立教が全然折伏的なることも亦異論のないところである、但こゝに至ツて何故に折伏が伴うも餘義ないほどの必要があるかといふを究めて、それから、要補とその宗門との次第を詮致して、その所謂「折伏」なるものが、どの程度まで行用せらるゝのであるかを解決して、今日に於ける「攝折」問題を明かにするの要があるので、これに就て本化上行の出現といふことが、實は佛教にも世間にも最上の大議論であることを了して、扱てそが求法垂化の第一條件が折伏であるといふのは、果して何の故であるかを推究すると「下種」の大益」といふことを「應現の主因」としてゐるものであるから、本化折伏の價値を定めるには「下種」といふことのいかばかり正大要件であるかを論究しなければならぬのである、依てこれから「下種」に就て本論の「根底的研究」を試みることゝしよう。

下種の法門

は佛教を根本的に解決する大問題で、且つ義理も深淵であるし、法相の關する所も廣博であるから、その説を盡すといふことは實に容易でないから、解りのよいやうに、迹意入神的に話して、法門の大系を會得せしめるやうに仕よう、乃て先づ三益の名目を、ざツと解いてからにする、三益とは「下種益」「熟益」「脱益」の三で、これは一佛化導の始終といふことを判ずるに要る法門で、即ち法華經的法門である、他經の無得道だといふことを決するのは此判から出るので、二乘作佛と久遠實成を明さないといふのは教體でいふので、なぜそれを明さなかツたかといふのは化意から見るので、即ち此三益で判ずるのである。

化意とは佛が衆生を教化する順序と趣向をいふので、佛の肚の中の献立段取といふ意味で、即ち化導の意匠である、これが必ずこの「種」「熟」「脱」の三を時間的に歴程して大化を全うするのである。

「下種」とは佛の種を下すの謂で「熟益」とはその下した種を調熟扶育すること、「脱益」とはその熟了の結果實ツて解脱するの謂で、必ず此「種熟脱の三益」順序して一化を大成するから「一佛三益」といふので、益とは化益といふことである。而して此三益に長時の際程と短時のとある、即ち大體と部分との差がある、種を下すと其儘に熟し且つ脱するものある、それから段々と丹精を衆れてものにするのもある、短時は横に約し、長時は縦に約していふので、佛の大慈は永久不滅であると共に廣大無外であるから、實は世々にも會々にも味々にも念々にも三益はある、長短いづれにしても種から始ツて脱に終るので、その呼吸が時効的關係になツて居る、それで此三益のおの〱が互に種を起點として種々の要用なる關係を有して居る、その種々なる時間的關係、消長的關係、効益的關係、生起的關係を、個體的に見ずして綜合的に歸納的に見るのが、此法門の所詮で、一佛化導の始終といふのは乃點だ。

一佛の三益を佛に三の別個の益があると解してはならぬ、「三段に經通して來て化導を大成する得益の相」と心得て置けば可い、それが下種の始が知れなかツたり、脱益の終りが判らなかツたり、前後の關係あることに貪着なく、途中から、あの經だの此經だのと抽象的に解釋したのでは、その經の文義は解し得るとしても、その經をお説きになツた佛の用意が解らないから、遂に佛の本意を失却して併せて其經の本能をも狂げて了うことになる、それを一佛化導の始終を無視した邪見といふのである。

又、釋尊一代の經教に此「化導」を明かした經と明かさない經とある、明かした經は法華經で、其他の經は一切これを明かさない、明かさない經は都て未顯眞實の敎である、「請を受けて說く時たゝ是れ敎意を說く、敎意は即ち是れ佛意なり」とあツて、こゝに「教意」といふのは「化意」のを即ち此種熟脱の元意のことである。なぜ種熟脱の事がそんなに貴重だかといふと、佛の慈悲の本づく處と、衆生が得脱する工合と、その成佛の何ものたることゝが、此化意によらなければ判らない、種熟脱の中でも一種の法門」が大切であるだ「熟益」は中間「脱益」は結果てから多分は眼前的であツ、知了し易い透もあるが、「下種」は根元的であツて多く溯ツて見る要がある、即ち原因的問題であるから、顯る幽微に觸して居て、而かも佛法の根元であると共に、亦その正體であるから、尤も要といふべきである。





**時を知る事**

【時の反應】敎にはそれ〴〵の時に相應すべき各種の性質を備へ居ること。

【時の要素】同じ機の機があつまツて、一つの時を爲すゆゑ、機はそれ〴〵の時の要素なり。

## 第十章　五綱各論ノ三「時」（時ヲ知ル事）

### 一　時と敎

時代を知り、時節を察することは、苟くも世を導かうといふものゝ、忽がせにすべからざる所である、抑そも時を知るといふのは『時の何たるを知ツて其の宜きに應ずるの謂ひ』である、敎を知ツても機を知ツても、時を知らねば敎機ともに誤るに至る、剋していへば能く敎を知り機を知るものは必ず時を知る筈である、これに手落があるのは、まだ眞に敎を知り機を知ッたのではない、なぜなれば、「敎」には時の反應を備へ、「機」には時の要素を具へて居るから、それを深刻に且つ圓滿に究めて行けば、おのづから「時」のことを知らねばならぬわけである、即ち敎法宣布といふ上から

見ての「時」と、時そのものゝ云何なる教法を要求するやを知るのである。

「時」には先づ在世と滅後と二大別した上で、當面の必要は『滅後の時』を知るのにある故、之を「正」「像」「末」の三時に分け、又「五箇ノ五百歲」に經て、その時代〳〵に應ずべき教法を知るのである、花の必ず春に咲くといふは、花に於ける開發の時節である、されば花とて、春になッて急に花といふものが生ずるのではない、冬からも秋からも木の中に在ッたのである、只花として咲出たのが春であるので、咲かない時も花には相違ないが、それは準備時代として、正しく咲出た時を『花の本領を發揮した場合』とする、それが時節といふのである、教法もまた斯くの如く、『本領を發揮すべき時節』といふものがある、その時節を造るのは、即ち時代であ

【五箇五百歲】「大乘經」の說、「解脫」「禪定」「多聞」「塔寺」「鬪諍」の五なり、下の本文にくはし。

花としての花は咲ける花なり富士としての富士は晴れわたりたる富士の山なり

る、『時代』といへば、移り變り行く廻轉力を意味し、『時節』といへば、その時代を中心化して、之に應ずる方の教法に屬していふ意味になる。

## 二　時ト機

時機といふことは、世間出世間ともに常によく言ふ語だが、「時」と「機」とは意味が違う、たゞ其兩者の關係が密接して居るからその工合を考へて感應を錯らないようにせねばならぬ、機の聚合して、一種の固定した風習を世に造り出したのが「時」で、又それを救ふべく餘儀なくされて、教法のこれに應ずるのも「時」である、「時」を斷面に見たのが「機」で、「機」を結果から見たのが「時」である。「機」は時を抽象したもの、「時」は機を具體的に觀察したのである。

機の聚合結成せる場合は時なり時の內容組織中の分子は機也

機は個人的なり時は時代的なり時代的は即ち社會的なること を意味す衆意兼備りて化導始めて全し

## 三　時ノ類別

### 其一……正像末ノ三時

佛在世における「時」は、すでに教法の下に攝せられてあるから、こゝでは專ら佛滅後の時、即ち『教法を受くるに就ての次第變遷』を觀察して、『何の時には何の教説が應時の教法である』といふことを知らうといふのである。

佛滅後を「正法」、「像法」、「末法」の三時に分けることは、教法傳布の大勢を察したもので、「正法」とは、佛の遺教が欲損せざる間、これが一千年、「像法」とは、稍精神が衰へて形式だけになッた時代、これが一千年、「末法」とは、精神も形式も倶に失せて、將さに斷滅せんとする時代、これが一萬年、さらに之を細かにして、教法の



【教行證】「教法」と「修行」と「證果」なり、教によッて行を立て行によッて證を得るなり。

【時の清濁】正、像、末は直に時そのものゝ清濁を大觀す、故に三時ともに主として時の清濁を分つ

【教法の興廢】五箇五百年は、前の時の清濁より更に進んで、教法の興廢を主として時を分つ、故に「禪定」「多聞」等といふ。

變遷を豫言したのが、『大集經』の「五箇の五百歳」である、「正法千年」には、「教」、「行」、「證」、の三ともに備はり、「像法千年」には、「教」と「行」とありて「證」なく、「末法」には「教」のみありて「行」も「證」もなしと定めてある。

### 其二……五箇ノ五百歳

五百年づゝて、世界の大勢は一たび廻轉するものといふことは内外古今の歴史がこれを證明し、『五百年にして王者興る』の哲言も、東西其揆を一にして居る、おもふに人間の正味は、ほゞ五十年が一代だから、之を十倍滿數に見て、丁度五百年で、世の一代となるのであらう、されば時の清濁に約した『正像末の三時』より更に之を開して、教法の興廢に約したのが、この『大集經』の五箇の五百歳である。

【佛讖】佛の未來記をいふ、豫言の事。

【佛讖以後】「大集經」には「末法」の初五百年のみを讖して、その後を讖せざるゆゑ、「末法」の初五百年以後を佛讖以後といふ。

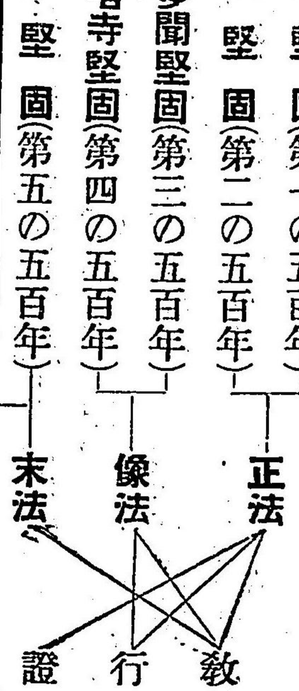
【正像佛教】正法時代、像法時代に弘められたる時代後れの薄佛教。

## 佛讖五紀（五箇五百歳）

- 解脱堅固（第一の五百年）
- 禪定堅固（第二の五百年）
- 讀誦多聞堅固（第三の五百年）
- 多造塔寺堅固（第四の五百年）
- 鬪諍堅固（第五の五百年）

## 佛讖以後の末法

- 正像佛教一切滅盡
- 根本佛教本化利益
- 時代（三秘一乘法 別頭教行證）




「解脱堅固」とは、佛の遺教を行じて證るものゝありし時代、「禪定堅固」とは、解脱やゝ衰へて之を補ふに禪定を以てする時代、禪定とは心を一所に制する練心の行にして、多く山林空閑に道を工夫する座禪をいふ、「讀誦多聞堅固」とは、禪定も衰へ失せて、その缺陷を讀誦の行や學問思惟で補はんとする時代、「多造塔寺堅固」と

【有爲有相】無爲即ち無形的善行を好まず、形式的物質的修福を好むを、有爲有相の好樂といふ。

【白法隱沒】白法とは佛の正法、惡法邪論を惡法邪論などいふに對す、白法隱沒とは佛法が隱れ亡しだること。

【日本でも】天武朝、推古朝、奈良朝、等相繼いで寺塔興起せり、尤も盛なるは東大寺建立より平安朝の初期なり。

は、讀誦多聞も追々不眞面目になり、有爲有相の好樂熾んになりて、頻りに堂塔伽藍を造營して功德に擬したる時代、「鬪諍堅固」とは、具さに『於我法中鬪諍言訟白法隱沒』とありて、佛法の中で互に我見を執て、論議確執し、それが爲めに佛の正法が隱れ沒して了た時代といふことである、一つ〳〵に、『堅固』といふ語のあるのは、『この豫言の通り決して違はぬ』といふ意味であッて、果してこの五大經過の實際は、すべてその通りであッた、第三の五百年には天竺でも支那でも、佛教の學問は實に盛であッた、第四の五百年には、支那でも日本でも、佛教繁昌の國は、いづれも堂塔伽藍の建立が盛んであッた、第五の五百年に至ッては、諸家の諍ひ極點に達して、宗見我執の甚しき、遂に干戈を執りて血を堂塔に塗るに及んだ、眞に『鬪諍堅固』の名に反かない、以上五箇の五